

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (10)
— 『ガーリチ・ヴォルイニ年代記』 (1201 ~ 1229 年)

中 沢 敦 夫, 今 村 栄 一

富山大学人文学部紀要第 70 号抜刷

2019年2月

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (10) — 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』 (1201 ~ 1229 年)

中 沢 敦 夫, 今 村 栄 一

『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』 について

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈の第10回となる本稿からは『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の部分に入る。本連載第1回の解説で既に述べた通り、『イパーチイ年代記』は大きく『原初年代記』(年代としては852 ~ 1117年), 『キエフ年代記 (集成)』(1118 ~ 1200年), 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』(1201 ~ 1292年)の三つの部分から成り、今回から発表する年代記は最後の部分に相当する。

『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』は、ガーリチ公ダニール・ロマノヴィチ(1201年頃~1264年)のもとで書きとめられた公の活動やその周辺についての記録と、ヴォルィニ地方に公座を置いていたヴァシリコ・ロマノヴィチ(1203年頃~1269年)とその息子ウラジーミル・ヴァシリコヴィチ(1249/50年~1288年)の関係者による記録が、のちに編年的に編集されて成立した年代記である。13世紀のガーリチとヴォルィニ地方の政治情勢や、ルーシとハンガリー、ポーランドを初めとする諸外国との関係についての貴重な情報を含んでおり、19世紀初頭からルーシ史の記述や南西ルーシの歴史研究のために利用されてきた。その編纂の過程は、先行する『原初年代記』『キエフ年代記 (集成)』と同様に段階的で複雑であり、ようやく20世紀の40年代になって編集史の研究が本格的になされるようになった。年代記の編集については、連載の最後で詳しく解説することにした。

『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』が利用した資料や文献は多種にわたる。年代記、様々な文書(証書、公文書、軍事報告、外交報告など)、戦いや遠征についての目撃証言、軍事物語、他の年代記からの断片、個人的・地方的な記録などである。それらには記者や情報提供者の名前が明らかになっているものもある。それ以外にも、年代記にはスラブ語に翻訳された文献(ピザンツ諸年代記、ヨセフス・フラヴィウス『ユダヤ戦記』など)からの引用も多い。さらにキエフ・ルーシで書かれた府主教イラリオンの『律法と恩寵についての説教』からの引用も見出すことができる。

本年代記は『イパーチイ年代記』に含まれる先行の年代記と違って、記述の焦点が南西ルーシ、すなわちガーリチとヴォルィニ地方に限られており、当時のルーシの他の地方(ヴラジミル=スズダリ等を中心とする北東ルーシ、ノヴゴロドを中心とする北西ルーシなど)についての言及は少ない。本年代記が扱っている13世紀には、モンゴル軍のルーシの地への侵入があって、

いわゆる「タートルのくびき」が始まった時期であり、また、それ以前から、1169年のアンドレイ敬神公の指示によるキエフ掠奪に象徴されるように、ルーシの中心としてのキエフの地位が弱まり、それぞれの「分領公国」がその独立性を強めていった時期だった。しかも、南西ルーシの北方ではリトアニアが興隆して、現在のベラルーシにあたる地方は漸次リトアニアの版図に組み込まれていった。このような時代情勢の中で、ルーシ全体の出来事を記録する古典的な年代記のスタイルから逸脱した、地方的な独自のスタイルを持つ『ガーリチ・ヴォルニニ年代記』が成立したのである。



『イパーチイ年代記』の写本について

『ガーリチ・ヴォルニニ年代記』の部分のテキストには、写本によって重要な異読が見いだせることから、ここで本年代記を含む『イパーチイ年代記』の写本とその系統について概観しておきたい。

『イパーチイ年代記』の写本(списки)は主なものを挙げれば次の6本がある¹⁾。①「イパーチイ写本」(Ипатьевский) (1420年代末) [Ипт]²⁾、②「フレーブニコフ写本」(Хлебниковский) (1560年) [Хлб]、③「ポゴージン写本」(Погодинский) (1620年頃：フレーブニコフ写本の写し) [Пог]、④「クラクフ写本」(Краковский) (1795-1796年：ポゴージン写本の写し) [Крк]、⑤「エルモラエフ写本」(Ермолаевский) (1710年代：フレーブニコフ写本に近い写本から不注意に写された写本) [Ерм]³⁾、⑥「ヤロツキイ写本」(Яроцкого) (1651年：フレーブニコフ写本系統の独特な改題) [Ярц]。以上の写本の系統を図示すると上図のよ

1) 以下の写本についての記述は、もっとも最新の研究である Клосс Б. М. Предисловие к изданию 1998 г. // ПСРЛ. Т. II. М., 1998. С. Е-N., および А・シャフマトフによる次の詳細な解説に拠った。Предисловие к изданию 1908 // ПСРЛ. Т. II. М., 1998. С. III-XVI.

2) イパーチイ写本からの19世紀の写し(копия)として、「ロシア国立古文書館本」(РГАДА, ф.181, №10: 1814 r)と「科学アカデミー図書館本」(БАН 17.11.9: 1819 r)の2本が現存している。

3) エルモラエフ写本の18世紀の写し(копия)として「ロシア国立図書館本」(РНБ F.IV.237)がある(Словарь книжников и книжности Древней Руси Вып. 1, Л., 1987. С. 236 参照)。

なお、タティシチェフが『ロシア史』を書くにあたって使った「ゴリーツィン写本」(Голицынский манускрипт)と称する写本は、この誤りの多いエルモラエフ写本であることがテキスト学研究によって裏付けられている。Толочко А. П. «История Российская» Василия Татищева: Источники и известия. М., 2005. С. 103, 142-143.

うになる⁴⁾。

以上のことから分かるように、『イパーチイ年代記』(『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』)の諸写本は、「イパーチイ写本」系統と「フレーブニコフ写本」系統の諸写本の二つのグループに大きく分けることができる⁵⁾。

この二つの写本(系統)の間の重要な違いは、『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』部分のすべてについて⁶⁾、「イパーチイ写本」には記事に編年体の創世紀元の年代が記されているのに対して、「フレーブニコフ写本」系統には年代がないということである。当然、元本⁷⁾(оригинал)はどうであったかが問題になるが、これまでの研究による定説では⁸⁾、元本には年代は記されておらず、イパーチイ写本の年代は、その原本(протограф)の筆写・編集が全体として完成したのちに記事の中に一挙に挿入されたと考えられている。それはおそらく14世紀中頃のことで、年代記編纂者はもちろん記事の事件の当事者がすでに生存しておらず、正確な年代決定ができなくなった時期になされた。それゆえ、イパーチイ写本の中の多くの年代は、他の史料などから高い確度で推定される実際の年代に対応していないと説明されている⁹⁾。つまり、『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の最初のかたちは、人物や事件についての記録や物語が集められ、年代順に整理して編集されたが、『イパーチイ年代記』における先行の年代記とは異なり年代の記載はなかったということになる。

年代記載の他にも二つの写本(系統)の間には相違する点が多い。イパーチイ写本が北東ルーシ(コストロマのイパーチイ修道院)で発見され、テキストにも北方ルーシの言語的特徴が見

-
- 4) 作図には、Приселков М. Д. История русского летописания, XI-XV вв. СПб., 1996. С.98 の付図も参考にした。
- 5) 実際、本翻訳が底本とした刊本の校訂に際して、А・Шяфматфは「イパーチイ写本」を正本として採用し、「フレーブニコフ写本」を異本としてその異読を下欄に示している。「ボゴージン写本」からの異読も示されることがあるがまれである。「エルモラエフ写本」の異読は独特だが、元本からは遠く重要でないことから、刊本の巻末に付録として掲載されている。
- 6) 厳密には、『キエフ年代記』の最後の記事の中にも、イパーチイ写本にのみある年代の記載が二箇所認めることができる(л. 242об. の в 6707 と л.243об. の в 6708)。
- 7) この場合の「元本」は、想定されるイパーチイ写本とフレーブニコフ写本の共通の典拠写本のことで、プリショルコフが想定している上図の「南ルーシ年代記集成」(Южно-русский летописный свод начала XIV в.)に相当している。Приселков М. Д. История русского летописания... С. 97-99。
- 8) Грушевський М. С. Хронологія подій Галицько-Волинської літописі // Грушевський, Михайло Сергійович. Твори: у 50 т. Львів, 2005. Т. 7., С.327-329; Черепнин Л. В. Летописец Даниила Галицкого // Исторические записки. М., 1941. № 12. С. 230; Орлов А. С. О Галицко-Волынском летописании // Труды Отдела древнерусской литературы. Т. 5. М.; Л. 1948. С. 15-17。
- 9) Котляр Н. Ф. Композиция, источники, жанровые и идейные характеристики Галицко-Волынской летописи // Галицко-Волынская летопись: Текст. Комментарий. Исследование. СПб., 2005. С. 34。

いさせること、それに対してフレーブニコフ写本には南ルーシの言語的特徴が顕著であることは大きな違いではあるが、どちらが元本をより正確に伝えているかという問題になると全体として判断を下すことは難しい。これまでの校訂本の多くが「イパーチイ写本」を正本として「フレーブニコフ写本」を異本としているのは前者の成立が古いこと、つまり元本に対する時間的な近さによっており、内容的な近さ（正確さ）とは別の問題である。そのため、本連載の翻訳にあたっては正本のみならず、フレーブニコフ系写本の読みにも十分に注意を払い、異読がある場合には必要に応じて注釈で言及することとした。

なお、フレーブニコフ写本には、欄外に17～18世紀になされた多数の書き込み(приписки)がある¹⁰⁾。個々の文言は短いものの、年代記本文に対する解説や解釈になっていることもあり、読解に際して有益であることから、翻訳と注釈においても必要に応じて参照することにした。

『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の翻訳と注釈について

本連載から新しい部分に入るにあたって、あらためてその翻訳と注釈の方針について確認しておきたい。

連載の基本的な方針は従来通りで¹¹⁾、底本は引き続きA・シャフマトフ校訂の「ロシア年代記全集」第2版(1908年)¹²⁾を用いる。底本がイパーチイ写本を正本(基本写本)としていることから翻訳も原則的にその読みに依拠したが、異本のフレーブニコフ系写本の読みが原本に近いと判断した場合には、そちらの読みを採用し、その旨を注釈で断った¹³⁾。

今回から、原文の記事の内容と編集上の単位を勘案した上で、訳文に区切りをもうけ、それぞれに記事内容を要約した小見出しを付すことにした。また、小見出しには記された事柄が起こったと考えられる年代を付した。上述のようにイパーチイ写本に付されている創世紀元の年代はテキスト全体の形が整った後に加筆されたものであるため、その信頼度は低く、年代の推定は慎重になされる必要がある。小見出しの年代はフルシェフスキの年代研究¹⁴⁾をはじめとする諸研究を参照しながら訳者の判断で付した。年代決定が難しいもの、異説があるものについては適宜注釈でその旨を記した。言うまでもなく、区切りの設定、小見出しの要約、年代決定

10) フレーブニコフ写本の校訂刊本の中にもこの書き込みは再現されている。Галицко-Волынская летопись: Текст. Комментарий. Исследование. СПб., 2005.

11) 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(1) — 『原初年代記』への追加記事(1110～1117年)」『富山大学人文学部紀要』(61号, 2014年8月) 239-240頁。

12) Полное собрание русских летописей. Том II. Изд. 2-е.: Ипатьевская летопись. СПб., 1908.

13) 翻訳では、フレーブニコフ系写本だけにあるまとまった異読は{|}に示している。

14) Грушевський М. С. Хронологія подій Галицько-Волинської літописі // Грушевський, Михайло Сергійович. Твори: у 50 т. Львів, 2005. Т. 7., С. 327 - 387.

(推定)には翻訳・注釈者の解釈が大きく反映している。

『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』には幾つかの現代語訳がある。1989年に刊行されたL・マフノヴェツによる『イパーチイ年代記』のウクライナ語訳¹⁵⁾は、訳文・注釈のみならず索引が充実しており、引き続き主要な参考文献として利用した。O・リハチョヴァによるロシア語訳は注釈付きで1981年に『中世ロシア文学集』の13世紀の巻¹⁶⁾で刊行され、1997年の新しいシリーズに再録された¹⁷⁾。また、1973年にはG・パーフェキイによって解釈を重視した英訳が発表されている¹⁸⁾。以上の三種類の翻訳はいずれも本翻訳と同じく底本をシャフマトフの校訂本に拠っており、本翻訳に際しては適宜参照した。

また、2005年にウクライナの研究者たちによってフレーブニコフ写本¹⁹⁾の校訂テキストが刊行された²⁰⁾。これは、後代の書き込みを含めてこの写本を忠実に翻刻したものである。現代語訳は付されていないものの、N・コトリヤールによる詳細で独自の注釈が付されており、本翻訳の際には大いに参考にした²¹⁾。

15) Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К., 1989. 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』は С. 368-452 に収録されている。なお、ウクライナ語訳文には、イパーチイ写本の丁付けが修正された頁表記によって参照されている。

16) Галицко-Волынская летопись. Подготовка текста, перевод и комментарий О. П. Лихачеваой / Памятники литературы Древней Руси. XIII век. М., 1981. С. 236-425, 562-602. なお、この刊本のテキストがИзборникのサイトで、イパーチイ写本のテキストとして公開されているが、厳密には校訂者による他写本からの補正が入ったテキストである。http://litopys.org.ua/oldukr/galvollet.htm

17) Галицко-Волынская летопись / Библиотека литературы Древней Руси. Т. 5: XIII век. СПб., 1997. С. 184-357, 482-515. 1981年のПЛДР版のテキストと翻訳に僅かな補訂と注釈の補足が加えられているが、基本的には再録である。

18) George A. Perfecty, The Galician-Volynian Chronicle. Munich: Wilhelm Fink Verlag, 1973.

19) フレーブニコフ写本のファクシミリ版は次の刊本がある。The Old Rus' Kievan and Galician-Volhynian Chronicles: The Ostroz'kyj (Xlebnikov) and Četvertyns'kyj (Pogodin). Codices (Harvard Library of Early Ukrainian Literature. Vol. VIII). Harvard University Press, 1990, P. 307-391. また、このファクシミリ版から独自に起こしたテキストが、次のИзборникのサイトで公開されている。http://litopys.org.ua/oldukr/galvxlleb.htm

20) Галицко-Волынская летопись: Текст. Комментарий. Исследование / сост. Н.Ф. Котляр, В. Ю. Франчук, А. Г. Плахонин. под ред. Н.Ф. Котляра. СПб., 2005.

21) なお、1930年代にソ連でロシア語(Древнерусские летописи. / Перевод и комм. В. Панова. Ред. В. Лебедева. Статьи В. Лебедева и В. Панова. М.; Л., 1936. (Серия «Рус. мемуары, дневники, письма и материалы»)). С. 246-313)とウクライナ語(Галицко-Волинський літопис / переклав і пояснив Т. Коструба. Ч. 1, С. 99-128 Львів. 1936; Ч. 2, С. 3-121. Львів. 1936)の翻訳が試みられているが、抄訳であったり注釈が少ないなど不十分な点が多い。また、前者のロシア語訳をもとにした「ガーリチ・ヴォルィニ年代記」の邦訳(抄訳)も存在するが(除村吉太郎訳『ロシア年代記』(弘文堂書房, 1943年:第3版, 1946年)(復刻版『ロシア年代記 ユーラシア叢書30』原書房, 1979年, 509-559頁)、現在の研究ではこれを参照する必要はない。

なお、多数に及ぶ本年代記および13世紀のガーリチ・ヴォルィニ地方の歴史に関する研究文献については、それぞれの記事にほどこした注釈の中で参照を行っている。

翻訳と注釈

【ロマン公支配の始まり】

【715】 6709 [1201] 年¹⁾。大いなる公ロマン²⁾ [I11] の公支配の始まり。〔かれは〕ガーリチ公であり、全てのルーシの地を専制支配した³⁾。

【ロマン公への讃詞】

大いなる公にして、永遠に記憶されるべき全ルーシの専制支配者⁴⁾ ロマン [I11] の死後⁵⁾。

〔ロマンは〕知力の叡智によってすべての異教徒の民に勝利し、神の戒律に則って【716】〔遠征を〕行っていた。なぜなら、獅子の如く異教徒を討つべく突撃し、大山猫の如く怒りを発し、

-
- 1) この年紀はイパーチイ写本にのみ記されており、フレーブニコフ系の写本にはない。以下も同じ。
 - 2) ロマン・ムスチスラヴィチ [I11] 公の父は、ヴォルィニ公ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] (1168 ~ 69 年キエフ大公) で、かれの母は、ポーランドのボレスワフ三世 (曲唇公) の娘で、クラクフのカジミェシュ二世 (正義王) の姉妹にあたるアグネシカだった。
ロマンは、1155 ~ 1162 年の間に生まれたと考えられており (ドムプロフスキによれば 1155 年末 ~ 1156 年 [Домбровский 2015: С. 262])、ポーランド史料によれば幼少期をポーランドで過ごしたという [Щавелева 1990: С. 109]。1168 ~ 1170 年にノヴゴロド公、1170 ~ 1199 年にヴラジミル=ヴォルィンスキイ公。1199 年からはガーリチ公を兼ねて、ヴォルィニ地方とあわせて広大な領地を有し、ガーリチ・ヴォルィニ公としての地位は 1205 年の死まで続いた。
ガーリチ・ヴォルィニ公として実力をつけたロマン [I11] は、キエフの公座を狙うようになり、1202 年にはキエフ公リュウリク [J2] を退位させ、自分の傀儡である従兄弟のイングヴァル・ヤロスラヴィチ [I22] をキエフ公に据えた。さらに 1204 年にはリュウリク [J2] に剃髪を強いて修道院に送り、ロマン自らキエフの地を占領して、短期間公座に就いている [Котляр 2005: С. 179]
 - 3) この段落の「大いなる公にして~ロマンの死後」の表題はイパーチイ写本にのみある文言。直前に「ロマンの公支配の始まり」の文言があることから、すぐに「死後」に記述が跳ぶのは不自然である。本年代記では、ロマン [I11] の没年である 1205 年 (次注 5 参照) から実質的な記事が始まっていることから、先の「公支配の始まり」(начало княжения) と銘打った表題の方が、後代の挿入である可能性もある。もしくは、この表題のあとに、1199 年にガーリチ公になってから 1205 年に没するまでのロマン [I11] 公の事蹟の記事が当初にはあったが、のちに欠落したという説明も従来からなされている [Perfecy 1973: p. 127. n.1]。
 - 4) この「全てのルーシの地の専制支配」(державного бывша всей русской земли) の表現は、すぐあとにも「永遠に記憶されるべき全ルーシの専制支配者」(приснопамятный самодержець всея руси) として繰り返されており、ロマンがキエフの公座に一時的にでも就いたことを踏まえているのだろうが、誇大な表現であることは否めない。あるいは、ガーリチを「ルーシの地」と位置づける、年代記記者の独自の立場の反映と見ることもできる。
 - 5) ロマン [I11] の死については、ここでは 1201 年の記事として言及されているが、ポーランド史料 (ヤン・ドゥウゴシュ 『ポーランドの歴史』) によれば、1205 年 6 月 19 日にザヴィホスト (Zawichost) 近郊でのポーランドのリャシコ白公=コンラート一世の連合軍との戦いで戦没したとされている (下注 49 参照)。

鰐の如く相手を滅ぼし、鷲のごとくかれら〔異教徒たち〕の地を横切り、野牛の如く勇敢であったのだから⁶⁾。〔かれは〕自分の父祖であるモノマフを慕っていた。

【モノマフ死後のポロヴェツ人オトロクのカフカスからの帰還とその息子コンチャクの誕生の挿話】

かれ〔モノマフ〕は、ポロヴェツ人と称される、異教のイシュマエル人⁷⁾(измаилтяны)を滅ぼし、オトロク⁸⁾(Отрокъ)をアバジン人⁹⁾(обезы)のところへ、〔さらに〕鉄門(жельзная врата)の向こ

6) 支配公が持っている優れた資質を動物に喩える表現は、『原初年代記』6472(964)年の項にスヴァトスラフ・イーゴレヴィチ [03] について「狩猟豹のごとく軽々と駆ける」(легко ходя, аки пардусъ)という文言があり、翻訳ビザンツ年代誌の修辞を取り入れたものと考えられている。この個所も同様の修辞法の借用が想定され、「獅子」(лев), 「大山猫」(рысь)は「ヨハネス・マララス年代誌」「ハマルトロス年代誌」からの借用が想定され、「鰐」(коркодил), 「鷲」(орел), 「野牛」(тур)についても「アレクサンドル大王物語」「ヨセフス・フラヴィウスのユダヤ戦記」に類似の表現が認められる ([Orlov 1926: C. 104] 参照)。

7) ポロヴェツ人に対する「イシュマエル人」(измаилтяны)の呼称は『原初年代記』1096年の記事にあり、その後の年代記で繰り返し使われている。[イパーチイ年代記(7):247頁, 注472] 参照。

8) 「オトロク」(Отрок)の名は、Агарак, Атракとも表記され、グルジアのダヴィド四世建設王(在位1089～1125年)の伝記にも記されており、そこではかれが、ドネツ＝ドン川水系に展開していたポロヴェツ人族長シャルカン(Шараган, Шарукан)の息子であり、ダヴィド王の妃グランドゥート(Гурандухт)がこのオトロクの娘であったと記されている [Жития царя царей Давида: С. 284]。

かれが率いていたポロヴェツ人集団は1111年のスヴァトボルク [B3] とモノマフ [D1] によるドネツ川遠征(下注10)に敗北してカフカス山脈へと南下し、その後、1118～1125年にはダヴィド王のもとで軍事遠征に加わっていた [Мургулия, Шушарин, 1998]。王とオトロクの娘の結婚も、そのような同盟関係の結果と考えることができるだろう。

9) 「アバジン人」(обезы)は、グルジアに居住していたアブハズ族(abaza-abkhaz)の一派で、カフカス山脈の北斜面およびクバン川(Кубань)左岸支流のウルプ川(Urup)・ラバ川(Laba)上流域に居住していた。『キエフ年代記』6662(1154)年の項には、当時のキエフ公ムスチスラフ [I1] の再婚相手として、アバジン人の王女が選ばれ、息子のイジャスラフ [D112:I] が出迎えに行った記事があり [イパーチイ年代記(5):264頁, 注205], 12世紀にキエフ・ルーシとの外交関係を持っていたことがわかる。

うへと追い出した¹⁰⁾。スィルチャン¹¹⁾ (Сърчан) はドン川に残り、魚で命をつないでいた¹²⁾。

そのとき、ウラジーミル・モノマフ [D1] は黄金のかぶとでドン川〔の水を〕飲み¹³⁾、かれら〔ポロヴェツ人〕の地をすべて略取して自らのものとし、呪われたハガル人¹⁴⁾ (агаряны) を追い出したのだった。

ウラジーミル [D1] の死後¹⁵⁾、スィルチャン (Сырчан) のもとにオリ (Орь) という琴弾き¹⁶⁾ が一人残った。かれ〔スィルチャン〕はかれ〔オリ〕をアバジン人のもとへ派遣して、こう言った。「『ウラジーミル [D1] は死んだ。戻ってこい、兄弟よ、自分の地へと出発せよ』。かれ〔オトロク〕に〔この〕わしの言葉を言え、かれにポロヴェツの歌を唱え。もしそれでも〔かれが帰郷を〕望まなかったら、エフシャン¹⁷⁾ (евшань) という名の草の香りを嗅がせよ」。

10) この「鉄門の向こう」(за желъзная врата)の「鉄門」の場所についてはデルベントとするもの、ダリエル・ゴルジュ(峡谷)とするなど諸説あるが、全体としてはカフカス山脈を北から越えてグルジアに入る入り口であることは共通している。

『原初年代記』『キエフ年代記』によれば1103~1116年の間モノマフは何度もポロヴェツ討伐遠征を行っているが、これは『キエフ年代記』6619(1111)年の記事で詳述されている、スヴァトボルク [B3] とモノマフ [D1] によるドン川(実質的にはセヴルスキイ=ドネツ川)への遠征を指しているだろう。このとき、遠征隊はオトロクの父親シャルカン(Шарукан)(上注8参照)の拠点と考えられるシャルカニ(Шарукань)を征服しており(『イパーチイ年代記』(1):245頁,注16)、シャルカン一族との戦いが行われ、モノマフ等はこれに勝利したと考えてよいだろう。

11) 「スィルチャン」(Сърчан, Сырчан)については、史料ではこの個所が唯一の言及。琴弾きオリに託したメッセージの中でオトロクに対して「兄弟よ」(брате)と呼びかけていることから、シャルカンの息子でオトロクの兄弟にあたるというのが定説になっている。

12) この「ドン川」は現在のセヴルスキイ=ドネツ川のこと、スィルチャンはモノマフ公等による遠征軍に敗北して、大規模な掠奪を受けたのちも、父親の支配地であるドネツ川下流右岸地域に残って、「魚で命をつなぐ」(рыбою оживьшю)という苦難の生活を強いられたということ。

13) 「黄金のかぶとでドン川〔の水を〕飲む」(пити золотом шоломомъ Донъ)の表現は、『イーゴリ軍記』で繰り返されている「かぶとにてドン川を飲み干す」(любо испити шоломомъ Дону)[木村1957-1979, 1983: № 13, 102]のドン川を征服することを意味する文言と同類であり、英雄叙事詩的な表現が取り入れられたもの。これは明らかに、ドン川(ドネツ川)の戦いにおけるモノマフ公の戦勝を指している。

14) 「呪われたハガル人」(оканьныя агаряны)の「ハガル人」の呼称は、「イシュマエル人」(上注7)と並んで、年代記に常用されている(『イパーチイ年代記』(7):247頁,注473)参照)。

15) ウラジーミル・モノマフの死は、1125年5月のこと(『イパーチイ年代記』(2):295頁,注60)。

16) 「オリという琴弾き」(гудыч Орь)は、グースリ(гусль)と呼ばれる弦楽器を伴奏に叙事詩を唱う宮廷歌人だろう。このかれについての言及によって、オトロクの帰還とコンチャクの誕生についての場違いな内容のこの断片は、おそらくオトロク=コンチャク一族によって伝えられた歴史叙事詩がルーシに伝えられ、モノマフ公の遺業を偲ぶ文脈の中で年代記に挿入されたと考えられる(次注20も参照)。

17) 「エフシャン」(евшань, емшан)は古チュルク語 jaušan に語源をもつステップに生えるヨモギ科の草の名で、バシキール語のユシャン(юшан)、キルギス語のジュサン(джусан)に対応している[Срезневский, Т. 1, С. 807]。ロシア語では полынь(ラテン語 Artemisia)(和名ニガヨモギ)に相当する。

この者〔オトロクは〕は戻ることも、聴き従うことも望まなかったので、草をかかれに与えた。この者は香りを嗅ぎ、泣き出して言った。「そうだ、他人の〔地で〕栄光を手にするよりも¹⁸⁾、自分の地に骨を埋めるほうがましだ」。そして、〔オトロクは〕自分の地へやって来た。そのかれから生まれたのがコンチャク¹⁹⁾ (Кончак) であり、かれは肩に鍋を担いで歩き、スーラ川 (Сула) 〔の水を〕を汲み尽くしたのだった²⁰⁾。

ロマン公 [I11] [717] はそれゆえに〔モノマフに〕倣って、異族どもを滅ぼそうと力を尽くしたのだった²¹⁾。

-
- 18) グルジアの史料によれば、オトロクは王ダヴィド四世からセルジューク・トルコとの戦争の援軍として招かれ、4万もの軍勢とともにグルジアにやって来ると、参戦して王の勝利に貢献している [Жития царя царей Давида: С. 298]。また、オトロクはダヴィド王の岳父となるなど (上注 8)、グルジアの地では「栄光」の中にあつたことは疑いない。
- 19) 「コンチャク」(Кончак) は、ドネツ川下流域のポロヴェツ人部族連合の有力な首長。年代記における初出は 1172 年 ([イパーチイ年代記 (6):287 頁, 注 614]) で、ダヴィド公 [J3] の同盟者として記されている。12 世紀の 70～80 年代の年代記記事によれば、かれは単独の遠征やルーシ諸公との同盟を繰り返し、1185 年のイーゴリ・スヴァトスラヴィチ [C432] の遠征物語には主要な人物の一人として描かれている。この個所が年代記におけるかれについての言及の最後の個所であり、この頃はすでに没して、過去の「英雄」として称賛されていたのだろう。
- 20) 「肩に鍋を担いで歩き、スーラ川 (Сула) 〔の水を〕を汲み尽くした」(снесу Сулу пѣшь ходя, котельнося на плечеву) の原文の韻律構成や英雄叙事詩的イメージからみて、この部分はコンチャクについての当時の口承文芸 (叙事詩) を利用したと考えられる。例えばブイリーナには、勇士ドブリニヤと戦うタタール人たちの姿を「その肩にのっている頭はまるでビール桶のようだ」(А и головушки на плечах как пивной котел)[Гильфердинг 1950: № 80 (Добрыня и Василий Казимиров)] と形容するものがあり、この個所との近縁性がうかがわれる。「スーラ川を汲み尽くす」(снести Сулу) の表現は、『イーゴリ軍記』で繰り返されている「かぶとにてドン川を飲み干す」(любо испити шеломомь Дону)[木村 1957-1979, 1983: № 13, 102] のドン川を征服することを意味する文言と類似であり、ここでは、ルーシの地とポロヴェツの地の境界となっていた「スーラ川の周辺地を征服する」を意味する比喩であろう。
- 21) ロマン [I11] のポロヴェツ人に対する遠征については『ラヴレンチイ年代記』6710(1202)年の項に「この年の冬ロマン公 [I11] はポロヴェツ人を討つべく遠征し、ポロヴェツ人の移動幕舎を略奪し、多くの捕虜を連れ帰り、多数のキリスト教徒たちをかかれら〔ポロヴェツ人〕の虜囚の身から解放した。ルーシの地には大いなる喜びがあつた」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 418] という記事がある。これは、ニケタス・コニアテスの『年代記』(Chronike Diegesis) の 1200/1201 年の項にある、ロマンのビザンツに対する軍事支援についての記事「ワラキア人がクマン (ポロヴェツ) 人とともにローマ領に侵入し、最良の領地を荒廃させた (...) キリスト教のルーシの民の支援がなければコンスタンティノポリスの城門まで達したかもしれない (...) まさにガーリチの公ロマンが速やかに軍備をととのえ、勇敢で多数の従士たちを集め、クマン人を襲撃し、留まることなくかれらの地に入り、その地を掠奪して荒廃させた。かれは、キリスト教の栄光と偉容のためにこのような襲撃を数回繰り返した。 (...) かれはクマン人の襲撃を食い止めた」[Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2: С. 289] に対応していると考えられる。

【ロマン公の二人の遺児とルーシの地の騒乱：1205 年】

〔ロマンの死後〕大いなる騒乱が起こった²²⁾。ルーシの地にはかれの息子が二人遺された。一人は 4 歳で、もう一人は 2 歳だった²³⁾。

6710 [1202] 年

【キエフ公リユーリク [J2] のガーリチ討伐遠征とミクーリンの合戦：1205 年秋²⁴⁾】

リユーリク [J2] はポロヴェツ人と多くのルーシ人を集め、ガーリチに〔攻めるために〕到来した。〔リユーリクは〕ロマン [I11] を恐れて修道士の位階を受けたが、その位を棄て去ったのだった²⁵⁾。

22) このルーシの地の「大いなる騒乱」(велик мятеж) について、コトリャールは、ガーリチ・ヴォルィニ公領における貴族たちの反乱と解釈している。

ロマン [I11] は 1197 年に最初の妻ブレドスラヴァ (当時キエフ公のリユーリク [J2] の娘) を離縁し [ПСРЛ Т. 1: Стб.412-413], 1199 年 ~ 1200 年に、のちにダニールとヴァシリコの母となる女性と結婚している (この女性が以下の年代記記述で「ロマンの公妃」(княгинья) として活躍する)。コトリャールの詳細な検討によれば、かの女の出自についてふれたはっきりとした史料がなく、ハンガリー王室の出とするもの、ポーランド公家の出身とする説があるがともに論拠は薄い。また、ビザンツの皇族もしくは貴族の出身との説も根拠に欠ける。さらに地元ガーリチ・ヴォルィニ公領のいずれかの公族(分領公)の出という説も出されているが、政略結婚の利害関係の現実に対応しないとしている。諸説の検討のうち、コトリャールは、この結婚の時期がロマンによるガーリチ公領とヴォルィニ公領の統一の時期に重なることに注目して、ヴォルィニの貴族層と融和するために、代表的な貴族出身者 (例えばミロスラフ一族) との結婚の可能性を指摘している [Котляр 2005: С.184-188]。

他方、А・ゴロヴェンコの推論では、かの女は 1200 年 5 月のロマンのコンスタンティノポリスへの使節団によってビザンツから連れられてきた女性で、高位のビザンツ貴族・皇族の出自と思われる。1200 年 8 月 ~ 10 月に結婚したと推定される [Горовенко 2011: С 83-84, 86]。

23) ロマン [I11] の死のとき (1205 年 6 月) に、長男のダニール [I111] が「4 歳」なら、生年は 1201 年と推定でき、次男ヴァシリコが「2 歳」なら、生年は 1203 年頃と推定できる [Домбровский 2015: С.310-313, 326]。そのことから、この記事の実際の年代は 1205 年と考えることができる。

24) これ以降の記述は、イパーチイ写本に記された紀年と、『ラヴレンチイ年代記』『ノヴゴロド第一年代記』やポーランド史料など、他の史料から推定される年代との差異が著しい。そのため、小見出しにはフルシェフスキイの論文「ガーリチ・ヴォルィニ年代記の事件の時系列」[Грушевський 2005] や現代語訳の諸注、諸研究で考証されている年代を参考に記した。

25) 『ラヴレンチイ年代記』6714(1206) 年の記事に「リユーリク [J2] は、自分に剃髪を強いたロマンが [I11] が殺されたことを聞くと、修道士の衣をみずから脱ぎ捨てて、キエフに坐した」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 425-426] と記されており、これに対応している。フルシェフスキイは、リユーリク [J2] のこの最初のガーリチ遠征は、ロマン [I11] の死の直後の 1205 年秋におこなわれたとしている [Грушевський 2005: С. 332, 379] ([Котляр 2005: С. 188-189] も参照)。

かれ〔リユーリク〕はガーリチに到来すると、ガーリチの貴族たち、ヴラジミル²⁶⁾〔の貴族たち〕が、セレット川²⁷⁾ (Серет) 河岸のミクーリン²⁸⁾ (Микулин) で〔リユーリクを〕迎え〔撃つ〕た。かれら〔貴族たち〕は一日中セレット川の河岸で戦闘を行い、多くの者が負傷した。かれら〔貴族たち〕は持ちこたえられずに、ガーリチ〔の城市〕へと引き上げた。そしてリユーリク [J2] がガーリチへとやって来た。しかし〔リユーリクは〕何も得ることができなかった。

【サノクにおけるダニール [I111] とハンガリー王アンドラーシュ二世との同盟：1205 年夏～初秋】

これが起こったのは、ロマン [I11] の死後、〔ハンガリー〕王がサノク²⁹⁾ (Санок) において自分の義理の兄弟の妻 (ятровь) と会合したからだった³⁰⁾。〔王は〕ダニール [I111] を自分の愛しい息子として受け入れ³¹⁾、かれ〔ガーリチのダニール〕のところに守備部隊を残してやったのだから。それはすなわち、大いなる盲目のモケイ³²⁾ (Мокьи), コロチュン (Корочюн), ヴォルプト (Волпт) とその息子ヴィトミール (Витомир), ブラギニャ (Благиня)³³⁾、そして他の多くのハンガリー人だった。ガーリチ人は何もすることができなかった。なぜなら他の多くのハンガリー

26) 本『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の翻訳と注釈では、ヴラジミル=ヴォルィンスキイの城市を指すときには、煩瑣を避けるために単に「ヴラジミル」とする。

27) 「セレット川」(Серет)は、西ウクライナの現在のテルノポリ州の川で、ドニエストル川左岸の支流。全長 248 キロメートル、流域面積 3900 平方キロメートル。ポドル高地を流れる。流域にはテルノポリ市、チョルトキフ市が位置する。

28) 「ミクーリン」(Микулин)は、ドニエストル川左岸支流セレット川河岸にあり、テレボヴリから近く 10km ほど上流(北)にある城市。現在のミクーリツィ村(Микулинці)に相当する。ヴラジミルとガーリチの中間地点に位置していた。『キエフ年代記』6652(1144)年の項に最初に言及されている(『イパーチイ年代記(2): p. 332])。この記事で、ミクーリンがキエフ地方との境界に立地していたことが示されている[Котляр 2005: С. 189]。

29) 「サノク」(Санок)の年代記の初出は 6658(1150)年(『イパーチイ年代記(4): 346 頁])。ガーリチ公国とハンガリー国境地帯、ヴィスワ川支流のサン川(Сан)左岸にある城市。プシェミシエルの城市の上流にあり、そこからだと 50km ほど南西に位置している。現在のポーランドのサノク(Sanok)市に相当する。ロマンの死(1205年6月)の直後、公妃はこの国境の城市でハンガリーと同盟関係を結ぶ交渉(会合)を行ったのだろう。

30) 当時のハンガリー王アンドラーシュ二世(在位 1205～1235年)の祖父ゲーザ二世は大ムスチスラフ公[D11]の娘と結婚しており、他方大ムスチスラフ公[D11]はロマン公[I11]の曾祖父に当たっていたことから、アンドラーシュ二世とロマンは広い意味での兄弟関係(又従兄弟)にあった。そこから「義理の兄弟の妻」(ятровь)はここでは、以下の記事で何度も登場する「公妃」(княгиня)、すなわちロマン[I11]の未亡人でダニール[I111]とヴァシリコ[I112]の母親(上注 22 参照)のことを指している。

31) アンドラーシュ二世がダニール[I111]を「息子」と見なしていることについては、下注 155 も参照。

32) 「モケイ」(Мокьи)はハンガリーの軍司令官の名。6716(1208)年の記事も参照(下注 121)。

33) 「コロチュン」(Корочюн)、「ヴォルプト」(Волпт)、「ヴィトミール」(Витомир)、「ブラギニャ」(Благиня)は、ハンガリー王に仕える軍司令官の名前。

人がいたからである。

【リューリク [J2] は城市ガーリチを攻めるが戦果なく帰郷する：1205 年秋】

そのとき、〔リューリクの陣営の〕二人のポロヴェツ侯でストエフの二人の息子たち (Сутоевича), すなわちコチャン³⁴⁾ (Котьянь) とソモグール³⁵⁾ (Сомогурь) が歩兵部隊に向かって突進したが、かれらが乗っていた馬が撃たれて **[718]**, かれらは危うく捕虜になるところだった。

34) 「コチャン」 (Котьян) はプリツァークによれば、当時、沿ドニエブルのステップ地帯に展開していたポロヴェツ人部族のテルトロバ族 (Тергробичи) (アラビア語史料の *дурут* 族) の族長の一人 [Pritsak 1982: p. 375]。コチャンの娘がムスチスラフ武運公 (Удалой, Удатный)[J51] に嫁いでおり (下注 386 参照。結婚の時期は 1190 年代半ば頃と推定される [Добмровский 2015: С. 537])、また、ムスチスラフ [J51] は父親の死 (1178 年) の後にリューリク [J2] の庇護を受けていたと考えられることから ([イパーチイ年代記 (7) : 243 頁])、この、コチャン、ムスチスラフ [J51]、リューリク [J2] 一族の三者は婚姻同盟を含めて固い同盟関係にあったと考えられる。

コチャンはガーリチおよびルーシの諸事件に積極的に関与し、1223 年のカルカ川の戦いの際にはルーシ諸公に援軍を要請し (下注 338 参照)、1225 年頃にはダニール [I111] に対抗するムスチスラフ武運公 [J51] とウラジーミル・リューリコヴィチ [J22] の陣営に加わり (下注 378)、1229/1230 年頃には、ウラジーミル・リューリコヴィチ [J22] のダニール [I111] 討伐遠征に参加したが、裏切ってダニールを助けている (下注 448 参照)。また、ラテン語のハンガリー史料によれば、モンゴル=タタール勢侵入後の 1238 年に四万人もの同族をひきいてハンガリーに逃れ、1239 年頃にはキリスト教の洗礼を受けたとされている [Пилипчук 2014: С. 62-66]。

35) 「ソモグール」 (Сомогурь) はコチャンの兄弟にあたるが詳細は不明。

リューリク [J2] はキエフに戻った³⁶⁾。

【ガーリチ貴族は公妃と息子たちをヴラジミルへ追放して、イーゴリ [C432] の息子たちをガーリチ地方に招聘する：1206 年夏】

しばらく経って、コルミリチ家の者³⁷⁾ (Кормиличич) が〔ガーリチへ〕連れ戻された。かつて、大いなる公ロマン [I11] は、かれのことを信用できずに、追放したのだった。それには、かれ〔コ

36) 本年代記ではリューリク [J2] によるガーリチに対する遠征が一回だけなされただけのような書き方がされているが、他の史料によるとこれとは別にチェルニゴフ諸公（オレーグ一族）を中心にリューリク [J2] も参加した遠征がなされている。

この二度目の遠征については、『ラヴレンチイ年代記』6714(1206)年の記事によれば「オレーグ一族諸公は評議のためにチェルニゴフに集まった。それは、フセヴォロド・チェルムニイ [G4] とその兄弟たち、ウラジミル・イーゴレヴィチ [C432] とその兄弟たちだった。ムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] が自分の甥たちとともにスモレンスクからかれらのところにやって来た。ポロヴェツ人も多数がかれらのもとにやって来た。そして、みな再びガーリチ討伐のために遠征に出発した。かれらがキエフに到着すると、かれらとともに、リューリク [J2] とロスチスラフ [J21]、ウラジミル [J22] とかれ〔リューリク〕の甥たち、ベレンディ人たちが〔キエフから〕出発した。また、オポリエ (Ополье) からはポーランド人たちが、ヴラジミル討伐の遠征に出発した」[ПСРЛ. Т. 1, 1997: Стб. 426-427] とある。この遠征に対して、ロマンの寡婦はすぐさまハンガリーに援助を求めた。そして、ハンガリー王アンドラーシュ二世は、オレーグ一族諸公軍が再度ガーリチに到着する前に、ガーリチ城市に自分の守備隊を配置した。

その後、「ロマン [I11] の息子たちは〔ガーリチの〕地の大混乱を目にして、恐くなり、王〔の軍〕の到着を待たずに、ガーリチから自分の父の地であるヴラジミルへと逃げ出した。王が山脈を越えたとき、ポーランド人がオレーグ一族〔諸公〕を支援すべくヴラジミル方面へと向かっていることを聞き、これを遮るためにヴラジミルへと向かった。オレーグ一族諸公がかれらの地へ進入したとき、かれら〔オレーグ一族は〕〔ハンガリー〕王がヴラジミル近郊に布陣して、ガーリチへと到着できないまま幾日も陣を張っていることを聞いた。王もガーリチへ向かうことなく、オレーグ一族も〔ガーリチへ向かうことが〕なかった。結局、王はポーランド人たちと和を結ぶと、山脈を越えて戻ってしまった。オレーグ一族も引き返した。なぜならば、両軍とも疲弊していたからである」[ПСРЛ. Т. 1, 1997: Стб. 427] のように、この遠征は実質的に失敗に終わっている ([Perfecky1973: pp.128-129. n. 9] も参照)

37) 「コルミリチ家の者」(Кормиличич) は、公族の「養育者」を意味する職名 кормилец が一族の名称に転じたもので、「イーゴリ [C432] 一族派」に属するガーリチの名門貴族を指している。

なお、「コルミリチ家の者」を文法的に双数と理解して（単数の可能性もある）、ガーリチの人がコルミリチ家のふたりの兄弟（ヴラジスラフとその兄弟）を連れて来たことを示すとする説もある。フルシェフスキイは、もうひとりの兄弟がスジスラフだったのではないかと考えている。([Perfecky1973: p. 129. n. 10] も参照)

ルミリチ家の者]がイーゴリ [C432] の息子たちを誉め讃えたという事情があった³⁸⁾。ガーリチの貴族たちはかれら [イーゴリの息子たち] の言葉に聴き従って、使者を遣ってかれら [イーゴリの息子たち] を呼び寄せると、かれらを各地の [支配公に] 据えた³⁹⁾。すなわち、ウラジーミル [C4321] をガーリチ [の公に]、ロマン [C4324] をズヴェニゴロド [の公に] ⁴⁰⁾。

ロマン [I11] の公妃⁴¹⁾ は自分の子供たちを連れて、[ガーリチから] ヴラジミルへと逃げた⁴²⁾。

38) 「イーゴリの息子たち」とは、ウラジーミル [C4321] とロマン [C4324] (語形が双数であることから二人であると解釈できる) を指している。

この二人の「息子たち」はイーゴリ [C432] の義理の兄弟でガーリチ公だったウラジーミル [A12111] (1199 年頃没) の死後の 1202 ~ 1205 年の期間、ガーリチ公となったロマン [I11] に敵対し、ガーリチ支配を狙って、ガーリチの貴族たちを味方に付けようとしていた。そして、1205 年 6 月のロマン [I11] の没後、1206 年に「イーゴリー族派」の貴族たちは、ロマンの寡婦と二人の息子たちを追放して、イーゴリ [C432] の息子たちを招聘し、ウラジーミル [C4321] をガーリチの公座に、年下 (弟) のロマン [C4324] を付属城市ズヴェニゴロドの公座に据えたのである (下注 40)。

39) このガーリチ人によるイーゴリー族の招聘について、『ラヴレンチイ年代記』 6714(1206) 年の記事によれば「ガーリチ人は、王が撤退してしまったことを見て、ポーランド人とルーシ人が再び自分たちを討ちにやってくることを恐れた。かれら [ガーリチ人] のところには公がいなかったからである。そこで、かれらは評議して、ウラジーミル・イーゴレヴィチ [C4321] を招聘するための使者を密かに派遣した。ウラジーミル [C4321] はガーリチ人からの連絡を受け取ると、ポーランド人や自分の兄弟のもとからこっそりと逃げ出して、夜中馬を走らせてガーリチへと向かった。なぜなら、部隊がガーリチから 2 日行程のところには布陣していたからである。また、[ハンガリー] 王はガーリチ人と評議して、先ずはペレヤスラヴリへ使者を遣って、ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ [K4] を呼び寄せようとしていたからである。こうして、二週間のあいだ [王は] かれ [ヤロスラフ [K4]] を待っていた。ヤロスラフ [K4] はペレヤスラヴリからガーリチへと急ぎ進軍した。ところが、ウラジーミル [C4321] が自分より三日前にすでにガーリチに入城したということを知り、ペレヤスラヴリへと引き返してしまった」[ПСРЛ. Т. 1, 1997: Стб. 427] と、詳しい経緯が記されている。

40) 「ズヴェニゴロド」(Звенигород) は、現在のウクライナ・リヴィウ州のズヴェニホロド村にあたる。リヴィウの南東約 20km に位置する。ガーリチに対しては付属城市にあたる。年代記の初出は 6594(1086) 年 [ロシア原初年代記: 229 頁]。東西と南北の交易路の交差するところに立地しており、城市はビルカ川の沼沢に囲まれた低い丘に建設されていた。1240 年にタタールによって破壊された。

なおこのとき、以下の経緯で分かるように、この時点で二人の兄弟であるスヴァトスラフ [C4323] もペレムィシェリの公座に据えられたと考えるべきだろう (下注 43, 101 参照)。[Perfeky1973: p. 130. n. 11] も参照。

41) この「ロマンの公妃」(княгини еж Романова) については上注 22 を参照。

42) ロマン [I11] の公妃と二人の息子のガーリチからヴラジミルへの逃走について、『ラヴレンチイ年代記』 6714(1206) 年の記事では、「ロマン [I11] の息子たちは [ガーリチの] 地の大混乱を目にして、恐くなり、[ハンガリー] 王 [の軍] の到着を待たずに、ガーリチから自分の父の地であるヴラジミルへと逃げ出した」[ПСРЛ. Т.1, 1997: Стб. 427] となっている。

【ガーリチ公ウラジーミル [C4321] は、兄弟のスヴァトスラフ [C4323] をヴラジミル公に据える：1206年】

ウラジーミル [C4321] はさらに、ロマン [I11] の一族を根絶やしにすることを望んだ。神を恐れぬガーリチ人たちもこれに協力した。ウラジーミル [C4321] はガーリチの貴族たちの助言にしたがって、ヴラジミル人に宛てて一人の司祭を派遣して次のように言わせた。「そなたたちが、わしにロマン [I11] の二人の息子たち〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112]〕を引き渡して、わしの兄弟のスヴァトスラフ⁴³⁾ [C4323] をヴラジミルの支配公として受け入れなければ、そなたたちの城市は跡形も無くなるだろう」。

ヴラジミル人はこの司祭を殺そうとした。しかし、ムスチボグ (Мъстьбогъ), モンチュク (Мончюкъ), ミキフォル (Микифоръ) は⁴⁴⁾、かれら〔ヴラジミル人〕に言った。「使者を殺してはならない」。なぜなら、かれらは〔ひそかに〕その心の中に、自分たちの主人たち⁴⁵⁾〔を裏切り〕城市を引き渡そうとする策略を持っていたのだから。こうして、かれらによって司祭は救われた⁴⁶⁾。

【ロマン [I11] の寡婦の妃は二人の息子とともに、ヴラジミルから、レシエクー世を頼ってポーランドへと逃走する：1206年春】

翌日、公妃はこのことを知った。そして、守り役のミロスラフ (Мирослав)⁴⁷⁾ と相談をして、その日の夜にポーランド人のもとに逃げ出した⁴⁸⁾。守り役〔ミロスラフ〕はダニールを自分の前〔の馬の鞍〕に乗せて、〔ヴラジミルの〕城市を出た。**【719】** 司祭ユーリイ (Юрьи) と乳母

43) スヴァトスラフ [C4323] はこの時点でガーリチ地方では辺地にあたるベレムィシェリの公座を受けていたと考えられる (上注 40, 下注 101 を参照)。

44) 「ムスチボグ」 (Мъстьбогъ), 「モンチュク」 (Мончюкъ), 「ミキフォル」 (Микифоръ) は、城市ヴラジミルにおける「イーゴリー族支持派」の貴族たちだろう。

45) 「主人たち」 (господа) とは、この時点でヴラジミルの公座についていたダニール [I111] とヴァシリコ [I112] を指している。

46) 以下の経緯から、結果的にこのとき、ヴラジミル人はスヴァトスラフ [C4323] をヴラジミルの支配として受け入れたことがわかる。

47) 「守り役のミロスラフ」 (дядька Мирослав) は、ヴラジミルの貴族でロマン [I11] の息子たちの世話をしていた。かれは、その後もダニール [I111] の側近貴族として、1230年代中頃までの年代記記事に何度も登場する。コトリヤールは、ロマンの公妃 (寡婦) の出自をこのミロスラフ一族ではないかと推定している (上注 22 参照)。

48) ここでは、ポーランドへ逃亡するというロマン [I11] の寡婦 (公妃) の行動が性急な行為として描かれているが、フルシェフスキは、これは計算された行動としている。すなわち、公妃とアンドラーシュ二世とのサノクにおける会談 (上注 29) および逃亡の間のどこかの時点でおこなわれたアンドラーシュとレシエクの会談によって、公妃と息子たちのポーランドへの安全な逃避が保証されていたと推定しているのである ([Perfecky1973: p. 130. n. 13])。

はヴァシリコ (Василка)[I112] を連れて、城壁の穴をくぐって脱出した。どこへ逃げたらよいかわからなかった。なぜなら、ロマン [I11] はポーランド人との戦争で殺されており⁴⁹⁾、レシエク⁵⁰⁾ (Лестко) とは和を結んでいなかったからである。

だが、神は助けてくれた。レシエクは敵意をあらわすことなく、大いなる名誉をもって、自分の義理の兄弟の妻⁵¹⁾ (ятровь) とその子供たち〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112]〕を受け入れ、かれらを憐れんで言った。「われらの間に敵意の種を播いたのは悪魔だったのです」。実際、ヴワディスワフ⁵²⁾ (Володиславъ) がかれらの間を〔敵対させる〕策を弄し、かれ〔レシエク〕の親愛を嫉んでいたのである。

49) ロマン [I11] は、1205年6月19日にザヴィホスト近郊でのポーランドのレシエク＝コンラートの連合軍との戦いで戦没している（上注5参照）。ロマンの死については、ヤン・ドゥウゴシュの『ポーランドの歴史』(Historiae Polonicae libri xii)の1205年の記事に詳述されており、ガーリチの公座を確保したロマンは、かつて自領地だったルプリンの地〔ヴィスワ川東岸〕の領有を要求したがコンラートに拒否され、大軍をもってマウオポウスカ地方へ攻め入ったとしている〔Щавелева 2004: C. 192-196, 345-349〕〔Горovenko 2011: C. 117〕〔Майоров 2008〕も参照。

50) 「レシエク」(Лестко)は「レシエク白公」(Leszek Biały)とも呼ばれ、当時はクラクフ公(在位: 1194～1198年, 1199～1202年, 1206～1210年, 1211年～1227年)及びサンドミエシュ公(在位: 1206年～1227年)。コンラート一世の兄弟にあたり、この頃はポーランド大公として最高の支配者だった。かれの父はカジミエシュ正義公で、母はバルズ公フセヴォロド・ムスチスラヴィチ [I12] の娘。ガーリチ公ロマン・ムスチスラヴィチ [I11] (カジミエシの姉妹のアグネスカの子)は、レシエクの従兄弟に当たっている。

51) レシエク一世の父方の伯叔父ミエシコ三世(老公)は、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] の娘と結婚していた。イジャスラフ [D112:I] はロマン公 [I11] の祖父にあたるから、レシエクとロマンは広い意味での兄弟(又従兄弟)に相当する。そこから、レシエクにとって「自分の義理の兄弟の妻」(своя ятровь)とは、ロマンの未亡人でダニール [I111] とヴァシリコ [I112] の母親である女性(「公妃」)を指している。

52) この「ヴワディスワフ」(Володислав)の同定については二つの説がある。

第一は、ヴワディスワフ三世細足公(Władysław Laskonogi)(ポーランド大公在位: 1202年～1206年, 1227年～1229年及びヴィエルコポルスカ公)を指しているとするもの。フルシェフスキによれば、ロマン [I11] とレシエクの友好関係が壊れはじめたのは、1202年に、ウワディスワフがクラクフを保持することに失敗し、レシエクによって追放されてからである。レシエクはロマン [I11] が彼の敵の味方をしたと信じたようである。他方、パシュートによれば、ロマン [I11] とレシエクの衝突は、ホーエンシュタウフェン家とヴェルフ家の争いの中でロマンとレシエクが異なる側に立ったことによるものだとしている〔Perfecky1973: p. 130. n. 15〕参照。

第二の説は、このヴラジスラフを、貴族のコルミリチチ家の者で、ロマン一族反対派ガーリチ貴族の中の活動的なリーダーのひとりとするものである。この貴族ヴワディスワフについては6711(1203)年、6718(1210)年、6720(1212)年の記事に記述がある。かれは1212年に獄死している(下注218参照)。

6711 [1203] 年

【ポーランド大公レシェクは、ダニール [I111] をハンガリー王のもとへ派遣する。ダニールはハンガリーに残り、ロマンの未亡人とヴァシリコ [I112] はポーランドのレシェクのもとに身を置く】

{それらの年に⁵³⁾} [ポーランド大公] レシェクは、ダニール [I111] をハンガリー人のもとに派遣した。[レシェクは] かれ [ダニール] とともに自らの使者として、禿頭のヴァチェスラフ⁵⁴⁾ を派遣して、[ハンガリー] 王 [アンドラーシュ二世] に対してこう言った。「わたしは、ロマン [I11] が [あなたと] 不和であったことを持ち出すつもりはない。かれ [ロマン] は [のちに] あなたの味方になったのだから。あなた方二人 [ロマン公とアンドラーシュ王] は、かれ [ロマン] の一族が生き残ったときには、親愛を結ぶと誓ったのだから。今は、かれら [ロマンの一族である息子たち] は追放された身の上である。今となつては、[遠征に] 出かけて、かれらの父の領地⁵⁵⁾ を略取して、これをかれらに引き渡そうではないか」。

[ハンガリー] 王はこの言葉を [使者から] 受け取ると、起こった事態について残念に思い、ダニール [I111] を自分のもとに置いた。[他方] レシェクは、[ロマンの] 公妃とヴァシリコ [I112] を自分のもとに [置いた]。

【ガーリチ公ウラジーミル [C4321] のハンガリーとポーランドに対する工作：1206 年末～1207 年前半】

ウラジーミル [C4321] は、[ハンガリー] 王とレシェクに対して多くの贈物を送った⁵⁶⁾。

【ロマン [C4324] はハンガリーの援軍を得て兄弟のウラジーミル [C4321] を撃ち破り、ガーリチの公座に就く：1208 年】

その後、多くの時間が経ってから、ウラジーミル [C4321] とロマン [C4324] の二人の兄弟の間に騒乱が起こった。ロマン [C4324] **【720】** はハンガリー人のもとへ [援軍を求めて] 行くと、兄弟 [ウラジーミル [C4321]] と戦い、これに勝利すると、ガーリチを占領した。一方、ウラジー

53) これはイパーチイ写本にはなく、フレーブニコフ系写本だけにある読み。以下、フレーブニコフ系写本だけの読みを併記・追記するときは { } 内に示すこととする。

54) このレシェクの使者である「禿頭のヴァチェスラフ」(Вячеслав Лысый) は、下注 125 のヴァチェスラフ・トルステイと同一人物の可能性が高い。

55) 1199 年から 1205 年に没するまでロマン公 [I11] が領有した、ガーリチの城市とその周辺の領地を指している。

56) ポーランドとハンガリーがガーリチを攻めないことを求めたウラジーミル [C4321] による懐柔策であることは明らかである。

ミル [C4321] はプチヴリへと逃走した⁵⁷⁾。

6712 [1204] 年

【ベルズ公アレクサンドル [I121] がポーランド軍とともにヴラジミルを攻めて占領する：1208 年】

{そのとき}アレクサンドル⁵⁸⁾[I121]が、レシェクとコンラート⁵⁹⁾を連れて〔ヴラジミルへ〕やって来た⁶⁰⁾。

ポーランド人がヴラジミルに到来した。ヴラジミル人はかれら〔ポーランド人〕のために城門を開けて、こう言った。「見よ、これがロマン [I11] の甥〔アレクサンドル [I121]〕である」。ポーランド人は〔ヴラジミルの〕全城市〔の住民〕を捕虜とした。

アレクサンドル [I121] は、レシェクに対して、残った〔財産〕と聖母の教会⁶¹⁾は〔掠奪を〕容赦してくれるよう頼んだ。なぜなら、〔その教会〕の扉は頑丈で、ポーランド人はこれを押し破ることができなかったからである。それからすぐにレシェクとコンラートが到着して、二人は自分たちのポーランド人を鎮圧した。こうして、教会と残った〔ヴラジミルの〕人々は救われたのである。

ヴラジミル人たちは、かれらとその誓い⁶²⁾を信用したことについて苦情を述べて、こう言っ

57) この出来事は『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の1208年の記事に「そのときハンガリー人はガーリチからウラジーミル・イーゴレヴィチ [C4321] を追い出し、彼の兄弟のロマン [C4324] をそこに据えた」[ПСРЛ Т.7: С. 116]とあることから、1208年の出来事と考えられる。

58) アレクサンドル・フセヴォロドヴィチ [I121] は『イパーチイ年代記』ではここが初出。ロマン公の甥にあたり、ダニール [I111] にとっては従兄弟になる。当時はベルズ公だった（下注 74 参照）。

59) 「コンラート」(Конраг) は当時マゾフシェ公で、レシェク大公の兄弟にあたる。コンラートはノヴゴロド=セヴェルスキイ公スヴァトスラフ・イーゴレヴィチ [C4323] (のちにガーリチ人によって処刑された) の娘アガーフィア (Агафья) と結婚している。

60) 『キエフ年代記』6696(1188)年の項に、「ロマン [I11] は、兄弟のフセヴォロド [I12] にヴラジミル [=ヴォルィンスキイ] を完全に譲り渡して、かれに十字架接吻の〔誓約を〕して『自分はもはやヴラジミルは要らない』と言った。そして、ロマン [I11] はガーリチに入城し、ガーリチの公座に就いた」という記事がある〔イパーチイ年代記 (8):236 頁, 注 326〕。このことがあったため、アレクサンドル [I121] は、ヴラジミルの城市とヴォルィニ地方は、父フセヴォロド [I12] から正統に継承した「父の地」と見なしていたのだろう。そのため、アレクサンドルは、ポーランドの助力を得てこの地の回復を図ったのである。[Котляр 2005: С. 188-189] も参照。

61) ヴラジミルの聖母就寝教会のこと。1160年に建設されている ([Раппопорт 1982: С. 105-106])。ここは、ヴォルィニ支配諸公のいわゆる菩提寺だった。

62) ヴラジミル人がポーランド軍に対して城門を開ける際に、城市の掠奪や捕虜捕獲をしないという誓いをさせたが、それが破られたということ。

た。「もし、かれらのところに同族のアレクサンドル [I121] がいなかったら、かれら〔ポーランド人〕はブク川⁶³⁾を渡らなかつたらう⁶⁴⁾」。

【ポーランド人はスヴァトスラフ [C4323] を捕らえ、アレクサンドル [I121] はヴラジミルの公座に就く：1208 年】

〔ヴラジミル公の〕スヴァトスラフ [C4323] は捕らえられ、ポーランド人のもとへと連行されて行った⁶⁵⁾。アレクサンドル [I121] はヴラジミルの〔公座に〕就いた。

【イングヴァル [I22] はヴラジミルの公座に座す：1209 年】

そのとき、ピンスクの〔公の〕ウラジーミル⁶⁶⁾ [B32131] が〔ポーランド人によって〕捕らえられた。イングヴァル⁶⁷⁾ [I22] とムスチスラフ⁶⁸⁾ [I24] がポーランド人と一緒に〔同盟していた〕からである⁶⁹⁾。

その後、イングヴァル [I22] はヴラジミル〔の公座〕に座した⁷⁰⁾。

63) 「ブク川」は、現在のウクライナとポーランドを流れ、一部は両国の国境となっている西ブグ川のこと。ヴィスワ川右岸の支流。全長 831 キロメートル。ポドル高地に流れを發し、ルブリン高地の東端とポドラシエ（ポーランド東部地方）を流れる。この部分は、イパーチイ写本では「Буѣа」だが、フレープニコフ系写本の読み「Буѣа」を採用した。

64) ブク川はポーランドとヴォルィニ地方の間の境界と見なされており、「ブク川を渡る」とは、ポーランド側から国境を越えてヴォルィニ地方に進攻することを意味している。ここでは、ポーランド人を引き入れ、掠奪をほしいままにさせたアレクサンドル [I121] に対するヴラジミル人の反感の言葉と解釈すべきだろう。

65) スヴァトスラフ [C4323] はその後逃げ出して、1211 年頃にはベレムィシェリの公座に就いている。下注 101 参照。

66) ウラジーミル・スヴァトボルコヴィチ [B32131] はこの個所が初出。父のスヴァトボルク [B3213] はトゥーロフ公で 1190 年 4 月に没しており [イパーチイ年代記 (8) : 243 頁, 註 353], それ以降, ウラジーミル [B32131] は父親の領地を継いで, トゥーロフ公領の主要都市の一つピンスクに公座を持っていたと考えられる。

67) イングヴァル・ヤロスラヴィチ (Ингварь)[I22] は, ルチェスク (現在のルツク (Луцк)) を拠点とする公だが, 1202 ~ 1212 年にはキエフ公でもあった。かれは, ルチェスク公ヤロスラフ・イジャスラヴィチ [I2] と, ボヘミア公ヴワジスワフ三世の逸名の娘とのあいだに生まれた息子である。

68) ムスチスラフ・ヤロスラヴィチ [I24] は無言公 (ネモイ) との通称があり, 当時はベレソブニツァの公だった (下注 131 を参照)。

69) ウラジーミル [B32131] は捕らえられ, ピンスクはイングヴァル [I22] (もしくはムスチスラフ無言公 [I124]) の所領に一時的になったが, まもなくウラジーミル [B32131] に返還されたと考えられる。ドムプロフスキはこの背景として, イングヴァル [I22], ムスチスラフ [I124] の姉妹が, ウラジーミル [B32131] と結婚していたという事態を想定している [Домбровский 2015: С. 343-344]。

70) ヴラジミルの公座にはアレクサンドル [I121] が就いていたことから (上注 65), かれは逃げ出して (あるいは追放されて), ベルズへ退去した (下注 74) ことになる。

レシエクは、かれ〔イングヴァル [I22]〕の娘を妻としたが⁷¹⁾、かの女を置いて、オレリスク⁷²⁾ (Орельск) へ行った。

【ベレスチエの住民がヴァシリコ [I112] を公として迎える：1209 年頃】

ベレスチエ⁷³⁾ 人たちがレシエクのもとにやって来て、〔自分たちの城市に〕ロマン [I11] の公妃とその子供たちが〔住むことを〕請願した。【721】二人ともまだ年少だったからである。〔レシエク〕はかれら〔ベレスチエ人〕にかれら〔公妃と子供たち〕を委ねた。かれら〔ベレスチエ人〕は大いなる喜びとともに、かれら〔公妃と子供たち〕を出迎えた。それはあたかも大いなるロマン [I11] が生きて戻ったかのような騒ぎだった。

【ベルズ公アレクサンドル [I121] は、イングヴァル [I22] を追放して再びヴラジミルの公座に就く：1210 年頃】

その後、アレクサンドル [I121] はベルズ⁷⁴⁾ (Белз) に住み、イングヴァル [I22] はヴラジミルに住んでいた⁷⁵⁾。〔ヴラジミルの〕貴族たちはイングヴァル [I22] を好いてはいなかった。アレクサンドル [I121] は、レシエクの助言に従って、ヴラジミル〔の城市を〕略取した⁷⁶⁾。

71) このレシエク一世の結婚相手は、15 世紀の史料ヤン・ドゥウゴシュ『年代記』によれば名はグリミスラワ (Grzymisława)[Щавелева 2004: C. 207, 361] で、1207 年頃に結婚したと考えられる。文脈から見ると、レシエク大公はヴラジミル公となったイングヴァル [I22] の娘を妻とすることで、ヴォルィニ地方への影響力の拡大を狙った [Котляр 2005: C. 192] と読むことができる。しかし、この「かれ」を前のヴラジミル公であるアレクサンドル・フセヴォロドヴィチ [I121] の娘と解釈する説もある [СЭ-1: C. 15]。さらに、ドムプロフスキイは、プスコフ公ウラジーミル・ヤロスラヴィチ [D11533] の娘 (1189 年 9 月にノヴゴロドで誕生) であると考証している [Домбровский 2015: C. 642-648]。

72) 「オレリスク」(Орельск) は、ヴィスワ川左岸支流 (現在のストルメン運河) 沿岸にあった城市で、現在のオジェレツ・ドゥジ村 (Orzelec Duzy) に相当する。クラクフから北東方向に約 100km、サンドミエシュからだ南西方向に約 50km 離れている。ここにレシエク大公のマウォポルスカ地方における拠点があったと考えられる。

「かの女を置いて」(пусти) というのは、かの女の父親のイングヴァル [I22] のいるヴラジミルに残してということだろう。

73) 「ベレスチエ」(Берестье) は、ヴラジミルからおよそ 120km 北に位置するブグ川沿いの城市で、現在のベラルーシのプレスト (Брест) に相当する。ヴォルィニ公領の西北端に位置し、ポーランドとの境界にあった。当時はポーランドの影響力が強かったことから、ベレスチエ人たちは、年少ではあれロマン一族の公を招いて、ルーシ公による城市防衛を確立しようとしたのではないかと推測される。

74) 「ベルズ」(Белз) は、ヴォルィニ地方の城市で、ブグ川支流ソロキヤ川 (Солокия) 河岸に位置している。現在のウクライナ、リヴィウ州ソカリスキイ区のベルズに相当する。年代記の初出は 6538(1030) 年 ([ロシア原初年代記: 170 頁])

75) 上注 70 参照。

76) ヴラジミルから追放されたイングヴァル [I22] は、自分の拠点城市であるルチェスク (ルツク) に逃げた。(下注 133 参照)

【ロマン [I11] の公妃のポーランドのレシエク公への訴えにより、アレクサンドル [I121] はヴァシリコ [I112] にベルズを与える】

ロマン [I11] の公妃はレシエクのもとにミロスラフ (Мирослав) を〔使者として〕派遣して言った。「この者〔アレクサンドル [I121]〕はわれらの地、父の地のすべてを支配している。ところがわが息子〔ヴァシリコ [I112]〕はベレスチエひとつ〔を支配している〕にすぎない」。すると、アレクサンドル [I121] は、ウグロフスク⁷⁷⁾ (Угровеск)、ヴェレシチン⁷⁸⁾ (Верещин)、ストルプ⁷⁹⁾ (Столп)、コモフ (Комов)⁸⁰⁾ の〔城市を〕自分のものにして、ヴァシリコ [I112] にはベルズ (Белз) を与えた。

6713 [1205] 年

【アレクサンドルはヴラジミルの公座に、フセヴォロドはチェルヴェンの公座に就く：1210年頃】

アレクサンドル [I121] はヴラジミルの公支配を行った。かれの兄弟のフセヴォロド [I122] はチェルヴェン⁸¹⁾ (Червень) 〔を公支配をした〕。

77) 「ウグロフスク」(Угровеск)は、ヴォルィニ地方、ブク川中流域支流ウゲル川(Угер)の河口に位置する城市。現在のポーランドのウフルスク村(Uhrusk)に相当する。一時は主教座が置かれていたことから(下注332参照)も、それなりの規模の城市だったことがわかる。

78) 「ヴェレシチン」(Верещин)はヴォルィニ地方の城市で、ヴロダフカ川河岸にある。現在のポーランドのルブリン県の村である。

79) 「ストルプ」(Столп)はヴォルィニ地方の城市で、ガルカ川(西ブグ川支流)河岸にあり、現在のポーランドのルブリン県の村ストルピエ(Stolpie)に相当する。

80) 「コモフ」(Комов)は、ポーランドのウダル川(Udal)(西ブグ川左岸支流)沿岸のクモウ村(Kumów Majoracki)に同定されている。ヴラジミル=ヴォルィンスキイからは北西に約60kmほどのところにある。

以上の4つの城市はいずれもブク川中流域左岸に位置しており、これ以降の年代記記述では、これらの城市をヴォルィニ地方の辺境地方(украина)と呼んでいる。この「辺境地方」の諸城市(城砦)はロマン [I11] によって国防防衛用の砦として建設された可能性がある。現在その遺構の発掘は進んでいないが、おそらく、14世紀後半にポーランド行政府がヴォルィニの大部分を占領した際に、破壊されたのだろう。アレクサンドル [I121] の後にこの「辺境地方」はレシエクによって支配された[Котляр 2005: C. 193]。

81) 「チェルヴェン」(Червень)はヴォルィニ地方の城市でフチヴァ川(Нuczwa, Хучва)(西ブク川左岸支流)の左岸に位置し、現在のポーランドのザモイスキイ県(Zamojskie)チェルムノ村(Czermno)に相当する。ヴォルィニ地方の主要都市ヴラジミル=ヴォルィンスキイからだと南西に50kmほど離れている。

【リトアニア人とヤトヴァグ人によるヴォルィニ地方への襲来：1210 年頃】

〔そのとき〕リトアニア人とヤトヴァグ人⁸²⁾が〔ヴォルィニの地に〕掠奪をしかけた。かれらは、トゥーリスク⁸³⁾(Турискъ)とコモフ⁸⁴⁾(Комов)周辺を掠奪し、ほぼチェルヴェンまで迫った。そして、チェルヴェンの城門近くで戦闘を行った。〔そのとき〕、守備隊⁸⁵⁾はウハニ⁸⁶⁾(Ухани)にいた。このとき、リューブの娘婿のマテイ(Матеи, Любов зять), ドブログスチ(Доброгость)が殺された⁸⁷⁾。かれらは斥候部隊として出兵していた。ヴラジミルの地はリトアニア人とヤトヴァグ人の掠奪によって災難をこうむった。

【ハンガリー王アンドラーシュ二世が派遣した宮中伯ベネディクトは、ロマン [C4321] を捕らえ、ガーリチで無法をはたらく：1210 年秋以降】

しかし、ガーリチで起こったことについての、以前の記述に戻ろう。

アンドラーシュ王は【722】ガーリチの無法と騒乱⁸⁸⁾を知ると、ベネディクト⁸⁹⁾(Бенедикт)

82) 「ヤトヴァグ人」は言語的にはリトアニア人(リトヴァ)と同じバルト語族に属し、西ブグ川とネマン川上流の間の一帯に居住していた。ヴォルィニ公領の北、ポロツク公領の西に隣接しており、ルーシの諸公にとっては、帰服していない部族のひとつだった。

なお、『キエフ年代記』6704(1196)年の記事には、ヤトヴァグ人がロマン [I11] の領地(ヴォルィニ地方)で掠奪を行っていたことから、ロマンがヤトヴァグ人討伐遠征を行ったことが記されている。[イパーチイ年代記 (9): 注 54] 参照。

83) 「トゥーリスク」(Турискъ)はブリピャチ川右岸支流トゥーリヤ川(Турья)中流域に位置する城砦。現在のウクライナのトゥーリスク(Турійськ)に相当し、ヴラジミル=ヴォルィンスキイの北北東約 30km ほどのところにある。

84) 「コモフ」(Комов)は上注 80 を参照。

85) 「守備隊」は застава の訳語で、公領の境界付近の城砦に詰めて外敵に対する守備にあたる軍隊のこと。ここでは、アレクサンドル [I121] 配下の軍隊を指しているのだろう。

86) 「ウハニ」(Ухани)は、ヴラジミル=ヴォルィンスキイから西へ約 47km 離れた国境の城砦で、現在のポーランドのウハニエ市(Uchanie)に相当する。

87) 「マテイ」(Матеи)と「ドブログスチ」(Доброгость)は、当時ヴラジミルの公座に就いていたアレクサンドル [I121] 配下の貴族であると考えられる。

88) ロマン [C4324] は 1208 年ころに、兄弟のウラジミル [C4321] と紛争を起こしてかれを追放し、ガーリチの公支配を行っていたが(上注 57 参照)、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』6718(1210)年の記事によると「ロスチスラフ・リュリコヴィチ [J21] がガーリチで〔公座に〕就いた。ロマン・イーゴレヴィチ [C4324] は追放された。その年の秋、ロスチスラフ・リュリコヴィチ [J21] がガーリチから追放され、ロマン・イーゴレヴィチ [C4324] をその兄弟とともに〔ガーリチ地方の公座に〕据えられた」(〔ПСРЛ Т.7, 2001: С. 116-117])との記述がある。記事の中の追放は、それぞれの公を支持するガーリチ貴族たちが行ったものであり、このことを「無法」(безаконье)「騒乱」(мятежь)と言っているであろう。

89) 「ベネディクト」(Бенедикт)は、当時のハンガリーの国王の側近であるいわゆる「宮中伯」(nádor, palatinus regni Hungarie)で、ラテン語史料では「ボル」(Benedictus dictus Bor)あるいは「禿頭の」と称されて、クロアチア=スロヴェニア地方の地方長官(バン)にも就いていた(下注 228 参照)。

を軍兵とともに派遣した。そして、風呂場で沐浴していたロマン⁹⁰⁾ [C4324] を捕獲すると、ハンガリー人のもとへと送った。

ガーリチにはティモフェイ⁹¹⁾ (Тимофѣи) と言う、いとも賢明な文人がいた。かれが生まれた場所はキエフの城市だった。かれは、たとえ話をを用いて、この迫害者ベネディクトについて「昨今では反キリストは三つの名で呼ばれている⁹²⁾」という話をした。ティモフェイはかれ〔ベネディクト〕の面前を避けていたのだから。なぜなら、この迫害者⁹³⁾ は貴族や市民を迫害し、姦淫を行い、女性たちを、修道女、司祭の妻さえも陵辱していたからである。かれ〔ベネディクト〕は本当にその穢れた行いによって反キリストだった⁹⁴⁾。

6714 [1206] 年

【反ハンガリー派のガーリチ貴族たちはペレソプニツァ公ムスチスラフ [I24] を城市に引き入れようとするが失敗に終わる】

ガーリチ人はベネディクトを討つべくムスチスラフ⁹⁵⁾ [I24] を引き入れた。〔ムスチスラフは〕ガーリチに向かったが、なんら成果を得ることはできなかった。

イリヤ・ステパノヴィチ⁹⁶⁾ (Щепановичъ Илия) は、かれ〔ムスチスラフ [I24]〕をガーリチの丘⁹⁷⁾ に連れて行き、嘲りの笑みを浮かべてかれにこう言った。「公よ、そなたはすでにガーリ

90) 上注 88 にあるように、1210 年前半にロマン [C4324] は追放されたが、まもなく (1210 年の秋) 公座を回復した。この事件は、本年代記には記されていない。[Perfecky1973: p. 131. n. 18] を参照。

91) ティモフェイは司祭で、6734(1226)年の記事にはムスチスラフ武運公 [J51] の聴罪司祭として記されており、ベレムィシェリの貴族との交渉のために、ムスチスラフによりこの城市に使者として派遣されている (下注 390 参照)。

92) この反キリスト (антихрист) の三つの名とは、『黙示録』20:2 の「年を経たあの蛇、つまり竜」は「悪魔 (диявол) でもサタン (сатана) でもある」の記述を踏まえているのだろう。

93) この「迫害者」「迫害し」(томитель) の表現は、ヨセフスの『ユダヤ戦記』スラブ語訳の第 6 書 9 節から借用されたと推定される [Мещерский 1958: С. 100]。

94) チモフォイは、カエサリアの教父アンドレアスが記した「注釈黙示録」を根拠に、ベネディクトの名のギリシア語表記 βενεδикτος を数字で読み替えたとき、その総計が「獣の数字」である 666 (『黙示録』13:18) になる (β—2, ε—5, ν—50, δ—4, ι—10, κ—20, τ—300, ο—70, ς—200) として、ベネディクトを反キリストとして告発したのである ([Літопис руський, 1989: С. 371, прим. 5] [Perfecky1973: p. 131. n. 20] を参照)。

95) ムスチスラフ・ヤロスラヴィチ [I24] は当時ペレソプニツァの公だった (上注 68 参照)。

96) 「イリヤ・ステパノヴィチ」(Щепановичъ Илия) は、ガーリチの貴族の中の親ハンガリー派の代表者。イーゴリの息子たちによる貴族への弾圧 (1207 年) のときに殺害されている (下注 114 参照)。

97) 「ガーリチの丘」(галичина могила) とは、ガーリチ郊外のクリロス村 (Крилос) にある陵墓状の遺構で、伝説的には公の墓とされている。[Древнерусское градостроительство 1993: С. 128, илл. Галич. План центральной части. №9]

チの丘に座している。そなたはガーリチを公支配したということだ」。こうして、かれ〔ムスチスラフ [I24]〕は笑いものにされて、かれはペレソプニツァに戻った。あとで、ガーリチの丘とそこが起源となったガーリチの始まりについて我らは語ることにしよう。

【反ハンガリー派のガーリチ貴族たちは、プチヴリ公ウラジーミル [C4321] とハンガリーから逃げたロマン [C4324] に援軍をもとめ、ベネディクトを追放する】

ロマン [C4324] はハンガリー人のもとから逃げ出した⁹⁸⁾。ガーリチ人はかれ〔ロマン [C4324]〕の兄弟ウラジーミル [C4321] のもと⁹⁹⁾ に使者を派遣してこう言った。「われらは、あなたがたに対して罪があります。どうか、あの迫害者【723】ベネディクトからわれらを解放して下さい」。かれら〔ロマン [C4324] とウラジーミル [C4321]〕は、ベネディクトに対して戦うために進軍した。ベネディクトはハンガリー人のもとに逃げた。

【イーゴリー族のウラジーミル [C4321] はガーリチ公、ロマン [C4324] はズヴェニゴロド公、スヴァトスラフ [C4323] はベレムィシェリ公に就く】

ウラジーミル [C4321] はガーリチ〔の公座に〕座し、ロマン [C4324] はズヴェニゴロド¹⁰⁰⁾ (Звенигород)〔の公座に座し〕、スヴァトスラフ [C4323] はベレムィシェリ〔の公座に座した〕¹⁰¹⁾。また〔ウラジーミル [C4321] は〕自分の息子イジャスラフ [C43211] にはテレボヴリ¹⁰²⁾ (Теребовль) を与え、自分の息子のフセヴォロド [C43212] をハンガリーの王のもとに、贈物を持たせて派遣した¹⁰³⁾。

98) ロマン [C4324] はガーリチでハンガリー王に派遣された宮中伯ベネディクトの手で捕虜になり (上注 90)、ハンガリーで虜囚の身になっていたのを逃亡したのである。事態の進行から見ると、逃亡して兄ウラジーミル [C4321] のいるプチヴリに行ったのではないか (次注参照)。

99) 当時ウラジーミル [C4321] はヴラジミルを追われて、拠点城市 (故郷) のプチヴリにいた (上注 57)。

100) 「ズヴェニゴロド」 (Звенигородъ) はガーリチの付属城市のような役割を果たしていた。現在のリヴィウ (Львів) から南東約 20km に位置し、当時のガーリチからみると北北西約 85km の遠方にあった。

101) 「スヴァトスラフ」 [C4323] はポーランドに虜囚となっていたはずだが (上注 65 参照)、おそらく逃亡して、兄弟のウラジーミル [C4321] に合流したのだろう。

102) 「テレボヴリ」 (Теребовль) の城市は、セレト川支流グネズダ川 (Гнезда) 右岸の、ヴォルィニ領との境界に位置していた。ガーリチから東北東に 75km ほど離れている。現在のテレボヴリヤ (Теребовля) 市に相当する。伝統的にガーリチの付属として、分領公が座していた。

103) イーゴリー族諸公は、ハンガリー王と同盟して、その後ろ盾によってガーリチ地方の支配の安定を図ったのである。以下の事態の進展にみるように、直接にはガーリチにおける親ハンガリー勢力の懐柔を目的としていた。

【ハンガリー王は、ダニール [I111] とハンガリー王女とを結婚させようとする】

ダニール [I111] がハンガリー人のところにいたとき、アンドラーシュ王とハンガリーの貴族たち、全地〔の民〕は、自分〔王〕の娘¹⁰⁴⁾をダニール公 [I111] に嫁がせようとした。〔娘とダニールの〕二人ともまだ子供だった¹⁰⁵⁾。それは、かれ〔王〕には息子がいなかったからである¹⁰⁶⁾。

6715〔1207〕年

【神聖ローマ皇帝フィリップ・フォン・シュヴァーベンの暗殺（1208年6月21日）と聖エリザベートについて】

〔その年に〕大いなるローマ皇帝フィリップ¹⁰⁷⁾が、〔ハンガリー〕王妃¹⁰⁸⁾〔ゲルトロード〕の兄弟〔エクベルトの〕使囀によって殺害された¹⁰⁹⁾。かれ〔エクベルト〕は自分の姉妹〔ゲルトロード〕に援助者を見つけてくれるよう頼んでいた。かの女はかれを助けることはできず、辛うじて自分の娘を方伯の息子ルードヴィッヒ¹¹⁰⁾に嫁がせたただけだった。かれ〔ルードヴィッヒ〕

104) この「娘」（ハンガリー王女）は、下注 111 で述べられるのちの聖エルジュベト（エリザベート）を指している。

105) ダニール [I111] の生年は 1201 年頃と推定することができるので、この事件のときには 10 歳ほどであり、娘は 4 歳ほどだった。

106) 結局この結婚は成立せず、「娘」（ハンガリー王女）は政略結婚によってテューリンゲン方伯ルードヴィッヒと結婚することになった（下注 110）。

なお、アンドラーシュの長男ベアラ（のちの四世）は 1206 年に生まれていることから、1211 年頃の事件を扱っているこの記事は時系列の辻褄があわない（〔Perfecky1973: p. 131. n. 23〕参照）。コトリヤールによれば、ハンガリー王家とダニール [I111] のあいだの政略結婚は、ロマン・ムスチスラヴィチ [I11] の存命中にすでに企図されており、1204 年、あるいは 1205 年前半に、ルーシ・ハンガリー・ポーランド三者同盟の基礎として置かれており、そのことが記されているとしている〔Котляр 2005: С. 195〕。

107) 神聖ローマ皇帝フィリップ・フォン・シュヴァーベン（在位：1198～1208年）を指している。

108) ハンガリー王アンドラーシュ二世の妃であるゲルトロードを指している。かの女は、アンデクス伯爵家ベルトルド四世（メラニア公爵、1204年没）の娘で、1203年以前にハンガリー王と結婚している。なお、かの女の実の兄弟には、バンベルグ司教のエクベルト（1237年没）（下注 109 参照）、およびカロクサ（Kalocsa）大主教でアクイレイア（Aquileia）総大司教だったベルトルド（1251年没）がいた（下注 184 参照）。

109) フィリップ・フォン・シュヴァーベンは、1208年6月21日に娘の結婚問題をもとに、ヴィッテルスバッハ家のバイエルン宮中伯オットー八世によって暗殺されている。ゲルトロードの兄弟のバンベルク司教エクベルトは、オットー派としてこの事件に関与していた。

110) 「ルードヴィッヒ」（Лудовик）は、テューリンゲン方伯（在位：1217年～1227年）・ザクセン宮中伯のルートヴィヒ四世（Ludwig IV, 1200年～1227年）のこと。聖人伯（der Heilige）の渾名で呼ばれる。その父はテューリンゲン方伯ヘルマン一世で、皇帝フィリップ暗殺事件のときにはエクベルトの同盟者だった（上注 109 参照）。

は力があり、かの女の兄弟〔エクベルト〕を助けた。

現在ではこの娘は聖エルジェーベト¹¹¹⁾ (Альжбитель) として聖人とされているが、かの女の以前の名前はキネカ (Кинька) だった。かの女は自分の夫の死後¹¹²⁾ に非常に神に仕え、それゆえに聖人と呼ばれるようになったのである。

しかし、我らはすでに話を始めたところに戻ろう。

6716 [1208] 年

【ガーリチ地方の公座を獲得したイーゴリー族諸公が、ガーリチの親ハンガリー派貴族を弾圧する：1211 年前半～夏】

イーゴリ [C432] の息子たちはガーリチの〔親ハンガリー派の〕貴族たちを討つべく、かれら〔貴族たち〕をいかにして絶滅したらよいかについて協議した。そして不幸なことに、貴族たちは滅ぼされた。ユーリイ・ヴィタノヴィチ¹¹³⁾ が殺された。**【724】** イリヤ・ステパノヴィチ¹¹⁴⁾ や他の上級の貴族たち〔も殺された〕。殺害されたのは全部で 500 人であり、その他〔の貴族たち〕は逃げ去った¹¹⁵⁾。

111) 「エルジェーベト」(Альжбитель, Erzsébet) (1207 年～ 1231 年) は、ハンガリー王エンドレ二世 (在位: 1205 年～ 1235 年) とゲルトルード (上注 108) の娘。1221 年に 14 歳でテューリンゲン方伯ルートヴィヒ四世と結婚した (前注 110)。かの女は 1231 年 10 月 19 日に没し、ほどなく (1235 年) ローマ教皇グレゴリウス九世によって列聖された。カトリック教会では「聖エリーザベト」「聖エリザベート」などとして知られている。

112) ルードヴィッヒは 1227 年の十字軍遠征の際に没している。そのことから、ダニールとエルジェートの結婚話からここまでは、後代の記事の挿入であることが分かる。

113) 「ユーリイ・ヴィタノヴィチ」(Юрий Витанович) はガーリチの親ハンガリー派貴族。

114) 上注 96 を参照。

115) コトリアルによれば、イーゴリー族諸公は、ロマン公 [II1] とガーリチ貴族との激しい闘争の経験を参照して、弾圧政策をとったが、かれらにはロマンのような力も権威もなく、外来者であったことから、ウラジーミル、ガーリチ地方や他の城市の市民のあいだに支持基盤をもっていなかった。かれらは、ガーリチ人から見れば、ロマンの子らから公座を奪った篡奪者だった。また、当時の政治情勢もイーゴリー族諸公にとって不利にはたらいだ [Котляр 2005: С. 195-196]。

【親ハンガリー・反イーゴリー族派のガーリチ貴族がハンガリーに逃げ、ダニール [I111] を擁立してガーリチ奪回を狙う】

ヴワディスワフ・コルミリチチ¹¹⁶⁾ はハンガリー人のもとに逃げた。ステイスラフ¹¹⁷⁾ とフィリップ¹¹⁸⁾ も〔ハンガリー人のもとに逃げた〕。かれらはハンガリー人のもとに年少のダニール [I111] がいるのを見て、ハンガリー王にこう請願した。「われらにガーリチを父の地としているダニール [I111] を与えよ。かれとともに、イーゴリー族から〔ガーリチを〕取り戻すために」。

【ハンガリー王アンドラーシュ二世は配下の軍司令官をガーリチ地方進攻に派遣する：1211年夏】

〔ハンガリー〕王〔アンドラーシュ二世〕は大いなる親愛をもって、よく武装された軍兵を派遣した。大いなる高官ポート¹¹⁹⁾ (Пот) を派遣し、かれに全軍の指揮を委ねた¹²⁰⁾。かれ〔ポート〕に同行した軍司令官の名は次の通り。第1にペトル・トゥーロヴィチ (Петръ Туровичь)、第2にバンコ (Банко)、第3にミーカ・ブラダーティ (Мика Брадагыий)、第4にロトハロト (Лотохарогъ)、第5にモキヤン¹²¹⁾ (Мокьянь)、第6にチブレツ (Тибрець)、第7にマロツェル (Мароцель)。他に多くの者がおり、かれらについて証言し、書くことはできないほどだった。

【ヴワディスワフとハンガリー勢はペレムィシェリを降伏させ、ペレムィシェリ公スヴァトスラフ [C4323] は市民の捕虜となる：1211年9月】

全員が集合した。最初にペレムィシェリの城市を討つべく進軍した。ヴワディスワフ〔・コルミリチチ〕は城市に到達すると、かれら〔ペレムィシェリの住民たち〕にこう言った。「兄

116) コルミリチ家 (Кормиличич) はこれまで全体として親イーゴリー族派として記されていたが (上注 37 参照)、ヴワディスワフは親ハンガリー派だったということか。

117) 「ステイスラフ」(Судиславъ) は、ガーリチ貴族の中で、親ハンガリー・反イーゴリー族の立場の指導者。ガーリチの貴族、ガーリチでのロマンに対する反対派貴族のリーダーのひとり。ウラジーミル・コルミリチチの盟友で、後継者。彼については、6718(1210)年、6734(1226)年、6737(1229)年、6739(1231)年、6741(1233)年、6742(1236)年の記録に言及されている。

118) 「フィリップ」(Филипъ) はガーリチの貴族で、イーゴリー族反対派の活発な活動家であり、さらに、ダニール・ロマノヴィチ [I111] に対する陰謀の企図者のひとりでもあった (6738(1230)年の記事を参照)。

119) 「大いなる高官」(Великий дворский) はここではハンガリー王の側近で王に次ぐ権力者の「宮中伯」(nádor, palatine) (上注 89 参照) を指している。ポート (Пот; ラテン語史料では Pot) は 1209年～1212年の期間この宮中伯の位に就いていた。

120) ポートに率いられたこのハンガリー軍は通常のルートであるサノク経由でペレムィシェリに近づいた。遠征は 1211年8月末あるいは9月初旬に始まったと考えられる [Котляр 2005: С. 196]。

121) 上注 32 の「大いなる盲目のモケイ」と同じ人物。ハンガリーの軍司令官。

弟たちよ、そなたたちは何を思慮しているのか。そなたたちの父と兄弟を殺害したのはこの者たち〔イーゴリー族諸公〕ではないか。また、他の者たちもそなたたちの財産を奪い取り、そなたたちの娘を妻として奴隷に与えたのではないか。そなたたちの父祖伝来の地は外来の者ども¹²²⁾が略取したのではないか。そなたたちは、かれらのために命を賭けるつもりなのか。]

かれら〔ペレムィシェリ人〕は起こったことを残念に思い、城市を引き渡すと、かれらの公のスヴァトスラフ¹²³⁾ [C4323] を捕まえた。

【ヴワディスワフとハンガリー軍はズヴェニゴロド城市を攻めるが突破できず、城市を包囲する：1211年9月】

〔ヴワディスワフとハンガリーの軍勢〕はそこ〔ペレムィシェリ〕からズヴェニゴロドへ向けて進軍した。【725】ズヴェニゴロド人はかれら〔軍勢〕と激しく戦い、〔ズヴェニゴロドの〕城内にも、外廊の柵の内側にもかれらを入れることはなかった。かれら〔ハンガリーの軍勢〕は城市を包囲して布陣していた。

【ハンガリー勢包囲軍へのポーランドからの援軍が、ベルズおよびポーランド、ヴォルィニ地方諸公から、ズヴェニゴロドへ向けて派遣される】

ヴァシリコ [I112] はベルズを公支配していた¹²⁴⁾。かれ〔ヴァシリコ [I112]〕のところから〔派遣されて〕、大いなるヴァチェスラフ・トルスティ¹²⁵⁾ (Великий Вячеслав Тольстый), ミロスラフ¹²⁶⁾ (Мирослав), デミヤン¹²⁷⁾ (Демьян), ヴォロティスラフ¹²⁸⁾ (Ворогислав) やその他の貴族

122) ここでは、チェルニゴフ地方からやって来たイーゴリー族諸公を「外来の者ども」(пришелци)と呼んでいる。

123) スヴァトスラフ [C4323] がペレムィシェリ公だったことについては、上注 101 を参照。

124) この時、ベルズの公座を得ていたヴァシリコ [I112] はまだ8歳ほどだったが、ロマン [I11] の息子としての権威があったのだろう。かれの配下で貴族たちが行動しているような書き方になっている。

125) この「ヴァチェスラフ」はロマン公 [I11] に仕えた長老の側近貴族。『ノヴゴロド第一年代記 (新輯)』6711(1203)年の記事に「その年、ロマン [I11] はヴァチェスラフを派遣して、リユーリク [J2] を〔修道士として〕剃髪するよう命じた」[НПЛ: С. 240]とあり、このヴァチェスラフと同一人物と見なしてよいだろう。「大いなる」(великий)という形容があることから重臣だったと考えられる。「トルスティ」(толстый)は太っているという意味を持つことから、体型からきたかれの通称だったのかもしれない。なお、かれについては、本年代記の6716(1208)年(下注 151)、6735(1227)年(下注 173)の記事にも言及がある。

126) 「ミロスラフ」は前注のヴァチェスラフと同様に、ロマン一族に仕える側近貴族のひとりだった(上注 47 参照)。

127) 「デミヤン」もヴァチェスラフ、ミロスラフと同様にロマン一族、特にダニール [I111] に仕える側近貴族のひとりであり、以下の記事(下注 309)では「千人長」(тысяцкий)と称されている。

128) 「ヴォロティスラフ」もガーリチ貴族で、ダニール [I111] 支持派だった。

たち多数と兵がベルズから〔出発した〕。

レシェクはポーランドの地からステイスラフ・ベルナトヴィチ¹²⁹⁾(Судислав Берногович)と多くのポリヤン人¹³⁰⁾を派遣した。ペレソプニツァからは、無言公¹³¹⁾のムスチスラフ [I24] が多くの兵を連れてやって来た。アレクサンドル [I121] は兄弟〔フセヴォロド [I122]〕とともに¹³²⁾、ヴラジミルから多くの兵を連れてやって来た。イングヴァル [I22] は自分の息子¹³³⁾〔ヤロスラフ [I221]〕を、ルチェスク (Лучьк), ドロゴブージュ¹³⁴⁾ (Дорогобуж), シュムスク¹³⁵⁾ (Шюмск) から多くの兵を率いさせて派遣した。

【ズヴェニゴロドを防衛するロマンのもとにポロヴェツ人とイジャスラフが援軍としてやってくる】

他方、ロマン [C4324] のところ¹³⁶⁾には援軍としてポロヴェツ人がやって来た。かれらとともにイジャスラフ・ウラジーミロヴィチ [C43211] 〔もやって来た〕¹³⁷⁾。

129) 「ステイスラフ・ベルナトヴィチ」(Судислав Берногович)について、パシュートはかれを、イーゴリー族諸公の弾圧でハンガリーへ逃げた親ハンガリー派のガーリチ貴族ステイスラフ (上注 117 参照) と同一人物としているが、こちらはポーランドの軍司令官として記述されており、別の人物と考えるべきだろう。

130) 「ポリヤン人」(поляне)は原義は「平原の人」で、ここではポーランド語 polanie からの音写語。主にヴィエルコポルスカ地方の住民を指している。

131) ムスチスラフ [I24] が「無言公」(Немый, Немой)と呼ばれていることについて、本年代記の 1227 年の記事 [Стб. 750] にもあり (下注 367) 同時代の通称であったことは確かだが、実際にかれ自身の肉体的な障害にもとづくものか、訥弁であったのかなどの詳細は確認できない。[Домбровский 2015: С. 295-296]

132) このヴラジミル公アレクサンドル [I121] の兄弟とは、チェルヴェンの支配公フセヴォロド [I122] を指している (上注 81 を参照)。

133) これはイングヴァル [I22] の息子ヤロスラフ [I221] を指している。ヤロスラフはこの時父親が公支配していたルチェスク (ルツク) におり、父の命令で出兵した。本年代記では 6734(1226) 年、6735(1227) 年の項にかれについての言及がある。

134) 「ドロゴブージュ」(Дорогобуж) は、ゴリイナ川中流左岸に位置するヴォルィニ地方の主要城市 (現在も同名)。ペレソプニツァからだとゴリイナ川の上流にあたり、東へ 43km ほどのところに位置している。

135) 「シュムスク」(Шюмск, Шумск) はゴリイナ川をドロゴブージュからさらに上流遡ったところにあり、ヴォルィニ地方の付属城市で、ペレソプニツァからだと、南へ約 62km ほどのところに位置している。

136) この時ロマン [C4324] が公支配していたズヴェニゴロドにポロヴェツ人が援軍としてやって来たのである (上注 40 参照)。

137) イジャスラフ [C43211] は当時テレボプリを公支配していた (上注 102 を参照)。テレボプリからズヴェニゴロドまでの距離は、北西方向へ 115km ほどある。

【ハンガリー勢のズヴェニゴロド包囲軍はポロヴェツ人の反撃に遭い、リュータヤ川まで逃れ、本営に戻る】

ハンガリー人は〔城市防衛の〕軍に打ち勝つことができず、自分たちの陣営から追い払われた。〔そのとき〕ミカ (Мика) は創傷を負い、トバシヤ (Тъбаша) は首を斬り落とされた¹³⁸⁾。

ポロヴェツ人はこれを見て、かれら〔ハンガリー人〕を討つべく激しく攻めた。かれら〔ハンガリー勢は〕〔ポロヴェツ人より〕先にリュータヤ川¹³⁹⁾ (Лютая рѣка) へ軍を進めた。〔ハンガリー勢への援軍の〕ポーランド人¹⁴⁰⁾とルーシ人がそこへ来ていなかった。かれら〔ハンガリー人〕は馬を降りてようやく渡渉した、ポロヴェツ人とルーシ人¹⁴¹⁾はこれに向かって射撃をした。そこではマルツェル¹⁴²⁾ (Марцел) が軍旗から **【726】** 離れてしまい、ルーシ人はそれ〔軍旗〕を捕獲した。マルツェルは大きな屈辱を受けた。

ハンガリー人は自分たちのコルイマク¹⁴³⁾ すなわち陣営へ戻った。

【ロマン [C4324] は援軍を求めてズヴェニゴロドを出たが捕獲され、ズヴェニゴロドはハンガリー勢に降伏する】

そこからロマン [C4324] は城市〔ズヴェニゴロド〕を出た。ルーシ諸公¹⁴⁴⁾の援軍を求めたのである。〔その途上で〕かれ〔ロマン [C4324]〕がシムスク¹⁴⁵⁾の橋の上にいるとき、かれは

138) 「ミカ」(Мика)と「トバシヤ」(Тъбаша)はズヴェニゴロド攻城戦に参加していたハンガリー軍の軍司令官の名前だろう。

139) 「リュータヤ川」(Лютая рѣка)の所在について、ウクライナ語訳はカルパチア山麓のウジ川(Уж)支流の現在のリュータ川(Лютянка; Люта)に同定しているが、城市ズヴェニゴロドからだとな西へ140kmも離れており、ポロヴェツ人がそこまで追走するのは現実的ではない。所在地は不明だが、ズヴェニゴロド近くの川と考えるべきだろう。

140) スディスラフ率いるポーランド人の攻城側(ハンガリー勢)への援軍を指している(上注129を参照)。「リュータヤ川」近辺で援軍と合流することを約していたということか。

141) このルーシ人(русь)はロマン公[C4324]の配下の従士や軍兵を指している。チェルニゴフ地方(いわゆる「ルーシの地」に相当する)から連れて来た兵が多かったからこのように呼んだのだろう。

142) この「マルツェル」(Марцел)も、上記のミカ、トバシヤ(上注138)と同様に、ハンガリー勢の軍司令官の名前だろう。

143) 「コルイマク」の原語はкольмагはチュルク語起源の「本営、陣営」を意味する語で、直後に同義のスラブ語であるстанの語で言い直している。

144) ここではロマン[C4324]はズヴェニゴロドを出て東へと向かい、キエフ公領(「ルーシの地」)の城市を支配していた諸公の援軍を求めたのである。パーフェキイは、ロマンの同族(オレーグ一族)で当時キエフ公だったフセヴォロド・スヴァトスラヴィチ[G4](在位:1210~1212年)の援軍を求めたと、より限定的に考えている[Perfecky1973: p. 132. n. 25]。

145) シムスク(Шумьскы)は、ズヴェニゴロド攻城軍を支援していたイングヴァル[122]の支配下にある城市だった(上注135)。確かに、ズヴェニゴロドからキエフに向かう途上のほぼ中間地点に位置している。

ゼルニコ (Зернько) とチュホマ (Чухома)¹⁴⁶⁾ によって捕らえられた。そしてダニール公 [I111] の陣営¹⁴⁷⁾ へ、すべての公とハンガリー人軍司令官たちの〔陣営へと〕連行された。

そして、〔スヴェニゴロド〕の住民に対して軍使が派遣されて、こう言った。「降伏せよ、そなたたちの公は捕らえられた」。かれら〔住民たち〕は、情報が伝わってくるまでは、このことを信じなかった。それから、ズヴェニゴロド人は降伏した。

【ハンガリー勢はガーリチへ進軍し、ウラジーミル [C4321] はガーリチから逃げ出す。ハンガリー勢とダニール [I111] はガーリチに入城する：1211 年】

そこからかれら〔ハンガリー勢〕はガーリチへと進軍を始めた。〔ガーリチ公〕ウラジーミル [C4321] はガーリチから逃げ出した。かれの息子イジャスラフ [C43211] も〔逃げ出した〕。〔かれらふたりは〕ネズダ川¹⁴⁸⁾ (Незда) まで追撃された。イジャスラフ [C43211] はネズダ川の河岸で戦った。かれは荷駄用の馬を奪い取られた¹⁴⁹⁾。その後〔ハンガリー勢は〕ガーリチへ戻って来た。

【ダニール [I111] はガーリチの公座に就き、母親がガーリチへやって来る：1211 年夏】

その時ロマン [I11] の大いなる公妃が、自分のいとしい息子ダニール [I111] に会うために〔城市ガーリチへと〕やって来た¹⁵⁰⁾。そのとき、ヴラジミルとガーリチの貴族であるヴラジミルのヴァチェスラフ¹⁵¹⁾ とガーリチのヴワディスワフ〔・コルミリチチ〕¹⁵²⁾、およびすべてのヴラジミルとガーリチの貴族たち、さらにハンガリーの軍司令官たちが、ダニール [I111] をかれの父

146) この「ゼルニコ」(Зернько)と「チュホマ」(Чухома)については不明だが、これまでも戦いの描写でハンガリーの人名が挙がっており(上注 32, 33, 138, 142 を参照)、ここも同じ資料にもとづいているとすれば、やはりハンガリー軍の軍司令官の名前である可能性が高い。

147) 「ダニールの陣営へ」(во стан ко князю Данилови)とあることから、このベレムィシェリ、ズヴェニゴロド、ガーリチへの攻撃のためにハンガリー王が派遣したヴワディスワフ指揮下の軍勢の中に、年少のダニール [I111] も加わっていたことが分かる。

148) 「ネズダ川」(Незда)は、ドニエストル川水系セルト川(Серет)の左岸支流で、現在のグニズナ川(Гнізна)に相当する。ガーリチからだとその河口まで北東方向へ 85km ほど離れている。

149) ウラジーミル [C4321] はガーリチを逃げ出して、最終的にかれらの拠点都市のノヴゴロド=セヴェルスキイもしくはプチヴリへと逃げたと考えられる。ただし、その息子のイジャスラフ [C43211] は、それまでの支配領であるテレボヴリ(上注 102 参照)に残留したのではないかと(下注 393 参照)。

150) ベルズでヴァシリコ [I112] とともに市民の庇護を受けていた公妃(上注 74)は、ガーリチがハンガリー勢の手に落ちたことを聞いて、ガーリチへやって来たのである。

151) ヴァチェスラフ・トルステイのこと。上注 125 を参照。

152) 「ガーリチのヴワディスワフ」(Володиславъ галицкий)の句はフレープコフ系の写本のみにある読みで、イパーチイ写本にはない。

である大いなる公ロマン [I11] の公座に据えた。聖なる聖母処女マリアの教会¹⁵³⁾ で〔着座の儀式が行われた〕。【727】

アンドラーシュ王は、この兄弟¹⁵⁴⁾ である大いなる公ロマン [I11] に対して持っていた最初の親愛を忘れることはなかった。〔このようにして〕、かれ〔王〕は自分の軍を〔ガーリチへ〕派遣して、自分の息子¹⁵⁵⁾ をガーリチの〔公座に〕据えたのである。

【イーゴリー族のロマン、スヴァトスラフ、ロスチスラフがガーリチ人の手で絞首刑に処される：1211 年 9 月】

〔それまでのガーリチ公だった〕ロマン公 [C4324] は捕らえられた¹⁵⁶⁾。スヴァトスラフ [C4323]、ロスチスラフ [C4325] も¹⁵⁷⁾ 〔捕虜になった〕。

ハンガリー人はかれら〔捕虜となった公たち〕を〔ハンガリー〕王のもとに連行しようとした。しかし、ガーリチ人たちはかれら〔ハンガリー人〕に対して、どうか復讐のためにかれら絞首刑にしてほしいと懇願した。ハンガリー人は多大な贈物によって〔買収されて〕、〔イーゴリー族諸公は〕9 月¹⁵⁸⁾ に絞首刑に処された¹⁵⁹⁾。

【ロマンの公妃は自ら支配を望んだことから、貴族たちによってガーリチを追放される：1211 年末】

ダニール [I111] はガーリチで公支配を始めたとき、かれはとても年少であり、自分の母親の

153) この「聖なる聖母処女マリアの教会」(церковь святѣя Богородица приснодѣвица Марья) は、ガーリチの首座教会で「聖母就寝」(Успение Богородицы) に献堂されており、12 世紀 40 ~ 50 年代にガーリチの主教座が置かれたことを契機に創建されたものと推定されている。現在のガーリチ郊外のクリロス (Крилос) 村に礎石の遺構が残っている ([Раппопорт 1982: С. 108])。本年代記では、1187 年のガーリチ公ヤロスラフ八智公 [A121] の死去の記事で最初に言及されている。

154) アンドラーシュ二世とロマン [I11] の「兄弟」関係については、上注 30 を参照。

155) 「自分の息子」とは、ここではダニール [I111] を指している。上注 31 を参照。

156) ロマン [C4324] が捕虜になったことについては、上注 145, 146 を参照。

157) スヴァトスラフ [C4323] はベレムィシェリを公支配していたが(上注 101 参照) ハンガリー勢に捕らえられたことになる。ロスチスラフ [C4325] についてはここが初出だが、兄弟たち(ロマン [C4324]、スヴァトスラフ [C4323]) と行動をともししており、一緒に捕らえられたのだろう。

158) これはフルシェフスキイに従って 1211 年の 9 月と考えるべきだろう [Грушевський 2005: С. 335-336] (ウクライナ語訳は 1210 年 9 月としている [Літопис руський, 1989: С. 373])。

159) 処刑されたイーゴリー族諸公については、『ノヴゴロド第一年代記(新輯)』6722(1214) 年の記事に、フセヴォロド・スヴァトスラヴィチ [G4] のムスチスラフ [J51] とその兄弟への言葉として「お前たちはガーリチでわしの兄弟である二人の公を悪人として吊し、すべての者たちに屈辱を与えた」[НПЛ: С. 251] と記されている。そのため、フルシェフスキイなど研究者の中には、処刑されたイーゴリー族は二人だったという説も出されている [Котляр 2005: С. 197] [Perfecky1973: pp.132. n. 28]。

ことを認識できないほどだった¹⁶⁰⁾。

しばらく時を経て、ガーリチ人はダニール [I111] の母親をガーリチから追放した。ダニール [I111] は自分の母親と別れることを望まず、かの女を思って泣いた。それほど年少だったのである。しかし、シムスクの家令¹⁶¹⁾ であるアレクサンドル (Олександр) が [ガーリチに] やって来た。かれは、かれ [ダニール] の馬の手綱を手を取った。かれ [ダニール] は剣を引き抜くと、かれ [アレクサンドル] に斬り付け、かれが乗っていた馬も斬り付けた。母は、かれ [ダニール] の手から剣を取りあげると、ガーリチに留まるよう説いた。そして、かの女自身はベルズへと出発した。かの女 [公妃] はヴワディスワフ¹⁶²⁾ の助言によって不忠のガーリチ人のもとに [ダニールを] 残したのだった。[公妃が追放された理由は] かの女は自ら [ガーリチの] 公支配を望んだ [からである]。

[ハンガリー] 王はかの女 [公妃] が追放されたことを知ると残念がった。

6717 [1209] 年

【ハンガリー王はヴォルニニ地方の貴族と諸公を味方につけて、新たにガーリチへ介入し、支配貴族たちを捕らえる：1211/1212年冬頃】

{冬が到来すると¹⁶³⁾}, [ハンガリー] 王はガーリチへやって来た。かれは自分の義理の兄弟の妻 (ягровь) であるロマン [I11] の大いなる公妃とヴラジミルの貴族たちを連れてきた。イングヴァル [I22] はルチェスクから、**[728]** 他の諸公も [ガーリチへやって来た]。

160) ロマンの公妃が息子ダニール [I111] に会うためにガーリチにやって来たとき (上注 150), ハンガリーで育ったダニールは、自分の母親のことが分からなかったということ。ただし、ダニール [I111] の生年が 1201 年頃だとすると (上注 23 参照), このときおよそ 10 歳であり、母親のことが認識できないほど「年少」だったとは考えにくい ([Котляр 2005: С. 197] も参照)。この時点でのダニールの非力さ、それに対する公妃の政治力の強さを強調するための年代記者の誇張的な表現とみるべきだろう。

161) 「シムスクの家令」の原文は тивун шюмавиньский で「シュマヴィンスク」となるが、ここは地名シムスク (上注 135) の形容詞形と解釈した。以下の記述は、おそらくシムスク公のイングヴァル [I22] から、公妃をベルズに連れて行くために派遣されて来た「家令」(公の命令を執行する高官) が、母親と別れることに抵抗したダニール [I111] を強引に引き離したというエピソードなのだろう。

162) 上注 52 を参照。ヴワディスワフ・コルミリチチは奸計をもって公妃をベルズに追放し、幼いダニール [I111] だけを手に置いて、実質的なガーリチの支配を狙ったのである。

163) この冬 (зимѣ же бывши) は、1211/1212 年と 1212/1213 年の二つの可能性があり、フルシェフスキは前者をとっている [Грушевський 2005: С. 336]。コトリヤールは、ダニールのガーリチ公座就位から 1 年後の後者と考えているが [Котляр 2005: С. 198], いずれにせよどちらかに定める決定的な論拠はない。

〔ハンガリー王は〕、自分の義理の兄弟の妻、ヴラジミルの貴族たちと協議をして言った¹⁶⁴⁾。「ヴワディスワフ¹⁶⁵⁾が公支配をしており、わしの義理の兄弟の妻を追放してしまった」。

こうして、ヴワディスワフ、スディスラフ、フィリップ¹⁶⁶⁾が捕らえられて、拷問に掛けられた。スディスラフは、多くの財産を与え、自分の身柄を黄金で身請けした。言い替えれば、多くの黄金を与えて解放されたのである。他方、ヴワディスワフは鎖を掛けられてハンガリーの地へと連行された¹⁶⁷⁾。

【弾圧を受けた反ハンガリー派のガーリチ貴族たちは、ペレソプニツァ公ムスチスラフ [I24]のもとに逃げ、援助を得て反撃を開始する：1213 年】

ヴワディスワフがハンガリー人のもとに連れて行かれたとき、ヤヴォルド (Яволод)、ヤロポルク (Ярополк) とその兄弟¹⁶⁸⁾は、ペレソプニツァのムスチスラフ [I24]のもとに逃げて¹⁶⁹⁾、ムスチスラフ [I24]を連れてきた。ムスチスラフ [I24]はかれらとともにブジェスク¹⁷⁰⁾ (Бозьк)へと進軍した。

そして、グレーブ・ポトコヴィチ¹⁷¹⁾ (Глеб Потковичь)がブジェスクから逃げ出した。イヴァンコ・スタニスラヴィチ (Станославичь Иванко) とかれの兄弟のズビスラフ (Збыславь)もガー

164) コトリヤールはこれを、アンドラーシュ二世が公妃と協議の上、ダニール [I111]のガーリチ公座就位 (実質的な支配) を保証したと解釈している [Когляр 2005: С. 198]。

165) イパーチイ写本では Володимерь と書かれていたのが、単語の後半が消され、Володиславь に修正されている。フレヴニコフ系の写本は Вьлодимерь となっている。ここでは、イパーチイ写本の読みを採用した。

166) 「スディスラフ」と「フィリップ」については上注 117, 118 を参照。先の記事では親ハンガリー派のガーリチ貴族だったが、ここではハンガリー王によって弾圧を受けている。

167) ハンガリーで囚われの身になっていたヴワディスワフは、のちにアンドラーシュ王の手で解放され、おそらく王の支援を受けてだろう、遠征軍を組織してガーリチを占領し、みずからガーリチの「公」となって支配することになる (下注 185 参照)。

168) この三人は代表的な反ハンガリー派のガーリチ貴族として名が挙げられているのだろう。

169) ペレソプニツァのムスチスラフ無言公 [I24] は、これまで一貫して、反ハンガリー派のガーリチ貴族の同盟者だった (上注 95 のエピソード参照)。

170) 「ブジェスク」(Бозьк, Бужеск) はヴラジミル公領を流れる西ブーグ川の上流域にある城市 (名称はブーグ川からきている)。現在のブーシク市 (Буськ) に相当する。ガーリチ公領内のヴォルニイ地方に近いところにあり、ズヴェニゴロドまで南西へ 40km ほどしか離れておらず、おそらく、ムステスラフはズヴェニゴロドを攻略し、さらに南下してガーリチへの進攻を狙ったのだろう。

171) 「グレーブ・ポトコヴィチ」(Глеб Потковичь) はガーリチの貴族でブジェスクの代官として派遣されていたのだろう。かれはガーリチへ逃げたと考えられる。

リチ〔の城市〕へ逃げてくると、ガーリチ人に対して、戦争と包囲戦のことを伝えた¹⁷²⁾。

【ムスチスラフ [I24] および貴族たちのガーリチへの進軍の報を受けた公妃はダニール [I111] とともにハンガリーへ逃げ、ヴァシリコ [I112] はベルズへと逃げる：1213年】

そこで、ロマン [I11] の公妃は自分の息子ダニール [I111] およびヴァチェスラフ・トルステイ¹⁷³⁾ (Вячеслав Тольстый) とともに、ハンガリー人のもとへと逃げた。他方、ヴァシリコ [I112] は、ミロスラフ¹⁷⁴⁾ とともにベルズへ行った。

【ハンガリー王による大規模なガーリチ進攻：1213年秋】

いくらかの時間が経って、〔ハンガリー〕王は大いなる戦争を始めた¹⁷⁵⁾。

6718〔1210〕年

【ヴラジミル公アレクサンドル [I121] はレシェク一世の支援を得て、ヴァシリコ [I112] をベルズから追放してベルズを支配する。ヴァシリコはカメネツへ逃げる：1213年】

{この年}〔ポーランド大公〕レシェクはアレクサンドル¹⁷⁶⁾ [I121] に説得されてベルズ¹⁷⁷⁾ へ〔攻めるために〕到来した。アレクサンドル [I121] は、ロマンの息子たち〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112]〕に悪しきことをなそうとしたが¹⁷⁸⁾、〔ベルズを〕占領することができなかったからである。〔レシェクは〕ベルズを占領し、アレクサンドル [I121] に与えた。〔ベルズの〕貴族たちは〔ロマンの息子たちを〕裏切ることはなく、全員がヴァシリコ [I112] 公とともに **【729】**

172) イヴァンコとスプイスラフも、おそらくガーリチの付属城市であるブジェスクもしくはズヴェニゴロドの貴族（城市の代官）であり、ムスチスラフ [I24] 軍の進攻の勢いが強かったため、ガーリチへ逃げて、敵軍の来襲について告げたのである。

173) 「ヴァチェスラフ」はロマン [I11] 一族に仕える側近貴族。上注 125, 151 を参照。

174) 「ミロスラフ」(Мирослав) については上注 47, 126 を参照。

175) フルシェフスキはこのアンドラーシュ二世の新しい遠征を 1213 年秋の初めとしている。
[Грушевський 2005: С. 336, 380]

176) この時、アレクサンドル [I121] はヴラジミル＝ヴォルィンスキイの支配者だった。かれはレシェクと非常に緊密な同盟を結んでおり、ヴラジミルの公座に復帰したのもレシェクの援軍のおかげだった（上注 69）。

177) 当時ベルズには側近ミロスラフの庇護のもとヴァシリコ [I112] がおり（上注 174）、この城市はロマン一族とその支持派貴族たちにとってヴォルィニ地方の拠点だった。しかし、アレクサンドル [I121] にとってはベルズは、ヴラジミルの城市と並んで父から受け継いだ父の地と見なされていた（上注 60 参照）。

178) この「悪しきことをなそうとした」(хотя зла) とは、ヴォルィニの地からヴァシリコ [I112] を追放しようとする事（上注 177）。年代記記者のロマン一族びいきの立場からの表現である。

カメネツ¹⁷⁹⁾ (Каменъць) へと退去した。

【ハンガリー王がガーリチへ遠征した不在中に王妃が暗殺される：1213 年 9 月】

〔ハンガリー〕王〔アンドラーシュ二世〕はヴワディスワフを解放した¹⁸⁰⁾。

〔王自身も〕多くの軍兵を集めて、ガーリチへと進軍した¹⁸¹⁾。かれらはレレス (Лелесов) の修道院¹⁸²⁾に滞陣した。そのとき、不忠の貴族たちが、かれ〔王〕を殺そうとした。かれの妻¹⁸³⁾〔ゲルトルード〕は殺され、かれの妻の兄弟でアクイレイア総大司教 (пагръаръ Авлѣський)〔のベルトルト〕はかろうじて逃げ出し、多くのドイツ人が殺害された¹⁸⁴⁾。

その後、〔ハンガリー〕王は引き返したが、多くの者が殺害され、他の者は散り散りに逃げ出した。騒乱が引き起され、〔ハンガリー〕王はかれら〔反乱者たち〕の無法によって戦うことはできなかった。

【ヴワディスワフはハンガリーの援軍とともにガーリチを占領して、公支配を始める：1213 年】

179) 「カメネツ」(Каменъць)の場所については諸注に異同がある。まず、現在のカメネツ = ポドルスキイ (Каменец-Подольский; Кам'янець-Подільський) とするものがあるが [БЛДР-5: С.491], その場合、ベルズから南東方向へと 263km も離れており現実性に乏しい。また、スルーチ川 (Случь) 上流域にある現在のカメネカ村 (Кам'янка Дзержинський) の遺構をその場所とする説もあるが [Літопис руський 373], これもベルズから 270km 程西に行かなければならない。ポーランドの援軍に圧迫されて幼少のヴァシリコが退避した場所としては、ツイリ (Цырь) 川 (プリビャチ川上流支流) 河岸にある現在のカメニ = カシルスキイ (Камінь-Каширський) に同定する説が出されており、これがもっとも妥当性が高い [Войтович 2011: С. 13] ([Котляр 2005: С. 198] も参照)。その場合、ベルズから北北東へ 156km 程離れている。

180) ヴワディスワフ・コルミリチチはガーリチ貴族の反ハンガリー派の指導者として、ガーリチに攻め込んだハンガリー軍に逮捕されて、ハンガリーへと連行されていた (上注 167 参照)。この「解放した」(пусти)とは、後の事態の展開からみて、反ハンガリー派から転向してアンドラーシュ王の意を受けたか、少なくとも、王の暗黙の了解のもとに親ハンガリー派のガーリチ人の軍を組織して、ガーリチへ進軍したと考えられる。

181) 前年の項の「大いなる戦争」(ратъ велика) (上注 175) と同じことを指している。

182) 「レレスの修道院」(монастырь Лелесов) は、現在の東スロバキアのコシツェ州レレス村 (Leles, Lelesz) に相当するとみるべきだろう [Літопис руський, Покажчик]。ガーリチ地方とパンノニア平原を結ぶ街道の要所にあり、アンドラーシュ二世の遠征路の途上、カルパチア山脈を越える直前の地点に当たっていた。1182 年前後に修道院がこの地に建設され、そのため地方の中心地になっていた。

183) ハンガリー王妃ゲルトルードについては上注 108 を参照。

184) アンドラーシュ二世がこのガーリチ遠征で国内に不在のときに、摂政として実権を振るっていた王妃ゲルトルードを排除するハンガリー貴族たちの陰謀が進められ、1213 年 9 月 23 日に、王妃の実弟ベルトルト (上注 108) が客人のオーストリア公と狩に行っている間に、ブタバスト郊外のピリス (Pilis) 山で王妃は暗殺されたとされている。「多くのドイツ人の殺害」とは、ゲルトルトが故郷から連れて来て、ハンガリー宮廷に仕えていたドイツ人廷吏を指しているのだろう。

ヴワディスワフは、全てのガーリチ人を連れて先行して進軍した¹⁸⁵⁾。ムスチスラフ¹⁸⁶⁾ [I24]〔無言公〕は、〔ハンガリー〕王の軍勢が多勢であることを知って、ガーリチから〔ペレソプニツァへと〕逃げ出した。ヴワディスワフはガーリチに入城して、公支配をして、〔ガーリチの〕公座に就いた。

【ダニール [I111] と公妃はハンガリーを去り、ポーランドのレシエク一世の庇護を求め、ガーリチ回復の戦いの準備のためにカメネツへ行く】

ダニール [I111] は自分の母親とともに {〔ハンガリー〕王のところから} 退去して、ポーランド人のもとへと行き、〔ハンガリー〕王と別れを告げた¹⁸⁷⁾。レシエク〔大公〕は大いなる名誉をもってダニール [I111] を受け入れた。〔ダニール [I111] は〕そこから母とともにカメネツ¹⁸⁸⁾へ行った。かれの兄弟のヴァシリコ [I112] と貴族たち全員が大いなる喜びをもって〔ダニール [I111] を〕出迎えた。

6719〔1211〕年

【キエフ公フセヴォロド赤毛公 [G4] はロマン [I11] 一族を支持する】

{その年} フセヴォロド・スヴァトスラヴィチ [G4] がキエフを公支配しており¹⁸⁹⁾、かれはロ

185) 上注 180 を参照。

186) ムスチスラフ無言公 [I24] (上注 95, 169 参照) は、ペレソプニツァを拠点とする支配公だが、これまでもガーリチ貴族を受け入れるなど、一貫してガーリチ支配を狙っていた。今回、ダニール [I111] と母親 (公妃) がガーリチからハンガリーへと逃げたあと (上注 173)、かれは一時的にガーリチの支配をしていたことがこの記事からわかる。

187) このダニール [I111] と母親のポーランド行きは、ハンガリーの宮廷陰謀による混乱 (上注 184) を避けて、レシエクの庇護の申し出に応じてクラクフに亡命したものと考えられる ([Котляр 2005: С. 199] 参照)。

188) 「カメネツ」については上注 179 を参照。ダニール [I111] と母親は庇護を求めていたレシエクの拠点都市クラクフから北東へ 400km ほど移動したことになる。

189) フセヴォロド [G4] は赤毛公 (Черный) と通称され、『ラヴレンチイ年代記』6718(1210)年の項には「この年、フセヴォロド [G4] が再びキエフに座し、リューリク [J2] はチェルニゴフに座した」[ПСРЛ, Т. 1, 1997: Стб. 435] とあることから、この頃からキエフ公だった。

マン [I11] の息子たちに大いなる親愛を持っていた¹⁹⁰⁾。

【レシエクの支援を受けたムスチスラフ [I24] は、レシエクが派遣したダニール [I111]、アレクサンドル [I121]、フセヴォロド [I122] とともにガーリチへ遠征する：1214 年春】

その後、ペレソブニツァ〔公〕のムスチスラフ [I24] は、レシエクを味方に引き入れて¹⁹¹⁾、ガーリチへ向けて進軍した¹⁹²⁾。レシエクはカメネツからダニール [I111] を、ヴラジミルからアレクサンドル [I121] を、ベルズからフセヴォロド¹⁹³⁾ [I122] を、それぞれ自分たちの軍兵を率いさせて、〔ガーリチ遠征のために〕連れてきた。ダニール [I111] の軍勢がいちばん多く、いちばん強固だった¹⁹⁴⁾。【730】かれの父（ロマン [I11]）の大いなる貴族たちがみなかれ〔ダニール〕のもとにいたからである。レシエクはそのことを見て、ダニール公 [I111] とかれの兄弟ヴァシリコ [I112] に大いなる親愛を持つようになった¹⁹⁵⁾。

【ガーリチ貴族たちは防衛に備え、〈ガーリチ公〉の貴族ヴワディスワフは出撃して対抗する。他方、レシエクはポーランド人部隊を、ガーリチへの遠征軍に派遣する：1214 年】

ヤロボルク (Ярополк) とヤヴォルド (Яволод)¹⁹⁶⁾ はガーリチ〔城内に〕籠城した。他方、ヴワディ

190) フセヴォロド [G4] はカジミェシュ二世正義公の娘と結婚しており（『イパーチイ年代記』(7): 245-246 頁）、かの女はレシエク白公の妻の姉妹に当たる。当時、レシエクの庇護を受けていたダニール [I111] と母親の公妃とは、ポーランド王家を介しての間接的な同盟関係（親愛）があったことが想定される。さらに、ロマン [I11] の母アグネスはカジミェシュ二世正義公の妻の姉妹であることから、かの女はフセヴォロド [G4] にとっては義理の叔母であり、ダニール [I111] にとっては父方の祖母というように、ポーランド王家を通じての姻戚関係を持っていた。

191) この部分はイパーチイ写本、フレーブニコフ系写本とも посадивъ Лестька「レシエクを公座に据えて」とあるが、意味が通らないことから、повадивъ（引き入れて）の誤記と解釈して訳した（『Котляр 2005: C. 200』も参照）。

192) ムスチスラフ無言公 [I24] はハンガリーの後援を受けたヴワディスワフの手でガーリチから追放されており（上注 186）、これはガーリチ公座復帰を狙った報復的遠征である。

193) フセヴォロド [I122] については、上注 132 を参照。ヴラジミルの付属城市チェルヴェンの支配公だったが、アレクサンドル [I121] がベルズを占領した（上注 132）のちに、兄弟のアレクサンドル [I121] によってベルズを与えられて、この城市チェルヴェンを支配していたのだろう。

194) ダニール [I111] のもとには、ベルズから追放された弟ヴァシリコ [I112] がカメネツへ連れてきたロマン一族への忠誠心の篤い貴族たちが多くいたと考えられる（上注 179 参照）。

195) このレシエクのロマン一族への「大いなる親愛」（同盟関係）は、キエフ公フセヴォロド [G4] のロマン一族への「大いなる親愛」（上注 190）と文脈や表現が同じであり、年代記記者は、当時不遇であったダニール [I111] たちが有力な同盟者を持っていたことを強調している。

196) ガーリチ貴族の中でも反ハンガリー派の指導者だったヤロボルクとヤヴォルドについては上注 168 を参照。

スワフは、自分のハンガリー人とチェコ人¹⁹⁷⁾たちを率いて〔ガーリチ城から〕出陣すると、ガーリチ人と合流した。かれ〔ヴワディスワフ〕はボブロカ川¹⁹⁸⁾ (Бобръка) に到達した。

レシエクはそのことを知ると、かれらに対抗するためにポーランド人〔部隊を〕派遣した。さらにダニール [П111]〔陣営〕からはミロスラフとデミヤン¹⁹⁹⁾ が、ムスチスラフ [J51]〔陣営〕からはグレーブ・ゼレメエヴィチ²⁰⁰⁾ (Глеб Зеремѣвич) とユーリイ・プロコピエヴィチ (Прокопъичь Юрьи) が²⁰¹⁾〔派遣された〕。

【ヴワディスワフ軍とポーランド＝ルーシ諸公連合軍とのボブロカ川周辺での戦闘。ヴワディスワフは敗走し、連合軍はガーリチの周辺城市を占領する】

大いなる戦闘が起こった。ポーランド人とルーシ人が優勢だった。ダニール [П111] はその時年少だったが²⁰²⁾、騎馬で行くことができた。ヴワディスワフは敗走し²⁰³⁾、かれの軍の多くの者は殺された。

その後、レシエクはガーリチ〔の城市を〕占拠することはできなかったが、進軍してテレボブリ²⁰⁴⁾ (Теребовль) の周辺、モクレコフ²⁰⁵⁾ (Моклеков) とズブイラジ²⁰⁶⁾ (Збыраж) 周辺を掠奪した。ブイコヴェン²⁰⁷⁾ (Быковен) はポーランド人とルーシ人によって占拠された。〔レシエクは〕大

197) この「自分のハンガリー人とチェコ人」(съ угры и чехы)とは、ヴワディスワフがハンガリーからガーリチへ向けて進軍したときに(上注185)、ハンガリーから引き連れてきた一種の傭兵を指している。このような記述には、年代記記者の悪意が込められているだろう。

198) 「ボブロカ川」(Бобръка)は、ルグ川(Луг)(ドニエストル左岸支流)の支流で、現在のボベルカ川(Боберка)に相当する。ヴワディスワフがガーリチ城市を守るために出陣した場所は、現在のビブルカ村(Бібрка)周辺と考えられ、ガーリチからだと北北東に65kmほど進んだところになる。

199) ダニール [П111] の側近貴族で軍司令官のミロスラフとデミアンについては上注126, 127を参照。

200) 「グレーブ・ゼレメエヴィチ」(Глѣб Зеремѣвич)は、ムスチスラフ [J51] に勤務する側近の軍司令官。下注266を参照。

201) この「ユーリイ・プロコピエヴィチ」(Юрий Прокопъевич)も、ムスチスラフ [J51] 配下の高位の軍司令官だろう。

202) ボブロカ川の戦闘が1214年とすると、ダニールは13歳ほどということになる(上注23参照)。

203) ヴワディスワフはガーリチ城市を出て、ボブロカ川周辺まで進軍したが(上注198)、ポーランド勢との戦闘に敗れたのである。

204) 「テレボブリ」については上注102を参照。

205) 「モクレコフ」(Моклеков)の同定は難しいが、現在のテルノピリ(Тернопіль)北にあるビラ村(Біла)の可能性が高い。その場合、テレボブリ(テレボブリャ)の北32kmほどに位置している[Літопис руський, Показчик][Котляр 2005: С. 200-201]。

206) 「ズブイラジ」(Збыраж)はガーリチの付属と城市で、現在のズバラジ(Збараж)に相当し、テレボブリ(テレボブリャ)北方41kmほどに位置している。

207) 「ブイコヴェン」(Быковен, Быковно)はドニエストル川右岸に位置し、ガーリチからは10kmほど下流の近い位置にあった城市と推定される[Котляр 2005: С. 201]。

量の捕虜を捕獲すると、ポーランド人のもとへと戻って行った。

【ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はヴォルィニ地方南東部をアレクサンドル [I121] から獲得すると、ヴラジミル城市の支配を狙う】

その後、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] の二人はレシェクの支援を得て、ティホムリ²⁰⁸⁾(Тихомль)とペレミリ²⁰⁹⁾(Перемиль)をアレクサンドル [I121] の手から勝ち取り²¹⁰⁾、二人はそこで母親とともに公支配を行った。そして、〔二人は〕ヴラジミルを見てこう言った。「ここであれ、ここであれ、ヴラジミルは神の助けによって、われら二人の物になるだろう」。かれら二人はヴラジミルを見ていたのである²¹¹⁾。

【ハンガリー王アンドラーシュ二世はレシェクを攻める：1214 年夏】

その後〔ハンガリー〕王は、レシェクを討つべく進軍を始めた²¹²⁾。〔その時〕ダニール [I111] は、レシェクのもとにいた²¹³⁾。

208) 「ティホムリ」(Тихомль)はゴルィニ(ホルィニ)川上流に位置し、ヴォルィニ地方南東のガーリチ公領との境界近くに位置していた。

209) 「ペレミリイ」(Перемиль)はヴォルィニ地方のストイリ川(Стырь)上流河岸の城市で現在のペレミリ(Перемиль)市に相当する。ヴラジミルから南西方向に78kmほどのところに位置している。

210) アレクサンドル [I121] は当時ヴラジミルの公だったが、ヴォルィニ地方南東方面(ストイリ川およびゴルィニ川上流域)の諸城市を、レシェクの圧力によってダニール [I111] とヴァシリコ [I112] に引き渡さざるを得なくなったということ。このことについてはポーランド史料にも記されている[Котляр 2005: С. 199]。

211) ダニール [I111] 等ロマン一族は、ヴォルィニ地方南方の辺境城市の獲得で満足することはなく、かれらが「父の地」と見なしているヴォルィニ地方の中心城市ヴラジミルの獲得を狙ったのである。

212) レシェクがルーシ諸公と同盟してガーリチに侵攻したことが、ガーリチに潜在的な権利を持っていると考えるハンガリー王の怒りを買ったということか。

213) ダニール [I111] は、レシェクの支持によるガーリチ遠征の功績でティホムリ、ペレミリイを得た後も、レシェクに仕えてかれのもと(クラクフ)に身を置いていたということ。この時期のダニール [I111] とレシェクの緊密な同盟関係は、これ以後の事態の進展においても保持されている。

【ハンガリー王アンドラーシュとポーランドのレシエクはスピーシで会合。自分たちの政略結婚について合意する：1214 年秋】

レシエクは、自分の軍使として **【731】** 軍司令官のパコスラフ・レソティチ²¹⁴⁾ (Лѣсьтич и Пакослав) を派遣して、こう〔ハンガリー王に対して〕言わせた。「貴族〔ヴワディスワフ〕がガーリチを公支配するのは宜しくない。わしの娘²¹⁵⁾ を、そなたの息子カールマン²¹⁶⁾ (Коломан) と結婚させ、かれをガーリチに〔公として〕据えるがよい」。〔ハンガリー王〕アンドラーシュ〔二世〕は、パコスラフのこの助言を気に入り、〔ハンガリー〕王はスピーシ²¹⁷⁾ (Зьпиши) にてレシエクと会合を持った。そして、〔ハンガリー王は〕自分の息子〔カールマン〕の嫁としてかれ〔レシエク〕の娘を娶らせた。

【ハンガリー王はガーリチを支配していたヴワディスワフを捕らえて獄死させる：1214 年秋】

そして、〔ハンガリー〕王はヴワディスワフを捕えるべくガーリチへ〔軍を〕派遣して、かれ〔ヴワディスワフ〕を牢獄に閉じ込めた。〔ヴワディスワフは〕その牢獄で死んだ²¹⁸⁾。

かれ〔ヴワディスワフ〕は、公支配をしたばかりに自らの一族と子供たちに悪しきことをなしたのである。このような訳で、公であれば誰でも自分の子供たちを〔栄えさせ〕られるわけではないのである。

214) イパーチ写本、フレーブニコフ系写本とも原文は Лѣсьтич и Пакослав とあたかも二人のように記されているが、これは一人の人物「パコスラフ・レソティチ」(Пакослав Лесотич) を指している。このアフダニェツ家「パコスラフ・ラソツィツ五世(年長)」(Pakosław V Lasocic Stary Awdaniec) は、クラクフの城代(Kasztelan) という重職に就いていた。かれは、以降の年代記記事に何度も登場するポーランドの高官貴族で、最初はレシエク大公に勤務し、その後大公の妃グリミスラワ(Grzymisława) に仕え、さらにその息子ボレスワフ五世に仕えた。ポーランド史料ではかれはラソトの息子(Pacoslaus Filius Lassote) と呼ばれており、本年代記の呼び名に対応している。[IPSB: Pakosław Stary (Starszy) h. Awdaniec] [Котляр 2005: С. 201]。

215) レシエク大公の娘とは、サロメア(Salome, Саломия) のことで、かの女はレシエクとグリミスラワとの結婚(1207年頃。上注 71 参照)の後すぐに生まれたとしても、当時はまだ 5 歳だった。[Hollý 2007: p. 11-13]

216) ハンガリー王アンドラーシュ二世の息子カールマン(Koloman) の生年は 1208 年で、当時はまだ 5 歳ほどであり、典型的な政略結婚だった。

217) 「スピーシ」(Зьпиши, Спиши) は、当時のハンガリー王国の主要都市の一つで、現在のスロヴァキアのコシツェ州スピーシカ=ノヴァ=ヴェス(Spišská Nová Ves) に相当している。ここで、ハンガリー王とポーランド大公との間でガーリチ地方分割の協議が行われた。

218) ヴワディスワフの動向については上注 203 を参照。

【ハンガリー王はガーリチに息子のカールマンを据え、ペレムィシェリにレシェクを支配させ、ガーリチ地方の分割をはかる：1214 年秋】

〔ハンガリー〕王は自分の息子〔カールマン〕をガーリチに〔支配公として〕据え、レシェクにはペレムィシェリ²¹⁹⁾(Перемышль)を与え、パコスラフ²²⁰⁾にはリュバチェフ²²¹⁾(Любачев)〔を与えた〕。

【レシェクは、アレクサンドル [I121] を脅迫してヴラジミルから追放し、ダニール [I111] とヴァシリコ [I121] をヴラジミルの公座に据える：1215 年初頃】

パコスラフは、ロマン [I11] の〔公妃〕とかの女の息子たちの支持者²²²⁾ だった。レシェクは、パコスラフの助言にしたがって、〔ヴラジミル公の〕アレクサンドル [I121] のところに使者を派遣してこう言った。「ヴラジミルをロマン [I11] の二人の息子、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] に与えよ。もし与えないのなら、ロマン [I11] の二人の息子とともに、そなたを討つべく進軍するだろう」。

かれ〔アレクサンドル [I121]〕は〔ヴラジミルを〕与えなかったので、レシェクは〔アレクサンドルを排除して〕、ロマン [I11] の二人の息子をヴラジミル〔の公座に〕据えた²²³⁾。

6720 [1212] 年

【ハンガリー王とポーランド大公のガーリチ分割をめぐる不和：1217 年】

〔その後、時が経ってから〕〔ハンガリー〕王は、レシェクからペレムィシェリを取りあげ、〔パ

219) 「ペレムィシェリ」(Перемышль) はガーリチの北西約 180km、ポーランド国境に隣接する城市。ガーリチ公国にとっては辺境に位置していた。

220) 上注 214 参照。

221) 「リュバチェフ」(Любачев) はガーリチ公領の北西のポーランド領に近い場所にあり、現在はウクライナ国境に近いポーランドの都市ルバチュウ(Lubaczów) に相当する。

222) 「支持者」(приятель) とは、公とかれが利害関係を持つ城市の市民（貴族）たちとのかかわりで年代記で頻繁に用いられている。支持者は時に公にとって有利な情報を提供したり、活動を行う有力者である。城市の支配をめぐる公同士の争いと城市の混乱を描く記事の中で用いられる場合がほとんどである。[Лавренченко 2015: С. 98]。

223) このヴラジミルの公座交替によってヴラジミルを追放されたアレクサンドル [I121] は、かれの本来の拠点城市であるベルズに行ったのである（下注 320 参照）。

コスラフから] リュバチェフを〔取りあげた〕²²⁴⁾。

【レシエクはノヴゴロド公ムスチスラフ [J51] を味方につける：1217 年】

レシエクは自分が辱めを受けたことを残念に思い、ノヴゴロドのムスチスラフ [J51] に〔支援を求める〕使者を派遣して、こう言った。「そなたはわが兄弟である²²⁵⁾。来たりて、ガーリチ〔の公座に〕座せ」²²⁶⁾。

【ムスチスラフ [J51] は進軍してガーリチを占拠し、ガーリチの支配貴族たちはハンガリーへ逃げる。ムスチスラフの〈第一次〉ガーリチ支配：1217 年】

ムスチスラフ [J51] は、レシエクの助言によって、ガーリチへと進軍した。

全てのガーリチ人とスティスラフ²²⁷⁾ は、ダニール [I111] に対して、〔支援を求める〕使者を派遣した。ダニール [I111] はしかし間に【732】合わなかった。禿頭のベネディクト²²⁸⁾ は、スティスラフとともにハンガリー人のもとに逃げた。ムスチスラフ [J51] はガーリチ〔の公座に〕就いた。

224) アンドラーシュ二世はスピーシでの会合での取り決め（上注 219, 221）を破ったことになる。パーフェキイは、リュバチェフがパコスラフに与えられたと直前に報告しているにもかかわらず、ここではそれをレシエクの所領であるかのように言っているのは、諸写本でここに歪曲あるいは省略があると推定している [Perfekky1973, p. 133. n. 33]。しかし、これはそれぞれから取りあげたと考えればよいのではないか。

225) レシエクの母親はロスチスラフ・ムスチスラヴィチ [D116:J] の娘であり、レシエクにとってノヴゴロド公のムスチスラフ武運公 [J51] は母方の伯叔父の息子（従兄弟）に相当する。レシエクがムスチスラフに同盟を求めたのはこの姻戚関係を頼ったのだろう。

226) ムスチスラフ [J51] がノヴゴロドを去る経緯について『ノヴゴロド第一年代記』6726(1218)の記事では「ムスチスラフ [J51] はヤロスラフ館に民会を召集して『聖ソフィア教会とわたしの父の棺およびそなたたちに拝礼する。わしはガーリチ〔の公座〕を得たいと思う』」[НПЛ: С. 57, 259] と記されている。

227) 「スティスラフ」(Судиславъ) は親ハンガリーのガーリチ貴族の指導者のひとり。当時ガーリチは名目的にはハンガリー王レシエク二世の息子カールマンの支配地だったが、幼少のかれはガーリチに身を置かず、実質的にはハンガリー派の貴族たちが統治していた。

228) 「禿頭のベネディクト」(Бенедиктъ Лысы) は、ハンガリー宮中伯のこと（上注 89）。1213 年秋のハンガリー王アンドラーシュ二世の再度の遠征のとき、軍司令官として加わっていたと推定され、ガーリチを占領したのちは、ガーリチの軍司令官およびカールマンの代官としてこの城市に留まっていたのだろう。

6721 [1213] 年

【ダニール [I111] とムスチスラフ [J51] の娘アンナとの結婚。その子供たちについて：1217 年秋】

{その年, 時が経ってから} ダニール [I111:S]²²⁹⁾ はかれ [ムスチスラフ [J51]] のアンナという娘を娶った²³⁰⁾。そして, かの女は息子や娘たちを生んだ。かれ [ダニール [I111]] の長子はイラクリイ (Иракльи)²³¹⁾ [S1] で, その後レフ²³²⁾ (Лев)[S2], それからロマン²³³⁾ (Роман)[S3], ムスチスラフ²³⁴⁾ (Мистислав)[S4], シヴァルン²³⁵⁾ (Шеванрно)[S5] [が生まれた]。他の息子たちもいたが, 幼くしてこの世を去ってしまった。

【ダニール [I111] はレシエク支配下にあったブク川中流の城市を占領する：1217/1218 冬】

しばらくの後に, ダニール [I111] はガーリチのムスチスラフ [J51] のもとを訪問し, レシエクを非難して「かれはわしの父の地を占有している²³⁶⁾」と言った。かれ [ムスチスラフ [J51]] はこう告げた。「息子よ, これまでの親愛ゆえに²³⁷⁾, わしはかれ [レシエク] を討つべく決起することはできない。自分のための味方を探すが良い」。

229) 『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』ではこれ以降ダニール [I111] とその一族 (息子たち) の名が頻出することから, ダニールの参照記号を [I111:S] とし, 以降かれの息子たちは [S] の記号で参照することとする。

230) 「アンナ」(Анна) はムスチスラフ武運公 (Удалой, Удачный)[J51] とポロヴェツの首長コチャン (Котян) (上注 34 参照) の娘の間 [НПЛ: С. 62, 265] にできた娘の名と推定されている。

231) 「イラクリイ」(Иракльи, Ираклий)[S1] についてはこれ以降年代記に言及がないことから早世したと考えられる。

232) 「レフ」(Лев)[S2] は父ダニールの実質的な継承者で, その死後 1264 年からベレムィシェリ公となり, 1270 年代以降はガーリチとホルム (ヘウム) (Холм) の公座に就いている。まだ若年の 1245 年から 1261 年にかけて, 常に父ダニール公の遠征に参加していた。

233) ロマン (Роман)[S3] はスロニム, ルツク, ノヴォグルドク (Новогрудок)(1254 ~ 58 年) 公で, 1252 年には父ダニールがハンガリー王ベーラ四世との協定によって, かれをオーストリア大公フリードリヒ・バーベンベルグの姪ゲルトロートと結婚させた記事がある。

234) ムスチスラフ (Мистислав)[S4] については, 父親ダニールの死後 (1264 年) ルツクの公座に就いており, 1288 年からはヴォルィニの公でもあった。

235) シヴァルン (Шеванрно, Шварн)[S5] は生長してホルム (Холм) とリトアニア地方の公として分封され, 1263 年にはリトアニア大公ミンダウガスの娘と結婚して, ダニール一族とリトアニアとの同盟関係を強化した人物である。なお, かれの生年が 1236 ~ 40 年と推定されていることから [Домбровский 2015: С. 399], この個所のダニール [I111] の一族についての記事は, 1240 年以降に書かれて, ここに挿入されたと推定される。

236) レシエクが, ベレスチエを初めブク川上流域の諸城市 (ヴラジミル地方にとっての辺境地方) を占拠していることを指している。

237) この「親愛」(любовь) とは同盟関係という意味で, ムスチスラフ [J51] がレシエクと同盟したことによってガーリチの公座を獲得したことを指している (上注 226 を参照)。

ダニール [I111] は帰郷すると、兄弟〔ヴァシリコ [I112]〕とともに軍を進めて、ベレスチエ (Берестье)、ウグロヴェスク (Угровеск)、ヴェレシン (Верешин)、ストルブ (Столп)、コモフ (Комов) など辺境地域²³⁸⁾ 全土を占領した。

【レシェクは報復のためヴラジミル公のダニール [I111] 討伐の遠征を行い、ダニール軍は迎撃してヴェプシ川まで敵軍を追い払う：1218 年春】

レシェクはダニール [I111] に対して大いなる怒りを発した。春になると、ポーランド人たちは掠奪のための進軍を始め、ブグ川一帯²³⁹⁾ を掠奪した。

ダニール [I111] はこれを討つべく、ガヴリール・ドゥシロヴィチ²⁴⁰⁾ (Гаврил Душилович)、シメオン・オルエヴィチ²⁴¹⁾ (Семен Олуевич)、ヴァシリコ・ガヴリロヴィチ²⁴²⁾ (Василко Гаврилович) を派遣した。かれら〔軍司令官たちは〕戦いながら、スハヤ・ドログヴァ²⁴³⁾ (Сухая Дорогва) まで進軍し、拘束捕虜たちを捕獲した。そして、大いなる栄光とともにヴラジミルへと帰還した。

そのときクリム・フリステイニチ²⁴⁴⁾ (Клим Хрystиничъ) は殺害されたが、かれはかれ〔ダニール [I111]〕の全軍で唯一〔の戦死者〕だった。かれの十字架は今に至るもスハヤ・ドログヴァに立っている。

かれら〔ダニール [I111] の軍勢は〕多くのポーランド人を撃ち殺し、【733】ヴェプリー川²⁴⁵⁾ (Вепрь) までかれら〔ポーランド軍〕を追撃した。

238) 「ウグロヴェスク」「ヴェレシン」「ストルブ」「コモフ」の四つの城市は、レシェクの援助によりベルズ公アレクサンドル [I121] が占領したブク川中流域の城市として言及されている (上注 77 ~ 80 参照)。ヴラジミル=ヴォルィンスキイの公ダニール [I11] にとってこの地域は辺境地帯 (украина)、つまりポーランドとの境界に位置すると考えられていた。

239) 当時ダニール [I111] が公として支配していたヴラジミル付属都市は西ブグ川一帯に位置していた。

240) 「ガヴリール・ドゥシロヴィチ」(Гаврил Душилович) はガーリチの軍司令官 (воевода) で、6735(1227) 年の記事でも言及されている。

241) 「シメオン・オルエヴィチ」(Семен Олуевич) もガーリチの軍司令官で、6731(1223) 年の記事でも言及されている。

242) 「ヴァシリコ・ガヴリロヴィチ」(Василко Гаврилович) もガーリチの軍司令官で、1223 年のカリシチェの戦いの参加者であり、1231 年の城市ヤロスラフ防衛戦にも加わっている。

243) 「スハヤ・ドログヴァ」(Сухая Дорогва) は、ウクライナ語の драговина が沼地の意味を持つことから、「涸れ沼」を指すと推定されるが場所の特定は難しい。ヴェプシ川 (下注 245) 中・上流域の地名か。

244) 「クリム・フリステイニチ」(Клим Хрystиничъ) はダニール [I111] に仕えていた軍司令官と考えられる。

245) 「ヴェプリー川」(рѣка Вепрь) は、ヴィスワ川 (Wisła) 支流の現在のヴェプシ川 (Wieprz) のこと。その中流・上流域はポーランドとヴォルィニ地方との境界の役割を果たしていた。

【レシエクはムスチスラフ [J51] と決別して、ハンガリー王と同盟する。同盟軍はガーリチの地へ侵攻する：1219 年秋】

レシエクは、ダニール [I111] がムスチスラフ [J51] の助言によってベレスチエを略取した²⁴⁶⁾のではないかと考えた²⁴⁷⁾。[そこで]レシエクは[ハンガリー]王に使者を遣ってこう言った。「わしはガーリチの分け前を欲しくはない。それを、わしの娘婿 [カールマン] に与えよ」。

[ハンガリー]王は大軍を派遣した。レシエク[も軍隊を派遣した]²⁴⁸⁾。かれらはペレムィシェリに到来した²⁴⁹⁾。そのときヤロン²⁵⁰⁾(Ярон)はペレムィシェリの千人長だったが、かれら[敵軍]を前にして逃げ出した。

【ガーリチ公ムスチスラフ [J51] は親ハンガリー派貴族支配のゴロドクを占拠すべく軍司令官を派遣するが、派遣軍は城下の戦闘で敗北する】

ムスチスラフ [J51] は、すべてのルーシの諸公とチェルニゴフ [諸公] とともに [行動して]

246) 「ベレスチエを略取した」とは上注 238 のダニール [I111] によるベレスチエを含む辺境地域 (украина) の占領を指しており、さらには、これに対するレシエク軍の報復部隊への撃退とさらなるポーランド領 (ヴェプシ川) への侵攻 (上注 245) も考慮に入っているだろう。

247) 本年代記によれば、実際にはムスチスラフ武運公 [J51] は、それまでのレシエクとの同盟関係 (親愛) を理由にダニール [I111] との同盟を断ったのだが (上注 237)、ここでは以下のレシエクの対ガーリチ政策の方針転換 (ハンガリーとの同盟) を、かれ自身の誤解に基づくように記している。

248) ハンガリー王アンドラーシュ二世は、ガーリチを追われた息子のカールマン (10 歳ほど) を陣頭に立てて、ガーリチ奪還のための大軍を、ポーランドとの連合で派遣したのである。下注 260 を参照。

249) ペレムィシェリは、アンドラーシュ二世がレシエクから取りあげたことになっていたが (上注 224 参照)、この記事で、ムスチスラフ [J51] がガーリチの公座を獲得したときに、ガーリチ公領の一部として、ムスチスラフが支配権を握っていたことが分かる (次注 250 も参照)。

250) 「ヤロン」(Ярон) については、『ノヴゴロド第一年代記』 6724(1216) 年のノヴゴロド公ムスチスラフ [J51] のヴォルガ流域遠征について記事で、「ヤルン」(Ярун) の名でムスチスラフ配下の軍司令官として [НПЛ: С. 55, 255]、6732(1224) 年の対モンゴルのカルカ川の戦いではルーシ諸公軍の先遣隊長として [НПЛ: С. 63, 266] 言及されており、『ラヴレンチイ年代記 (アカデミー写本)』の並行個所にも同様の記述がある。かれは、ムスチスラフ側近の貴族・千人長で、この時には、ガーリチ地方 (公領) の対ハンガリーの最前線の重要都市であるペレムィシェリに、ムスチスラフ公の代官として派遣されていたのだろう。

いた²⁵¹⁾。かれ〔ムスチスラフ〕はドミトル²⁵²⁾(Дмитр), ミロスラフ²⁵³⁾(Мирослав), ミハルコ・グレーボヴィチ²⁵⁴⁾(Михалко Глебович)をゴロドク²⁵⁵⁾(Городок)の方面へ派遣して, かれら〔ハンガリー=ポーランドの同盟軍〕を迎撃させた。ゴロドクは〔ガーリチの管轄から〕離れていた。そこにはステイスラフ(Судислав)の配下の者たち²⁵⁶⁾がいたのである。

ドミトルが〔ゴロドクの〕城下で戦っていると, かれを討つべくハンガリー人とポーランド人が到来した。そこでドミトルは逃げ出した。その時, ヴァシル(Васил), 通称モズラ(Мозла)と称する聖歌隊員が城下で射撃された²⁵⁷⁾。ミハルコ・スクーラ²⁵⁸⁾(Михалко Скула)は, シチレツァ川²⁵⁹⁾(Щирьца)まで追いかけて殺され, かれの首は切断され, 三本の黄金の鎖が外され, カールマン²⁶⁰⁾のもとにかれの首が運ばれた。

251) このときムスチスラフ [J51] は, ガーリチにいたのではなく, 「ルーシ」すなわちキエフ公領の諸城市を公支配する諸公と, チェルニゴフ公領の諸公(いわゆる「オレーグ一族」)の支援をもとめて行動したのだろう。コトリヤールは, 援軍は得られなかったとして, ルーシとチェルニゴフ諸公と「会合」を行っていたと解釈している [Котляр 2005: С. 205]。その場合「会合」での援軍要請は失敗したことになる。

252) 「ドミトル」(Дмитр)は, 次のミロスラフと同じく, ダニール公 [I111] に勤務しているガーリチの千人長。また, 1238年にダニール [I111] の代官としてキエフに勤務していたことから, 軍記物語『パトゥによるキエフ破壊の物語』(1240年)の情報提供者はかれではないかと推定されている [БЛДР-5: С. 493]。

253) 「ミロスラフ」はもとダニールの「守り役」で, ダニールの側近貴族だった人物(上注 47 参照)。

254) 「ミハルコ・グレーボヴィチ」(Михалко Глебович)もドミトル, ミロスラフと同様のダニール [I111] に勤務する軍司令官と考えられる。

255) 「ゴロドク」(Городок)は現在のウクライナ, リヴィウ州のホロドク(Городок)に相当し, ガーリチからだ北西に 106km ほど離れている。

256) ステイスラフは親ハンガリー派の貴族の指導者で, 親レシェクのガーリチ公ムスチスラフ [J51] の管轄から離れて, ムスチスラフに敵対していた。上注 227 も参照。

257) この時代の дякъ は聖職者としての輔祭(диякон)を意味する場合と, 教会勤務者としての聖歌隊員(причетник)を指す場合があるが, ここでは後者と解釈した。

258) 「ミハルコ・スクーラ」(Михалко Скула)は, ダニール支持派のガーリチの貴族。グレーブ・ポトコヴィチ(上注 171)の息子で, ホルムの主教イオアン(下注 330 参照)の父にあたると思われる。[Perfeky1973, p. 133, n. 39]。かれはダニール [I111] の側近であり, ハンガリー陣営によって斬首されたのは見せしめ的な意味があったのだろう。

259) 「シチレツァ川」(Щирьца)は, ドニエストル川の支流で, 現在のリヴィウ州のシチェレク川(Щерек: Щирец, Щирок, Щирка)に相当し, その上流域はゴロドクから東へ 19km ほど離れている。

260) 上注 248 を参照。

【ムスチスラフ [J51] の軍はズブリエ川に布陣。ムスチスラフの依頼によりヴラジミル公ダニール [I111] は防衛のためガーリチに籠城。ベルズ公アレクサンドル [I121] は籠城を拒否】

ムスチスラフ [J51] はズブリエ川²⁶¹⁾ (Зубрьє) に布陣した。ドミトルはかれ〔ムスチスラフ〕のもとに急行した。ムスチスラフ [J51] はハンガリー人と戦うことができず、自分の娘婿ダニール [I111] とアレクサンドル [I121] に対して、二人ともガーリチ〔の城市〕に籠城するようにと頼んだ。ダニール [I111] とアレクサンドル [I121] はかれ〔ムスチスラフ〕にガーリチへ行くことを約束した。ダニール [I111] はガーリチに籠城したが、アレクサンドル [I121] はそうしようとしなかった²⁶²⁾。

【ロマンの公妃（ダニールの母）が受戒して修道女になる：1219 年頃】

その時 **【734】** ロマンの大いなる公妃は修道女の位階を受けた²⁶³⁾。

【ハンガリー＝ポーランド同盟軍がガーリチ城を攻撃すべく進軍し、攻撃に成功する：1219 年 10 月】

その後、戦闘のための部隊が〔ガーリチの〕城下に到来した。それはカールマンとポーランド人だった。クロヴァヴィ渡渉²⁶⁴⁾ (Крoвaвий брoд) で多くの戦闘が行われた。かれら〔カールマンとポーランド人〕の上に雪が降り、かれらは立っていることができず、ロゴジナ²⁶⁵⁾ (Рoгoжiнa) を越えて、ムスチスラフ [J51] を討つべく進軍した。そして、かれ〔ムスチスラフ〕を〔ガーリチの〕地から追い出した。

261) 「ズブリエ川」(Зубрьє) はドニエストル川支流の現在のズブラ川 (Зубра) に相当し、シチェレク川 (Щерек) (上注 259) からさらに東に 5km ほど行った地点にその上流域がある。

262) アレクサンドル [I121] はレシュクの圧力によって、ヴラジミルの公座をダニール [I111] に奪われた経緯があったので (上注 223)、ダニールと協力することを断ったのではないか。

263) この時、ダニール [I111] の母の公妃が受戒剃髪した直接の理由は不明だが、息子のダニールが成人年齢に達した (およそ 18 歳) ことから、もはや執政として活動する必要がなくなり、夫を失った公妃が受戒して修道女になる当時の慣習にしたがったと考えるのが妥当なところだろう。[Котляр 2005: С. 205] も参照。

264) 「クロヴァヴィ渡渉」(Крoвaвий брoд) はガーリチ近郊でドニエストル川を渡る渡渉地点の名称だが特定は難しい。なお、ウクライナ語訳の注では、ドニエストル右岸支流でガーリチの対岸に注ぐルクヴァ川 (Луква) の渡渉としている [Літопис руський, Покажчик]。

265) 「ロゴジナ」(Рoгoжiнa) も特定が難しいが、現在のリヴィウ州ジダーチウ区のロギズノ村 (Рoгізно) が、ゴロドクからガーリチへの途上に位置しており、これに相当すると考えるのが妥当性が高い。この場合、ゴロドクからだと東南方向に約 62km 進むことになる。

【ガーリチに籠城していたダニール [I111] はムスチスラフ [J51] の命令で城市を脱出。トルマチで背反したガーリチ貴族の襲撃を受け、ダニールは戦う】

ムスチスラフ [J51] はダニール [I111] に言った。「〔ガーリチの〕城市から出よ」。ダニール [I111] は、千人長のドミトル、グレーブ・ゼレメエヴィチ²⁶⁶⁾ (Глѣб Зеремѣвич), ミロスラフとともに〔ガーリチ城を〕出た²⁶⁷⁾。城市を出て、トルマチ²⁶⁸⁾ (Толмачь) の対岸にいたとき、信義に背いたヴワディスワフ・ヴィトヴィチ²⁶⁹⁾ (Витовичъ Володислав) がかれ〔ダニール〕に追い付き、かれ〔ダニール〕を襲撃して、かれを追い払い、かれから馬を取りあげた。

ダニールは若かった。〔それゆえ〕グレーブ・ゼレメエヴィチとセミオン・コドニンスキイ²⁷⁰⁾ (Семьон Кодыньинский) の家臣団たちが駆けつけたのを見て、かれらと合流して、〔戦力を〕固めた。他の者たちは一目散に逃げてしまった。

その日は深夜になるまで戦闘が続いた。その夜、ダニール [I111] とグレーブ・ゼレメエヴィチは引き返すと、ヤネツ²⁷¹⁾ (Яныц) を捕虜に獲った。〔ダニールは〕若かったが自らの剛毅を示したのである。二人は夜通し戦った。しかし、翌朝にグレーブ・ヴァシレヴィチ²⁷²⁾ (Глѣб Василевичъ) がかれ〔ダニール〕に迫った。ダニール [I111] はかれ〔グレーブ〕に向かって軍を進め、1ポプリシチェ²⁷³⁾ 以上かれを追撃した。かれ〔グレーブ〕は馬の脚が速かったおかげで逃げ切れた。

ダニール [I111] が戻ってきて、ひとりかれら〔敵軍〕の中を馬で進んだが、かれら〔敵軍〕は敢えてかれを襲撃しようとはしなかった。その後、かれ〔ダニール〕のところに **[735]** グレーブ・ステイロヴィチ (Судиловичъ), ガヴリーロ・イヴォロヴィチ (Иворович), ペレネシ

266) 「グレーブ・ゼレメエヴィチ」 (Глѣб Зеремѣвич) は、ドミトルと同じくダニール [I111] に勤務する軍司令官。上注 200 を参照。

267) この時点で、ガーリチはハンガリー＝ポーランドの連合軍によって占領されたことになる。

268) 「トルマチ」 (Толмачь) は現在のイワノフランキフスク州のトルマチ (Тлумач) に相当し、ドニエストル川右岸に位置し、ガーリチから川を下って南南東に 35km ほど進んだところにある。「対岸」とはドニエストル川の対岸 (左岸) ということ。

269) 「ヴワディスワフ・ヴィトヴィチ」 (Витовичъ Володислав) は、上注 152 で言及されているダニール支持派の「ガーリチのヴワディスワフ」と同一人物ではないか。この時点でダニールを見限り、転向したと考えられる。

270) 「セミオン・コドニンスキイ」 (Семьон Кодыньинский) もグレーブ (上注 266) と同じくダニール [I111] に勤務する軍司令官だろう。

271) 「ヤネツ」 (Яныц) は人名ヤン (Ян) の卑称形で、ここでは、ハンガリー派のガーリチ貴族の人名ではないか。

272) 「グレーブ・ヴァシレヴィチ」 (Глѣб Василевичъ) はハンガリー派のガーリチ貴族の軍司令官だろう。

273) 「ポプリシチェ」 (поприще) は当時の距離単位で、この個所の場合、およそ 770m に相当すると考えられる [Срезневский, Материалы: Стб. 1204]。

コ (Перенъжько) がやって来た²⁷⁴⁾。

【ダニール [1111] はドニエストル川をさらに下り、ドニエストル川右岸を放浪する：1219 年 10 月 25 日】

かれら〔ダニール一行〕はそこからオヌート²⁷⁵⁾ (Онуг) へ来て、それから原野を進軍した²⁷⁶⁾。かれらはひどい飢えに苦しんだ。聖ドミトリオスの日²⁷⁷⁾ の前日、〔敵の〕輜重の荷駄がブラフ²⁷⁸⁾ (Плав) へ向かって進んでいた。かれらは輜重を奪い取り、満腹になるまで食を摂った。そして、かれらに食を与えてくれたことに対して神と聖ドミトリオスを讃美した。

そこから、クチェレミン²⁷⁹⁾ (Кучелемин) を下流へと進んだ。ドニエストル川を渡河することができると思ったのである。そして、神の慈悲によってオレシエ²⁸⁰⁾ (Олешье) からやってきた舟があった。かれらはその〔舟〕に乗って、ドニエストル川〔の対岸〕までやって来ると、魚と酒を腹一杯食した。

274) このグレーブ、ガヴリーロ、ペレネシコは、ダニール支持派のガーリチ貴族。

275) 「オヌート」(Онуг) は、ドニエストル川右岸オヌート川(Онуг) 河口にある現在も同名の村(チェルノフツィ州、ザスタノフスキ区)で、ガーリチからだどドニエストル川を北東へ150kmほど下った右岸に位置している。ここは商港があったと考えられていた。コトリヤールはこの「オヌート」はガーリチ公領と南方の原野とを隔てる境界に建てられた城砦と考えている [Котляр 2005: С. 205]。

276) 船で行ったのではなく、ドニエストル川右岸を河川にそって下流に向かって歩いたということ。

277) テッサロニキの聖ドミトリオスの祝祭日は10月26日に相当する。

278) 「ブラフ」(Плав) の位置についても諸説あるが、ウクライナ語訳ではオヌート(上注275)から東へ5kmほど離れた、ドニエストル右岸のペレビキウツィ村(Перебиківці) 近くの遺構が推定されている。[Літопис руський, Показчик]

279) 「クチェレミン」(Кучелемин) についても特定は難しいが、想定されたブラフ(上注278)から直線距離で85kmほど東に離れたドニエストル川右岸のネポロトヴェ(Непоротове), ガリツチャ(Галиця), ロマチンツィ(Ломачинці)の遺構が候補に挙がっている。[Літопис руський, Показчик]。この地名は、『キエフ年代記』6667(1159)年の記事に、イワン・ベルラドニク [A1221] がドニエストル下流域から川を遡行してガーリチ遠征を敢行したときの上陸地として記されている [ПСРЛ Т. 2, Стб. 487]

280) 「オレシエ」(Олешье) はドニエプル川河口の州に建てられた城砦で、現在のヘルソン(Херсон)市から東へ8kmほどのオレシキ(Олешки)村にその跡地がある。ドニエプル川、ドニエストル川、ドナウ川の通商の要所。ここから、ドニエストル川を遡行してきた商船に出遭ったのだろう。

なお、オレシエの位置についてはまだ議論の余地があり、現在のヘルソン州オレシキに同定する説と並んで、ヘルソンの12キロメートル下流の、ドニエプル川河口のポリショエ・ポチョムキンスコエ島の約4ヘクタールの都市跡がオレシエの遺構であるという仮説も出されている。[Котляр 2005: С. 206]

【ダニールはムスチスラフ [J51] と会合してからヴラジミルへ戻る。ムスチスラフはポロヴェツ人のもとに援軍を要請に行く】

そこからダニール [I111] はムスチスラフ [J51] のもとへ行った²⁸¹⁾。ムスチスラフ [J51] はダニール [I111] に対して、かれを大いに称賛して、大いなる贈物をかれに与え、自分のあし毛の健脚の馬を [与えた]。そしてかれにこう言った。「公よ、ヴラジミルへ行かれよ。わしは、ポロヴェツ人のもとに [援軍を求めに] 行くつもりだ²⁸²⁾。われらは自らの辱めを晴らそうではないか」。ダニール [I111] はヴラジミルへと向かった。

6722 [1214] 年

静穏だった²⁸³⁾。

6723 [1215] 年

【リトアニアの諸公が、ロマン [I11] 一族と和を結ぶためにヴラジミルへ使節団を派遣する：1219/1220 年】

{そのとき} 神の命令によってリトアニアの諸公がロマン [I11] の大いなる公妃、ダニール [I111]、ヴァシリコ [I112] へ使者を派遣した。和平を提案したのである。

そのリトアニア諸公の名前は次の通りである。最年長の〔部族の〕ジヴィンブド (Живиньбудь)、ダヴィアト (Давьять)、ドヴスプルンク (Довьспрункь)、その兄弟のミンダウガス (Мидогь)、兄弟のダヴィヤロフ・ヴィリキイル (Довьяловь Виликаиль)²⁸⁴⁾。

またジェマイティア²⁸⁵⁾ (жемотьскый) の諸公はエルデイヴィル (Ерьдивиль) とヴィキント (Выкынтъ)。

281) この、ガーリチを明け渡したムスチスラフ [J51] がどこに向かったかについては述べられていないが、ドネストル川中流域左岸・南ブグ川上流域に退却したとの説がある [Perfecky1973, p. 133, n. 40]。あるいはムスチスラフの当時の拠点都市と考えられるトルチェスク (下注 300) とその周辺地だった可能性もある [Котляр 2005: С. 207]。いずれにせよ、そこから東へ行けば、かれの岳父コチャンが支配するポロヴェツの地 (下注 282) は近かった。

282) ムスチスラフ [J51] は、ドニエプル流域のポロヴェツ人の族長コチャンの娘を妻としていたことから (上注 34 参照)、岳父コチャンの支援を求めに、ポロヴェツ人支配地域のドニエプル中流域に向かったと考えられる。

283) この記事と年代はイパーチイ写本だけの読みで、フレーブニコフ系写本にはない。年紀に空白が生じたので、後代に挿入された可能性が高い。

284) この「最年長」(старьшей)の部族とは、本来のリトアニア、すなわちヴォルィニ公領と接するアウクシタイティア (Аукштайттия) の部族をさしている。

285) 「ジェマイティア」(жемотьскый) はアウクシタイティアと西側に接する地域の部族を指している。

ルシンコフ一族²⁸⁶⁾ (Рушьковичи) は、キンティブート (Кинтибуьт), ヴォニブート (Вонибуьт), ブートヴォイト (Бутовить), 【736】 ヴィジェイク (Вижѣикъ) とその息子ヴィシリイ (Вишлий), キテニイ (Китений), プリコソヴァ (Пликосова) である。

ブレヴィチー族 (Булевичи) からはヴィシエムート (Вишимут) だが、ミンダウガスがかれを殺して、かれの妻を略取し、かれの兄弟のエディヴィル (Едивил) とスプルデイク (Спрудѣик) を打ちのめしてしまった。

デイヤヴォルト (Дяволт) の諸公では、ユデキ (Юдьки), プーケイク (Пукѣикъ), ビクシ (Бикши), リキイク (Ликийъ) である。

〔以上のリトアニア諸公〕 全員は、ダニール公 [I111], ヴァシリコ公 [I112] と和を結び、平和がかれらの地に満ちた。

【ダニール [I111] はリトアニア諸公の援助を得てポーランドとの境界地方を掠奪する: 1220 年】

ポーランド人は悪行を止めようとしなかった〔ので〕、かれ〔ダニール [I111]〕 はかれら〔ポーランド人〕 を討つべくリトアニア人を引き連れ、ポーランド人を掠奪した²⁸⁷⁾。そして、かれら〔ポーランド人〕 の多くを殺し尽くした。

6724 [1216] 年

何も起こらなかった²⁸⁸⁾。

6725 [1217] 年

【ハンガリー軍司令官フィリャによるヴラジミル地方への遠征。傲慢なフィリャについて: 1220/1221 年冬】

フィリャ²⁸⁹⁾ (Филя) がやって来た。かつて非常に傲慢で、多くのハンガリー人とともに、大地を略取し、海洋を壊滅させようと望んだ人間である。かれは言った。「一つの石があれば、多くの壺を割ることができる」。また別の次のような高慢な言葉を言ったこともあった。「一本

286) 「ルシンコフ一族」(Рушьковичи) の諸公は、本年代記でもこれ以降で言及されている。

287) 西ブグ川中流域のポーランド支配下にあった城市や地域を掠奪したということ。

288) この記事と年代はイパーチイ写本だけの読みで、フレーブニコフ系写本にはない。やはり後代の挿入の可能性が高い(上注 283)。

289) 「フィリャ」(Филя) は、ラテン語史料で Fila, Phila, Phyla, Filnya などと記され、アンドラーシュ二世宮廷の宮中伯 (nádor, palatinus regni Hungarie) でハンガリー軍の軍司令官で地方長官(バン) だった人物 [Волощук 2011: С. 192-193]。1220/21 年冬のガーリチ遠征を指揮した。

の利剣と一頭の速馬で、多くのルーシ人〔を平らげよう〕。神はこの〔傲慢さに〕耐えかねて、別の時にダニール・ロマノヴィチ [I111] の手によって古来より傲慢²⁹⁰⁾ なフィリヤを殺させたのである²⁹¹⁾。

【ベルズ公アレクサンドル [I121] は、ムスチスラフ＝ダニール陣営から離反してレシエクと同盟する：1221 年春】

アレクサンドル [I121] は、ダニール [I111] およびヴァシリコ [I112] から離反して、レシエクのもとに寝返った²⁹²⁾。かれら〔ダニールとヴァシリコ〕のもとには神の助けの他は、助けてくれる者はいなかった。

【ムスチスラフ [J51] がポロヴェツ人の援軍を連れてヴラジミルへやって来る：1221 年】

ようやくムスチスラフ [J51] がポロヴェツ人を連れてやって来た。

【フィリヤ率いるハンガリー＝ポーランド連合軍は、ムスチスラフ＝ポロヴェツ連合軍を迎撃するために、ガーリチを出陣する：1221 年】

フィリヤは、多数のハンガリー人とポーランド人を連れてガーリチを出た。かれはガーリチの貴族たち、自分の岳父であるステイスラフ²⁹³⁾ (Судислав) およびラゾリ²⁹⁴⁾ (Лазорь) と他の〔貴族たち〕を率いていた。それ以外の〔ガーリチ貴族たちは〕、逃げ去ってしまった。かれ〔フィリヤ〕が非常に傲慢だったからである。【737】

290) 「古来より傲慢」(древле прегордый) の形容語は、ヨセフス・フラヴィウス『ユダヤ戦記』のスラブ語訳第 6 書 9 章の「ギスカラ出身の陰謀家でレヴィの子でヨアネス」について用いられている表現。[Мещерский 1958: С. 99-100][История Иудейской войны 2004: С. 368] を参照。

291) この「別の時」の「フィリヤの死」とは、1245 年 8 月、サン川左岸ヤロスラフ城下で戦いで、ダニール [I111] とポロヴェツ人の連合軍が、ハンガリー王ベーラ四世の支援を受けたロスチスラフ・ミハイロヴィチ [G411] と戦い、ダニールが決定的な勝利を取った時のことで、その際、軍司令官として参戦したフィリヤはダニール軍に捕らえられ、処刑されたことを指している。

292) このアレクサンドル [I121] の離反については、下注 316 も参照。

293) 親ハンガリー派のガーリチ貴族の指導者ステイスラフについては上注 256 を参照。かれが「フィリヤの岳父」というのは、ハンガリー史料によっても確認されている。ヴォロシチュークはフィリヤがこのガーリチ貴族の娘と結婚したのは、ガーリチに侵攻してすぐの 1221 年頃と推定している。[Волощук 2011: С. 190, 195]

294) 「ラゾリ」(Лазорь) はラザリ・ドマジリチ (Лазарь Домажирич) として本年代記にも言及される。かれはダニール [I111] に対抗していたガーリチの有力貴族ドマジル (Домажир) 一族の当主である。

6726 [1218] 年

静穏だった²⁹⁵⁾。

6727 [1219] 年

【レシェクは、ダニールのムスチスラフとの同盟を妨害するためウラジミル国境の城市シチェカレフを攻める：1221 年】

{この時} レシェクがダニール [I111] を討つべくシチェカレフ²⁹⁶⁾ (Щекарев) に到来した。かれ [ダニール] が自分の岳父ムスチスラフ [J51] の援軍に行くのを妨げようとしたのである。

コンラートは、レシェクとダニール [I111] を和解させようとやって来たが、レシェクに策略があることを知ると、ダニール [I111] 公に対して、レシェクのもとに [和議のために] 行かないようにと命じた²⁹⁷⁾。

【フィリヤは出陣の前にガーリチ城市の防備を強化する：1221 年 3 月】

フィリヤは戦闘準備を整えていた。戦闘においては誰もかれに対抗できないと考えていたからである。[フィリヤは] カールマンをガーリチに残し、われらが女宰至浄の聖母の教会に城砦を築いた²⁹⁸⁾。[結局] 聖母はご自身の聖堂が汚されたことに耐えられず、教会をムスチスラフ [J51] に引き渡したのだった²⁹⁹⁾。

295) この年記と記事はイパーチイ写本だけの読みで、フレーブニコフ系写本にはない。前後の記事は連続的な事件についてのもので、この年記・記事は無意味であることから、後代に挿入されたものだろう (本稿の解説参照)。

296) 「シチェカレフ」(Щекарев) は、現在のポーランドのヘウム県の都市クラスニスタウ (Krasnystaw) に相当する。ヴェプシ川中流域左岸のヴォルィニ地方とポーランドとの境界に位置しており、最前線にダニール [I111] が建てた城砦だったと推定される。ウラジミルからだと西北西に 82km ほど離れている [Покажичик][Котляр 2005: С. 208]。

297) 下注 317 で「リトアニア人のポーランド掠奪の後」にダニール [I111] とレシェクは、それぞれが使者を遣って和を結んでいる。記事の順番の時系列から見ると混乱があるが、これは本記事の「和解」と同じことを指しているのではないか (Грушевський 2005: С. 341)]。この和議にレシェクの兄弟のマゾフシェ公コンラート (上注 59) は、自らの利害から反対したのである。

298) ガーリチはルカヴァ川 (Лукава) 河口右岸 (ドニエストル川河岸) に公の館がある内城があり、そこから 4.7km ほどルカヴァ川を遡った河岸の現在のクリロス村 (Крилос) に、防壁がほどこされた城市があった。フィリヤは年少 (13 歳ほど) のカールマンの籠城のために、「聖母の教会」すなわち城市内の聖母就寝教会 (Успенский собор) (上注 149 参照) の周囲を城柵で固めたということ [Літопис руський, 1989: С. 377]。

299) ムスチスラフ [J51] によるガーリチ奪回については下注 305 の個所を指している。

【ガーリチ防衛におけるハンガリー勢の劣勢：1221年3月】

そのとき、カールマンに付き添っていたのは³⁰⁰⁾、イヴァン・レキン(Иван Лекин)、ドミトル³⁰¹⁾(Дмитр)、ボート³⁰²⁾(Бот)だった。

ポロヴェツ人が戦況を偵察するためにやって来たので、ハンガリー人とポーランド人はかれらを追いかけ始めた。一人のポロヴェツ人が振り向いて、ウーズ(Уз)に向けて射撃して眼に当たった。かれ〔ウーズ〕は落馬し、かれの遺体は引き取られ、弔いの歌が唱われた³⁰³⁾。

【ムスチスラフ [J51] はガーリチ近郊でフィリヤの軍勢に勝利する：1221年3月24日】

翌日、聖なる聖母の祭³⁰⁴⁾の前日の早朝にムスチスラフ [J51] が傲慢なフィリヤ、ハンガリー人およびポーランド人を討つべく〔ガーリチに〕到来した。かれらの間では激しい戦いが繰り広げられ、ムスチスラフ [J51] が勝利した³⁰⁵⁾。

【フィリヤの捕獲と逃走のエピソード】

ハンガリー人とポーランド人が敗走し、その多くは撃ち殺された。傲慢なフィリヤは従者³⁰⁶⁾のドブリニン(Добрынин)の手で捕まえられた。その後、かれ〔フィリヤ〕の身柄は嘘

300) ガーリチ城市内(現クイロス村)に残されたカールマンとその側近の名が以下に記されている。本年代記では経緯は記されていないが、1221年のムスチスラフ [J51] の第二次のガーリチ奪回によって、カールマンは捕虜となり、出典は不明だが、ムスチスラフの拠点城市だったトルチェスク(Торческ)に送られて虜囚生活を送った。アンドラーシュ二世はカールマン解放のため、ムスチスラフの娘と、自分の息子、王子アンドラーシュ(カールマンの弟)との政略結婚を行った(1221年)。この講和により、カールマンはハンガリーに帰国した。[Щавелева 2004]

301) 「イヴァン・レキン」(Иван Лекин)と「ドミトル」(Дмитр)はともにハンガリー人の軍司令官(貴族)と推定される。

302) 「ボート」(Бот)はフレーブニコフ系写本の読みを採用した。これもハンガリー人貴族の名だろう。

303) このハンガリーの軍司令官とハンガリー人騎兵ウズの戦死(ハンガリー騎兵の良馬を意味する *фаря* という言葉が使われている)についてのエピソードは、ハンガリー側の資料が年代記編集の際に挿入されたものだろう。

304) この「聖母の祭の前日」(на кануть Святой Богородици)の「聖母の祭」とは、3月25日の受胎告知祭(Благовещение Богородицы)と考えられる。その年代については、次注の『ラヴレンチイ年代記』の年記を採用するなら、1221年になる。

305) ガーリチ遠征のムスチスラフ [J51] =ポロヴェツ人連合軍と、ガーリチ城を出陣したフィリヤ率いるハンガリー=ポーランド連合軍が、ガーリチの近郊で行った戦闘。『ラヴレンチイ年代記』6729(1221)年の記事に「ムスチスラフ・ムスチスラヴィチはハンガリー人と戦い、これに勝利した。かれらの多くを撃ち殺し、王子〔カールマン〕を捕虜に獲った」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 445]とあり、この部分に対応していると考えられる。ただし、本年代記にはカールマンの捕獲についての言及はない。

306) 「下級従士」の原語は *поробок* で、公の身の回りの世話をする年少の従者を指している。ガーリチの貴族もしくはムスチスラフ [J51] の従者だったのだろう。ここではガーリチで最高位の支配者だったフィリヤが身分の低い従者に捕らえられたという対比が強調されている。

つきのジロスラフ³⁰⁷⁾ (Жирослав) の手で秘かに救い出された。そのことで〔ジロスラフは〕非難され、自らの父の地を没収されることになった。【738】

【ムスチスラフ [J51] のガーリチ入城。ムスチスラフの〈第二次〉ガーリチ支配:1221 年 3 月末】

ムスチスラフ [J51] は〔戦闘に〕勝利すると、ガーリチへ進軍した。城門のところでは戦闘が起こった。〔籠城した城内の者たちは〕教会の屋根に登ったり、他の者たちは縄を身に纏って〔登ろうとして〕いた。かれら〔ハンガリー騎兵〕の馬は捕獲された。教会に城砦が築かれたからである。〔ハンガリー人の中には〕射撃をする者、住民に向かって石礮を投げる者がいた。渴して弱る者がいた。水がなかったのである。

ムスチスラフ [J51] が到来すると、かれらは降伏して、教会から連れられてきた³⁰⁸⁾。

【ダニール [I111] は少数の手勢を連れてガーリチへと向かう】

ダニール [I111] は少数の従士たち、および千人長デミヤン³⁰⁹⁾ (Демьян) とともに〔ガーリチへ〕向かっていたが、その〔ムスチスラフの入城の〕ときには、かれ〔ダニール〕はまだ到着していなかった。

【ダニール [I111] はガーリチに到着する。ルーシの地の異族からの解放】

その後、ダニール [I111] はムスチスラフ [J51] のもと〔ガーリチ〕にやって来た。大いなる喜びがあった。神はかれらを異族から救ったのである。全てのポーランド人、ハンガリー人は討ち殺され、他の者は捕獲されたり、逃げて土地をさまよったり、溺れたりした。他の者は、平民たち³¹⁰⁾ の手で殺されて、逃げのびた者は誰もいなかった。このようにして、ルーシの地に対して神の慈悲が示されたのである³¹¹⁾。

307) 「嘘つきのジロスラフ」 (лживый Жирослав) はガーリチ貴族だが、本年代記 6734(1226) 年の記事でも言及されている (下注 385 参照)。

308) 「教会の屋根に登ったり〜」以下ここまでの、籠城側の戦いの描写は、攻城戦を描いた常套的表現の先行文献からの借用からなっており、事実に基づくというより、文学的描写と考えるべきだろう。これと同様の表現は、本年代記の 6763(1255) 年の項にも認めることができる。例えば「渴して弱る者がいた」 (изнемогаху жажею водной) の語句などは、『原初年代記』 6496(988) 年のウラジーミル聖公 [08] のケルソネソス攻城戦の描写に使われている [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 109]。この部分は全体としては、ヨセフス・フラヴィウス『ユダヤ戦記』のスラブ語訳からの借用が認められる [БЛДР-5: С. 494]。

309) 「デミヤン」については上注 127 を参照。

310) 「平民たち」 (смерды) とは、公にとっての自領の定住農耕民で、貢税や兵力挑発の対象となっていた。

311) この、異族を追放してムスチスラフ [J51] とダニール [I111] がガーリチを回復したことを、「ルーシの地」に対する神の慈悲としていることについては、上注 4 を参照。

【ムスチスラフ [J51] はハンガリー派貴族スディスラフを赦免する：1221 年】

その後、ムスチスラフ [J51] のもとにスディスラフ³¹²⁾ が引き立てられてきた。かれ〔ムスチスラフ〕はかれ〔スディスラフ〕に対して悪意を持たず、かれに慈悲を示した³¹³⁾。かれ〔スディスラフ〕はかれ〔ムスチスラフ〕の両足を抱くと、かれ〔ムスチスラフ〕の僕（しもべ）として仕えることを約束した。ムスチスラフ [J51] は、かれ〔スディスラフ〕の言葉を信じて、大いなる名誉を示して、ズヴェニゴロド³¹⁴⁾ (Звенигород) の城市をかれに与えた。

6728 [1220] 年

何も起こらなかった³¹⁵⁾。

6729 [1221] 年

【ベルズ公アレクサンドル [I121] はレシェク、カールマン、フィリヤ等と和を結ぶ：1222 年】

アレクサンドル [I121] は〔ロマン [I11] の二人の息子たちから〕**【739】** 離反していたが³¹⁶⁾、かれはレシェク、カールマン、傲慢なフィリヤと和を結んで、ロマン [I11] の二人の息子たち〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112]〕に対して悪しき意図を止めなかった。

【レシェクはダニール、ヴァシリコ等と和を結ぶ：1222 年頃】

ムスチスラフ [J5] が勝利し、リトアニア人がポーランド人に対して掠奪した³¹⁷⁾ 後に、レシェクは、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] と和を結んだ。それは、デルジスラフ・アブラモヴィチ (Держислав Абрамович) とフロリアン・ヴォツェホヴィチ (Творьян Втихович)³¹⁸⁾ を介してだった。ロマン [I11] の二人の息子たち〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112]〕は、千人長デミヤ

312) 親ハンガリー派の貴族スディスラフはカールマン支配のガーリチにあって、娘をフィリヤに嫁がせ、配下の者を周辺城市に派遣するなど、実質的にガーリチ地方の行政を掌握していた（上注 256, 293 参照）。

313) このムスチスラフ [J51] のスディスラフに対する「慈悲」は、ムスチスラフがガーリチ統治のための基盤を持っていない弱みを如実に示している。

314) 「ズヴェニゴロド」(Звенигород) はガーリチ地方の有力な付属城市（上注 40 参照）。

315) この記事と年代はイパーチイ写本だけの読みで、フレーブニコフ系写本にはない。やはり後代の挿入の可能性が高い（上注 283）。

316) このアレクサンドル [I121] の離反については、上注 292 を参照。

317) このリトアニア人のポーランド支配下の領地の掠奪については上注 287 を参照。

318) 「デルジスラフ・アブラモヴィチ」(Держислав Абрамович)、「フロリアン・ヴォイツェホヴィチ」(Творьян Втихович; Флориан Войцехович) は、レシェク配下のポーランド人軍司令官（貴族）。フロリアンについては、本年代記の 6757(1249) 年の記事でも言及されている。

ンを介して和を結んだ。こうして、〔ロマンの息子たちは〕レシエクをアレクサンドル [I121] から離反させたのである。

【ダニールとヴァシリコは、アレクサンドル [I121] に対してベルズの地を徹底的に掠奪する：1222 ~ 1223 年】

土曜日の夜³¹⁹⁾、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] によって、ベルズ (Белз) の周辺地とチェルヴェン (Червен)³²⁰⁾ の周辺地が荒らされ、すべての〔アレクサンドル [I121] の支配〕地が掠奪された³²¹⁾。貴族は貴族から奪い、平民は平民から奪い、町は町から奪い、こうして掠奪されなかったものはなにもなかった³²²⁾。これについては書物〔聖書〕の中で「その石一つでも崩されずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう³²³⁾」と書かれている通りである。

ベルズ人たちは、この〔夜の〕ことを悪しき夜と呼んでいる。なぜなら、この夜はかれらに対して悪しき遊びをなしたのであり³²⁴⁾、夜が明ける前に掠奪し尽くされたからである。

ムスチスラフ [J51] は「兄弟のアレクサンドル [I121] を憐れめ」と〔ダニール [I111] に〕言った³²⁵⁾。そこで、ダニール [I111] は、ベルズを去って、ヴラジミルへと帰還した。

319) 「土曜の夜」前後に文脈がないので、いつのことか特定できない。資料を断片的に挿入したことによるか。

320) このときベルズはアレクサンドル [I121] が、チェルヴェンはその兄弟のフセヴォロド [I122] (上注 132) が公支配していた。

321) 先の記事にあるダニール [I111] = ヴァシリコ [I112] 陣営とレシエクの協定により、アレクサンドル [I121] はレシエクの支援を期待できなくなったことから、ダニール = ヴァシリコはヴォルィニ地方を支配するために、ベルズ、チェルヴェンにたちまち攻撃を仕掛けたのである。

322) この修辭的な表現は、おそらく旧約『エズラ記 (ラテン語)』(もしくは『第四エズラ書』) 13:21 の「町は町に、地方は地方に、民は民に、国は国に対して、互いに戦いを企てる」(и иные инымъ помышляють възбранити, град града и мѣсто мѣста. и языцы на языцѣхъ и црство на црство) の部分を踏まえたものだろう。

323) 『マタイによる福音書』 24:2 からの引用。

324) この「夜」という自然現象を主語として「遊びをなす」と言う修辭的な用法は、『ヨハネス・マララス年代記』スラブ語訳、第 17 書の「川」を主語とした部分、例えば「スキルト川〔ギリシア語では「跳びはねる」の意〕は住民に対して悪しき遊びをなした」(Скиртъ рѣка съиграеть злы игру и граждономъ) などからの表現を借りたと考えられる (Истрин 1994: С. 351)[Мещерский 1978: С. 84] を参照) (下注 514 も参照)。

325) この、ダニール [I111] とアレクサンドル [I121] の間の紛争において、ムスチスラフ [J51] がアレクサンドル側に立ち、ベルズの支配をアレクサンドルに許したことがしこりとなり、後の、ムスチスラフとダニールの間の確執につながっていると考えられる。

6730〔1222〕年

何も起こらなかった³²⁶⁾。

6731〔1223〕年

【ヴラジミル地方の主教区の創設とその主教たち】

〔この年〕 ロマン [I11] の二人の息子、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] のときにヴラジミル〔地方の〕の主教区が創設された。聖山出身の高位聖職者である福なる【740】尊師ヨアサフ³²⁷⁾ (Асаф) が〔主教座に〕いたからである。その後、聖山出身のヴァシーレイ (Василѣи) が〔主教座に〕いた。その後、スタニコ (Станило) と通称されたニキーフォル (Микифор) が〔主教座に〕いた。かれは以前にヴァシリコ [I112] に仕えていたのである。その後、温順なる尊師、謙抑のヴラジミル主教コジマ³²⁸⁾ (Кузма) が〔主教座に〕いた。

【ダニールは城市ホルムを創建する】

神の御心によってダニール [I111] はホルム³²⁹⁾ (Холм) という名の城市を創建した。その創建について、われらは別の場所で話すことにしよう。

【ヨアサフに代わってイオアンが主教になる。主教座がホルムへと遷移する】

イオアン (Иван) が、神の御心によって選ばれ、ダニール公 [I111] によって主教に叙任され

326) この記事と年代はイパーチイ写本だけの読みで、フレーブニコフ系写本にはない。やはり後代の挿入の可能性が高い (上注 283)。

327) 初代ヴラジミル主教ヨアサフは、聖山 (Святая гора) すなわちアトス山の出身者 (ギリシア人もしくは聖山で修行した) と解釈できる。ただし、ヴラジミル近郊の「聖山修道院」(Святогорский монастырь) の出身者とする説もある [Perfecky1973: p. 134. n. 44]。かれは、ブク川中流域のウグロフスク (Угровск) の主教だった (下注 332)。この「福なる尊師」(блаженный, преподобный) の尊称は、この記事の記者キリル (下注 328) のヨアサフについての評価の反映だろう [БЛДР-5: С. 494]。なお、『ノヴゴロド第一年代記』6737(1229)年の記事には、空位だったノヴゴロド大主教の三人の候補者の一人として「ヴォルィニのヴラジミルの主教ヨアサフ」(Осаф, Иосиф) の名が挙がっている [НПЛ: С. 68, 275]。

328) 「コジマ」(Кузма, Косма) については、1156年に主教に叙任され、1167年に死去したことが史料に記されている。なお、以上のヴラジミル地方の主教座についての記録は、本年代記の初期の編者と推定される、主教キリル (Кирилл) の手になったものではないか [БЛДР-5: С. 494]。

329) 「ホルム」(Холм) は現在のポーランドの都市ヘウム (Chełm) に相当し、ヴラジミルからだ北西に 67km ほど離れている。この城市の創建は 1235 年頃と考えられ、ガーリチ地方がモンゴル勢に破壊されて以後 1241 年～1272 年の期間は、北方に位置し破壊をまぬかれたホルムにダニールが公座を移して、政治の中心になっていた。

た³³⁰⁾。かれはヴラジミルの大いなる聖なる聖母教会³³¹⁾の聖歌隊の出身だった。なぜなら、その前の主教だったウグロフスク (Вугровський) のヨアサフ³³²⁾ (Асаф) が勝手に府主教の座に就いてしまい、そのために自分の〔主教〕座から廃されたからである³³³⁾。主教座はホルムに移された³³⁴⁾。

6732³³⁵⁾ [1224] 年

【モンゴル=タタール軍の来襲。ポロヴェツ人が来襲について最初の報をもたらす：1223 年 2 月～3 月】

{その年} タタール人と呼ばれる、前代未聞の軍団、神を恐れぬモアブ人³³⁶⁾ (моавитяне) が到来した。かれらはポロヴェツの地へやって来た。ポロヴェツ人は対陣した。ユーリイ・コンチャコヴィチ³³⁷⁾ (Юрьгий Кончакович), かれは誰よりも偉大なポロヴェツ人〔指導者〕だったが、かれら〔タタール人〕に対峙することができず、敗走した。ドニエプル川にたどり着くまでに、多くの者が撃ち殺された。タタール人は引き返すと、自分たちの移動幕舎の〔宿营地〕へと向

330) イオアンがホルムの主教に叙任されたのは 1260 年のことであることが以下の記事によってわかる。

331) これは、ヴラジミル=ヴォルィンスキイの城市の内城から 1km ほど北にあった聖母就寝首座教会 (Успенская соборная церковь) を指している。

332) 「ヨアサフ」については上注 327 を参照。

333) ヴラジミル主教区におけるヨアサフの主教廃位とイオアンの就位について、フルシェフスキイは 1222 年～1223 年のことと推定している [Грушевський 2005: С. 342]。

334) 主教座がホルムに移されたのは、ガーリチ地方がモンゴル=タタール勢によって破壊された後の、1241 年以降と推定されている。なお、この段落の記事は、主教キリルから年代記編纂を受け継いだ、ホルム主教イオアンの手になると推定される [БЛДР-5: С. 494]。

335) イパーチイ写本では、この年紀の横の欄外に「カルカ川の戦い」(Калецькое побоище) という後代の書き込みがある。実際にこの 6732(1224) 年の記事はすべてモンゴル=タタールの最初のルーシへの来襲についての記述である。

336) 「モアブ人」(моавитяне) は旧約聖書ロト (Лот) の息子モアブ (Моав) (『創世記』19:37) からきており、その一族という意味。『原初年代記』1096 年のポロヴェツ人の洞窟修道院への来襲の記事のバタラの主教メトディオスの書の異族の系譜に関する説の中に「モアブ」についての言及がある [ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 233]。タタール人を「モアブ人」とする形容は、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』6731(1223) 年の記事の冒頭に「前代未聞の神を恐れぬモアブ人、タタール人と称される者たちが来襲した」として認められる。[ПСРЛ Т. 7: С. 129]。

337) 「ユーリイ・コンチャコヴィチ」(Юрьгий Кончакович) は、ドネツ川下流域のポロヴェツ人部族連合の首長コンチャク (上注 19 参照) の息子で、当時はポロヴェツ人部族連合を取りまとめていた指導者だった。『ラヴレンチイ年代記』1206 年の記事に「その年の冬大いなる公フセヴォロド [D177:K] は息子のヤロスラフ [K4] を結婚させ、かれにユーリイ・コンチャコヴィチの娘 (Юргеўна Кончаковича) を娶らせた」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 426] とある。

かった。ルーシの地に逃れてきたポロヴェツ人たちは、ルーシの諸公にこう語った。「もしわれらに対する【741】援助がなければ、今日は、われらが斬り殺されるが、明日には、そなたたちが斬り殺されることになろう³³⁸⁾」。

【ルーシ諸公はキエフでタタール来襲の対策について評議する：1223年】

キエフの城市で全ての公による協議が行われた。次のようなことが協議された。「われらにとって、かれら〔タタール人〕を〔われら〕自らの地で迎え〔撃つ〕よりも、異国の地で迎え〔撃った〕ほうがよいのではないか。そのとき、〔協議した〕のはキエフのムスチスラフ・ロマノヴィチ³³⁹⁾ [J12]、コゼリスク³⁴⁰⁾ (Козельск) とチェルニゴフのムスチスラフ³⁴¹⁾ [G1]、ガーリチのムスチスラフ・ムスチスラヴィチ [J51] だった。かれらがルーシの地では年長者だったのだから³⁴²⁾。

338) このポロヴェツ人がルーシ諸公に援軍を求める言葉は、『ノヴゴロド第一年代記』6732(1224)年の記事に、ポロヴェツ侯コチャン（上注34）が娘婿ムスチスラフ [J51] に要請した言葉として「われらの地は今日奪われたが、そなたたちの〔地〕は、〔かれらが〕やって来て明日に取りあげるだろう」（нашу землю суть днесь огняли, а вашу завтра пришедше возмут）[НПЛ: С. 62, 265] として類似の表現を見出すことができる。

339) 「ムスチスラフ・ロマノヴィチ」[J12]については『ラヴレンチイ年代記（アカデミー写本）』の並行記事で、この1223年の事件が「かれのキエフでの公支配の10年目のことだった」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 503]と記されている。また、『ノヴゴロド第一年代記』6722(1214)年の記事によれば、ノヴゴロド公ムスチスラフ [J51] の手によって、この年にキエフの公座に据えられている [НПЛ: С. 53] とあり、1214年以来キエフの公座に就いていたことがわかる。

340) 「コゼリスク」(Козельск) は、オカ川(Ока)の支流ジズドラ川(Жиздра)沿いの城市で、カルーガから南西に約72kmに位置する現在も同名の都市。ヴァティチの地の主要な城市のひとつだった。ここで、チェルニゴフ公領から見れば辺境の城市であるコゼリスクの名が挙がっているのは奇妙だが、この城市がムスチスラフ [G1] の拠点城市(相続領地、いわゆる удельный город)であったためではないか。1215年に兄弟のフセヴォロド赤毛公 [G4] が没した後、ムスチスラフ [G1] はチェルニゴフ公になっている [Рапов1977: С. 118]。

341) ムスチスラフ・スヴャトスラヴィチ [G1] は、『ニコン年代記（絵入り年代記集成）』6727(1219)年の記事でチェルニゴフ公として記述されており [ПСРЛ Т.10, 2000: С. 86]、当時オレーゲー族の中では最年長者だった。なお、「カルカ河畔の戦い」についての『ノヴゴロド第一年代記』6732(1224)年の記事では、ムスチスラフ [G1] は息子とともに戦死している [НПЛ: С. 63, 267]。

342) 「ルーシの地の年長者」(старѣйшины в русской земли)として三人の公が挙げられているが、これは実年齢の順ではなく、公支配をしている城市の序列(キエフ⇒チェルニゴフ⇒ガーリチ)の順番に列挙されていると考えるべきだろう ([Грушевський ІУР-3: С. 196] 参照)。

スーズダリの大いなる公ユーレイ [K3] は評議の場になかった³⁴³⁾。見よ、さらに若い公たち、ダニール・ロマノヴィチ [I111], ミハイル・フセヴォロドヴィチ³⁴⁴⁾ [G41], キエフのフセヴォロド・ムスチスラヴィチ³⁴⁵⁾ [J122] や他の諸公がいた。その時、ポロヴェツ人の大いなる侯バスティ³⁴⁶⁾ (Басты) が洗礼を受けた。ヴァシリコ [I112] はこの場になかった。年少³⁴⁷⁾ [のため] ヴラジミルに残ったのである。

343) ユレイ・フセヴォロドヴィチ [K3] は、フセヴォロド大巢公 [D177:K] の子で、1212 年に父の遺言でユレイ [K3] がクリャジマ河畔のヴラジミルとスーズダリを得て、ヴラジミル=スーズダリ公になった。1216 年、リーベツ川の戦いで敗北し、ヴラジミルの公座を兄弟のコンスタンチン [K1] に譲らなければならなかった。1217 年、コンスタンチン [K1] は、ユーレイ [K3] にスーズダリ地方を所領として与えた。1218 年 2 月のコンスタンチン [K1] の死後、ユーレイ [K3] は兄弟の遺言によってクリャジマのヴラジミルを得た [Рапов1977: С. 169-170]。

当時のヴラジミル=スーズダリ公であるユーレイ [K3] が評議に参加しなかった理由については、『ラヴレンチイ年代記』 6731(1223) 年の記事に言及があり「〔ルーシの諸公は〕ヴラジミルの大いなる公ユーレイ・フセヴォロドヴィチ [K3] に使者を遣って援軍を請うた。かれ〔ユーレイ〕はかれ〔キエフ公ムスチスラフ [J12]〕に対して、敬虔なる公で自分の甥のヴァシリコ・コンスタンチノヴィチ [K11] とロストフ人を派遣した。しかし、ヴァシリコ [K11] はルーシにおいて、かれらに到達することはできなかった」 [ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 446] と詳しい事情が述べられている。

344) ミハイル [G41] の当時の支配地は不明だが、チェルニゴフに近い附属城市にいたと考えられる [Войтович 2006: С.408]。かれは、1211/1212 年にガーリチ公ロマン [I11] の娘と結婚しており (下注 Стб.782-783) [Домбровский 2015: Сю 306-307], ダニール [I111] の義理の兄弟にあたっていた。かれは 1246 年にサライのバトゥ=ハンの手で殺害され、16 世紀にはモスクワの正教会によって列聖されている。

345) 「フセヴォロド・ムスチスラヴィチ」 [J122] については本年代記ではここが初出。『ノヴゴロド第一年代記』 6727(1219) 年の記事によれば、「大いなる公ムスチスラフ・ロマノヴィチ [J12] は、キエフから自分の子フセヴォロド [J122] を派遣して、言った。『フセヴォロド [J122] を公として受け入れ、兄にあたるスヴァトスラ [J121] をわしのところによこしなさい』。ノヴゴロドの人々はその通りにした」 [НПЛ: С.59] としてノヴゴロドの公座に就いている。しかし、6729(1221) 年の記事では「ノヴゴロド人はフセヴォロド [J122] を追放した (...) かれはルーシの父のもとに行った」 [НПЛ: С.60] としてキエフに戻っている。そのため、当時のかれは父のキエフ公ムスチスラフ [J12] のもとに身を寄せていたと考えられる。

346) 「バスティ」 (Басты) については他の史料に言及がなく、どの部族の首領だったかについては不明。ポロヴェツ人の首領が洗礼を受ける事例は年代記にはここしかなく、非常に切迫した状況における、ルーシ公への臣従のしるしだったのだろう ([Литвина, Успенский 2013: С. 44-45])。なお、バスカールコフによれば、この名は古チュルク語で「勝利者」を意味するという [Баскаков 1985: С. 82]。

347) 当時のヴァシリコの年齢は 20 歳ほどと推定される (上注 23 参照) ので、決して参戦ができないほど「年少」 (млад) のはずはない。おそらく、この記事の記者の計算法では (下注 366 参照), ヴァシリコは 16 歳となり、記者はこの年齢のことを考慮に入れているのだろう。

【キエフ公ムスチスラフ [J21] 等ルーシ諸公は出陣してザループでドニエプルを渡河する：
1223年4月】

そこから、4月にかれら〔諸公軍〕はやって来て、ドニエプル川のヴァリャーグ島³⁴⁸⁾ (остров Варяжский) に到達した³⁴⁹⁾。

かれら〔諸公軍〕とともにすべてのポロヴェツの地の〔ポロヴェツ人〕がこの場所にやって来た。チェルニゴフ人もやって来た。キエフ人、スモレンスク人、他の地の住民も〔やって来た〕³⁵⁰⁾。かれらはドニエプルを渡河したときは、多くの人間によって川の水が覆われたため、陸を歩いているようだった³⁵¹⁾。

348) 「ヴァリャーグ島」(остров Варяжский) は、ザループ(Заруб) 渡渉地点の近く、ベレヤスラヴリのトルベジ川(Трубез)の向かいにあった中州で、18世紀にはグシネツ島(Гусинець)と呼ばれていた。現在は、カーネフ貯水池(川)に水没している。『ラヴレンチイ年代記(アカデミー写本)』の並行記事では「〔ルーシ諸公軍は〕ドニエプル川のザループ(Заруб)へ、ヴァリャーグ島へ向けて進軍した」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 505]と渡河地点が併記されている。

349) 『ラヴレンチイ年代記(アカデミー写本)』と『ノヴゴロド第一年代記』の並行記事では、おそらくベレヤスラヴリ近郊の陣営に派遣されてきたタタール人の使者についての次のエピソードが記されている。「この時、タタール人はルーシ諸公がかれらに向かって攻めて来ることを知り、ルーシ諸公のもとに使者を送って来て、こう言った『私たちは、あなたがたがポロヴェツ人の言うことを聞き、私たちに向かって兵を進めていると聞いていますが、私たちはあなたがたの国も城市も村も占領してはいません。私たちはあなたがたを攻めに来たのではなく、ホローブであり自分たちの馬丁である異教徒のポロヴェツ人に対して神に差し向けられた者として来たのです。あなたがたは私たちと和を結び、かれらがあなたがたのもとに逃れて来ても、そこからかれらをたたき出し、〔かれらの〕財物を自分のものにして下さい。なぜなら私たちは、かれらがあなたがたに対して多くの悪を行ったと聞いているからです。私たちが戦っているのもそのためです』。ルーシ諸公は、それに耳をかさず、使者を殺した」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 505][НПЛ: С. 62, 265]。

350) 『ラヴレンチイ年代記(アカデミー写本)』ではやや詳しく「キエフからはムスチスラフ [J12] がすべての軍勢とともに (...), ウラジーミル・リュエリコヴィチ [J22] がチェルニゴフ人とともに、すべてのルーシ諸公、すべてのチェルニゴフ諸公が、そしてスモレンスクからはザループ(Заруб)へ向けて400人の家臣が〔行軍した〕」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 505]と記されている。

351) この記述によれば、ルーシ諸公軍の主力部隊は、キエフからドニエプル川の右岸を川沿いに進軍し、ザループ渡渉地点でドニエプル川を渡り、左岸のベレヤスラヴリ近郊でポロヴェツ人の部隊と合流したことになる。

なお、『ラヴレンチイ年代記(アカデミー写本)』の並行記事では、この渡河の際に起こったであろう次のエピソードが記されている。「そのときガリチ公ムスチスラフ [J51] は1000人の家臣とともに渡河をして、タタール人の斥候と相対して、これを撃ち破った。かれら〔タタール人の〕残兵たちは、軍司令官ゲミヤバク(Гемябѣк)とともに逃げ出した。かれらには援軍がなかった。そこで、〔タタール人は〕自分たちの軍司令官ゲミヤバクを地中に隠した、生きて命を守ろうとしたのである。しかし、かれは発見され、ポロヴェツ人が身柄を要求して、かれは殺された」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 506]。

ガーリチ人もヴォルニイ人も自分たちの公³⁵²⁾とともにやって来た。クールスク人、トルベチ人、【742】 プチヴリ人もそれぞれ自分たちの公³⁵³⁾とともに騎馬でやって来た。

【ベルラドニク人もドニエストル川を下り、黒海を經由してドニエプル下流域のホルティツァに集合する：1223 年 4 月～5 月】

ガーリチを追放された者たち³⁵⁴⁾も、ドニエストル川を³⁵⁵⁾通って、海〔黒海〕に入った。その船の数は一千艘に及んだ。かれらはドニエプル川に入ると、早瀬を遡って、ホルティツァ³⁵⁶⁾ (Хорьгица) の〔中州〕早瀬のプロトルチャ³⁵⁷⁾ (протолча) のところに布陣した。かれらとともに、ユーリイ・ドマメリチ (Юрьгий Домамѣрич) とデルジクライ・ヴワディスワヴィチ

352) 「ガーリチの公」はムスチスラフ [J51] を指しており『ラヴレンチイ年代記 (アカデミー写本)』の並行記事では「ガーリチからムスチスラフ公 [J51] がすべての軍勢とともに」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 505] と記されている。「ヴォルニイの公」はおそらくダニール [I111] を指している。

353) クールスク (Курск), トルベチ (Трубеч), プチヴリ (Путивль) とともに、チェルニゴフ公領の周辺城市で、クールスク人はオレーグ・スヴァトスラヴィチ [C43112] が率いていた (下注 369)。プチヴリについてはイーゴリ・スヴァトスラヴィチ [C432] の一族の公だろう。トルベチについては、フセヴォロド・スヴァトスラヴィチ [C433] の息子 (スヴァトスラフ [C4331]) がそれぞれ公支配をしていたと考えられる。かれらはすべて、チェルニゴフ公ムスチスラフ [G1] の命令を受けて、遠征に参加したのだろう。

354) 「ガーリチを追放された者たち」(выгонци галичкыя) とは、年代記の他の個所で、ベルラドニク人 (берладники), ドナウ人 (подунайцы) と呼ばれている、南ブグ川、ドニエストル川中下流域から黒海沿岸に居住するチュルク遊牧民とスラブ系移住民が混成した、移住民からなる集団。いわゆる「ブロードニク人」(бродники) と同じとする説もある。ここでは、ガーリチ公領から逃亡したり移住して、この一帯に定着した住民を指している。

355) すべての写本、および『ラヴレンチイ年代記 (アカデミー写本)』の並行個所もすべてについて、この個所は「ドニエプル川を」(по Днѣпру) となっている。ここでは、リハチョヴァ校訂の解釈的な読みが妥当と判断して、「ドニエストル川を」(по Днестру) の読みを採用した。[БЛДР-5: ГБЛ: С. 204]。

なお、コトリヤールは、この「追放者」とはロマン [I11] のガーリチ支配時代にハンガリー領内に逃げた人々だとして、ドナウ水系を下って黒海に入り、ドニエプル川を遡るという行路を推定している [Когляр 2005: С. 211]。

356) 「ホルティツァ」(Хорьгица) はドニエプル川早瀬地帯の中州の名前で、現在もザポロージャ市 (Запоріжжя) に属する同名の島 (中州) である。

この中州がルーシ諸公軍と「ガーリチ追放者」軍の集合地点となったようで、これについては『ラヴレンチイ年代記 (アカデミー写本)』の並行記事は「[ルーシ諸公軍は] 自らかれら〔タタル人〕に向けて進軍し、オレーシエ (Олешье) には到達せずに〔河口まで行かずに〕、ドニエプル川に布陣した」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 506] と、別のかたちのやや曖昧な言い方で記している。

357) 「プロトルチャ」(Протолчя) はドニエプル川下流域の早瀬 (пороги) の一帯をあらわす地名。ここには、ブリツァクの分類によるドニエプル川草地のポロヴェツ人グループ (Dnieper Meadow Groups; Днепрские половцы на луге) が展開していた [Pritsak 1982: pp.356]

(Держикрай Володиславич) がいたからである³⁵⁸⁾。

【ドニエプル河岸で、ダニール [I111] 等はタタール人偵察隊を見る。タタール人の印象】

〔ホルティツァのルーシ諸公軍の〕陣営に報告が届いた。〔タタール人が〕やって来て、ルーシ人の船を偵察に来たという。ダニール・ロマノヴィチ [I111] はこれを聞いて、急ぎ乗馬すると、前代未聞の軍団を見るために後を追った。その場にいた騎兵や他の多くの諸公も、前代未聞の軍団を見るために馬を飛ばした。かれら〔タタール人〕は立ち去った。

ユーリイ³⁵⁹⁾は言った「あれは射手たちである」。他の者たちは言った。「あれは、普通の〔兵士たち〕であり、ポロヴェツ人よりも劣る」。〔しかし〕ユーリイ・ドマメリチは言った。「あれは戦士であり、よい軍人たちである」。

【諸公軍はホルティツァの陣営を発ち、ドニエプルを渡河して進軍をはじめると：1223年5月】

ユーリイは戻ってくると、すべてのことをムスチスラフ [J12] に話した。年少の諸公はこう言った。「ムスチスラフ [J12] よ、そしてもう一人のムスチスラフ [G1] よ。そなたたち二人は、〔ここで〕布陣してはいけない。かれら〔タタール人〕を討つべく進軍しようではないか」。

すべての諸公、すなわちムスチスラフ [J12] ともう一人のチェルニゴフのムスチスラフ [G1] はドニエプル川を渡河して、かれら〔タタール人〕を討つべく進軍した。他の諸公も渡河して、ポロヴェツ人の原野へと進軍した。【743】ドニエプル川を渡河したのは火曜日だった³⁶⁰⁾。

【原野を行軍するルーシ諸公軍の緒戦の勝利】

そして、タタール人がルーシ人の部隊を迎え撃った。ルーシの射手は勝利して、原野を斬り殺しながらさらに追いかけた。〔ルーシ諸公軍は〕かれら〔タタール人〕の家畜を奪い取り、〔家畜の〕群れを持ち去った。こうしてすべての〔ルーシの〕軍兵は家畜が満たされた。

358) この、一千の船の船隊を指揮したとする「ユーリイ・ドマメリチ」(Юрьгий Домамѣрич)と「デルジクライ・ヴワディスワヴィチ」(Держикрай Володиславич)について詳細は不明だが、かれらに対する肯定的な扱い(以下のエピソードでタタール人を正しく評価している)と、名前と父称を併記する呼び名から推定して、ガーリチの貴族が軍司令官として指揮を執ったと考えられるだろう [Котляр 2005: C. 211-212]。

359) この「ユーリイ」は、「ユーリイ・ドマメリチ」(上注 358 参照)を指しているだろう。

360) ウクライナ語訳の注は、おそらくカルカ川の戦いの日付から逆算してだろう、これを 1223 年 5 月 23 日の火曜日としている。

【カルカ川河畔でのタタール人斥候部隊との戦いの敗北】

{そこから} 8 日行軍して、カルカ川³⁶¹⁾ (Калка) に到達した³⁶²⁾。タタール人の斥候部隊と遭遇した。斥候部隊はかれら〔諸公軍〕と戦った。イワン・ドミートリエヴィチ³⁶³⁾ とかれとともにいた他の二人が殺された。

【ムスチスラフ [J51] は独断でカルカ川を渡河して先制攻撃を仕掛ける】

タタール人は軍を引くと、カルカ川の対岸で、タタール人はポロヴェツ人とルーシの部隊を迎撃した。ムスチスラフ・ムスチスラヴィチ [J51] は、ダニール [I111] とその部隊に対して、また他の部隊に対しても、カルカ川を渡河するように命じた。かれ〔ムスチスラフ [J51]〕自身は、そのあとから渡河を始めた。かれ自身は斥候部隊として〔進軍した〕。かれがタタール人の部隊を認めると、〔自軍のところに〕戻って来て、「武装せよ」と言った。

ムスチスラフ [J12] と他のムスチスラフ [G1] は陣営に身を置いたまま、何も知らなかった。ムスチスラフ [J51] は、嫉んでいたために、かれら二人に何も言わなかったのである。なぜなら、かれらの間に大いなる不和があったのだから³⁶⁴⁾。

【若きダニール [I111] の奮戦とムスチスラフ [I24] の献身的な援助】

部隊はその場で会戦した。ダニール [I111] はその場を抜けて前進した。セミヨン・オリュエヴィチ (Семьон Олюевичь) とヴァシリコ・ガヴリロヴィチ (Василко Гавриловичь) は³⁶⁵⁾ タタール人の部隊に向かって突撃した。ヴァシリコは脇腹に傷を負った。【744】ダニール [I111] 自身も胸に傷を負った。かれは若く、雄壮だったので自分の身体の傷を感じることはなかった。か

361) 「カルカ川」(Калка) は定説では、アゾフ海に流れる現在のカリチク川 (Кальчик) (カリミウス川 (Кальмиус) 右岸支流) に相当し、ホルティツァ (現在のザポロジエ) からその河口までは東南東方向に直線で 170km ほど離れている。

362) 『ノヴゴロド第一年代記』の並行記事では「〔ルーシ諸公は〕かれら〔タタール人〕を 9 日間追って進み、カラク川を越えた」[НПЛ: С. 63, 265] と、ホルティツァの陣営からカルカ川までの行程を「9 日」としている。

363) 詳細は不明だが、この「イワン・ドミートリエヴィチ」はキエフの軍司令官を指しているだろう。

364) このガーリチ=ヴォルィニ勢とキエフ=チェルニゴフ勢との間の「大いなる不和」(котора велика) については解釈が難しいが、遠征軍全体の指揮権を持っていなかったムスチスラフ [J51] はそれを「嫉んで」、ダニール [I111] とともに、キエフ=チェルニゴフ勢を出し抜いて、独占的な敵軍の掠奪を企てたのではないか。

365) 「セミヨン・オリュエヴィチ」(Семьон Олюевичь), 「ヴァシリコ・ガヴリロヴィチ」(Василко Гавриловичь) についての詳細は不明だが、文脈と名と父称の併記から見て、ムスチスラフ [J51] あるいはダニール [I111] 配下の、ガーリチ貴族の軍司令官だろう (上注 358 を参照)。

れは18歳であり³⁶⁶⁾、力がみなぎっていたからである。

ダニール [I111] は激しく戦い、タタール人を撃ち殺した。ムスチスラフ無言公³⁶⁷⁾ [I24] はこれを見て、ダニール [I111] が傷を負ったと思い、自らかれ〔タタール人〕に向かって突進した。なぜなら、かれ〔ムスチスラフ [I24]〕は力強い男だったからであり、ウラジーミル・モノマフの一族としてロマン [I11] と同族だったからである。かれ〔ムスチスラフ [I24]〕はとてもかれの父〔ロマン [I11]〕に親愛を抱いており、かれ〔ロマン〕は死後に自分の領地をダニール公 [I111] にそれを引き継ぐようにと、かれ〔ムスチスラフ [I24]〕に託したのである³⁶⁸⁾。

【ルーシ諸公軍の敗北】

タタール人が逃げ始めたとき、ダニール [I111] は自分の部隊とともにかれらを撃ち破っていた。クールスク〔の公〕オレーグ³⁶⁹⁾ [C43112] も激しく戦い、他の部隊もかれら〔タタール人〕と戦闘を繰り広げた。〔しかしながら〕われらの罪ゆえに、ルーシの部隊は敗れた。

ダニール [I111] は、非常に激しい戦いの中で〔タタール人の〕射手たちが激しく矢を射ているのを見た。かれ〔ダニール [I111]〕は逃走するために自分の馬の方向を変えた。敵が押し寄せてきたからである。かれは逃げながら、非常に喉が渇いた。そこで水を飲んだところ、自分の身体の傷の痛みを感じた。自分の闘志が盛んだったために、戦闘中は痛みは感じなかったのである。なぜなら、かれ〔ダニール [I111]〕は果敢で、勇敢で頭から足までいかなる欠陥もなかったからである³⁷⁰⁾。【745】

すべてのルーシの諸公は敗北を喫した。前代未聞のことだった。タタール人は、キリスト教

366) ダニール [I111] の年齢については、生年が1201年と推定されるが(上注23参照)、この記事では1223年5月のカルカ河畔の戦いの時点で18歳だから、生年が1205年となり合致しない。[Толчок А. 2007: С. 230]

367) 「ムスチスラフ無言公」(Мстислав Немой)[I24] はベレソブニツァを拠点としていた公で、ガーリチ公ムスチスラフ [J51] の命令によって、ダニール [I111] とともに遠征に動員されたのだろう。かれの呼び名については上注131を参照。

368) ムスチスラフ無言公 [I24] がロマン [I11] に親愛を抱き、かれから信頼を得ていたというこのエピソードはこれまでの叙述からは確認できない。かえってムスチスラフ [I24] は、ガーリチに対して支配権を主張し、その支配を狙っていた(上注95, 185参照)。この記述は、ダニール [I111] に好意を持つ年代記者による過剰なひいき目からなされたものではないか。

369) クールスク公オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C43112] については年代記でこの個所が初出。『ラヴレンチイ年代記』6784(1226)年の記事には、チェルニゴフ公ミハイル [G41] がクールスク公オレーグ [C43112] を討伐する遠征をしたとの記述がある[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб.448]。かれは刺客によって殺された1284年まで、クールスクで公支配を行った[Рапов1977: С. 125][СЭ-1: С. 769]。

370) このダニール [I111] を称賛する最後の文言は、旧約『サムエル記下』14:25の「アブサロムについての句「イスラエルの中でアブサロムほど、その美しさをたたえられた男はなかった。足の裏から頭のてっぺんまで、非のうちどころがなかった」を借用している。

徒が罪を犯したためにルーシの地に勝利したのである。

〔タタール人は〕ノヴゴロド・スヴァトボルコフ³⁷¹⁾ (Новгород Святополков) までやって来て、そこに到達した。ルーシ人はかれらの策略を知らずに、十字架を手に城市を出て出迎えたが、みな撃ち殺された。

【タタール人の東方への帰還, チンギス・ハンの死について: 1227 年頃】

キリスト教徒の改倭を望んだ神は、タタール人を東方の地へ再び帰還させた。〔タタール人は〕タンゲートの地 (Таношустьска земля)³⁷²⁾ とその他の国を掠奪した。そのとき、チンギス＝ハン (Чаногиз-кано) はタンゲート人 (тангуты) によって殺された³⁷³⁾。〔タタール人は〕かれら〔タンゲート人〕を策略で騙し、その結果、策略で滅亡させた。他の国々については武力で滅ぼしたものもあるが、多くの場合は策略で滅亡させたのである。

371) 「ノヴゴロド・スヴァトボルコフ」(Новгород Святополков) は、キエフの丘から南東方向に 28km ほど離れたドニエプル川の右岸「ヴィティチェフ」(Витечев) (現在のヴィタチウ (Витачів) 村) から南に 1.5km ほど離れた遺構に同定されている。『原初年代記』6603(1095)年の記事に「スヴァトボルク [B3] はヴィティチェフの丘の上に城砦を建てるように命じ、自分の名にちなんでスヴァトボルクの城砦 (Святополчь город) と呼んで、主教のマリンに、〔ポロヴェツ人によって荒廃した〕ユーリエフ人、サコフの先やその他の城砦から来た人々とともにそこに住むよう命じた」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 229] とあり、そのときに建てられた城砦を指している可能性が高い。

もしそうであれば、モンゴル＝タタール勢の一部はその来襲の最初期にドニエプル川を渡って (ヴィティチェフの渡渉を使って) 右岸まで達したことになる。英訳者はそれが不自然と考えたのだろう、「スヴァトボルコフ」(Святополков) を誤記として、この城市を「ノヴゴロド・セヴェルスキイ」のことに解釈している [Perfecky1973: p. 30]。

372) タンゲートは、中国の西北部を中心に 6 世紀から 14 世紀ごろまで活躍した民族。チベット系羌の一族であり (モンゴル化したテュルク民族とする説もある)、諸部族に分かれ、7 世紀の初めごろから、吐蕃 (チベット) と青海地方の強国吐谷渾に挟まれた地域に居住した。吐蕃が興隆して吐谷渾を破り、青海地方を領有すると、タンゲートも吐蕃に吸収され、その支配下に入ったが、吐蕃への隷属を好まなかった一部のタンゲート人は、慶州、靈州、塩州、夏州に移動した。タンゲート人は 11 ~ 13 世紀初めに中国北西部に「西夏」という国家を建て、中国の西辺をおさえ、宋からは毎年、絹・茶・銀を贈られ、かつ遼および金にも服属した。ここの「タンゲートの地」(Таношустьска земля) とはこの国家のことを指しているのだろう。

373) タンゲート人の国家、西夏は、1226 年秋にチンギス・ハンの軍隊によって首都興慶が包囲された。しかし、翌 1227 年夏、六盤山で避暑していたチンギス・ハンは危篤に陥り、1227 年 8 月 18 日に死去した。その 3 日後に興慶は開城して西夏は滅亡した。このようなチンギス・ハンの西夏遠征とその死は時期が重なっていることから、タンゲート人によって殺害されたという説が伝わったのだろう。後の記事にあるように、ダニール [1111] は 1245 ~ 1246 年にサライに赴いており、チンギス・ハンの死についての情報はそのときに年代記記者にもたらされた可能性が高い [Пашут 1968: С. 355]。

6733 [1225 年]

【アレクサンドルの唆しによりムスチスラフ [J51] はダニール [I111] を攻める。ベルズの戦闘：1224 年頃】

{しばらく時を経て} アレクサンドル [I121] は、自分の兄弟であるロマン [I11] の二人の息子、すなわちダニール [I111] とヴァシリコ [I112] に対して、一貫して敵意を持ち続けていた。〔アレクサンドル [I121] は〕、ムスチスラフ [J51] が自分の娘婿であるダニール公 [I111] に親愛を持っていない³⁷⁴⁾ ことを聞いて、喜びに満たされて、ムスチスラフ [J51] を戦争に駆り立てようとしはじめた³⁷⁵⁾。

ムスチスラフ [J51] は戦争の行軍をはじめ、禿げ山³⁷⁶⁾ (Лысяя гора) に到達した。〔他方、〕ダニール [I111] は馬を駆ってポーランド人のもとに行き、レシエク公を〔援軍として〕動員すると、かれ〔ムスチスラフ〕に対抗して軍を進めた。

アレクサンドル [I121] はムスチスラフ [J51] に援軍を派遣した。〔ダニールは〕かれら〔アレクサンドルの援軍〕を迎撃し、かれらの軍勢をベルズ (Белзь) の城市の中に追い込んだが、わずかのところで城市を占領することはできなかった。翌日に〔ダニール [I111] は〕かれら〔ムスチスラフ軍〕に対抗して進軍した。ムスチスラフ [J51] はこれに耐えられず、**[746]** ガーリチへ引き返した。

【ダニール [I111] 報復戦。ガーリチ地方北西諸城市を掠奪する：1224 年頃】

ダニール公 [I111] はポーランド人とともにガーリチの地を、リュバチェフ (Любачев) の周辺を掠奪した。そして、ベルズの地、チェルヴェンの地の全土の、〔戦闘員でない〕定住民さえも捕虜にした。ヴァシリコ公 [I112] も多くの捕虜を、雄馬と牝馬の群れを獲得した。それは、ポーランド人が羨むほどだった。

そして、二人〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112]〕から〔ムスチスラフ [J51] のもとに〕〔和議のために〕使者が派遣されてきたとき、デミヤン (Дѣмьян) とアンドレイ (Андрѣй) が釈放さ

374) 当時ガーリチ公ムスチスラフ [J51] とヴラジミル公ダニール [I111] の間の確執については、上注 325 も参照。

375) この、ムスチスラフ [J51] とダニール [I111] の不和の拡大と戦闘の動機としては、アレクサンドル [I121] の後者への敵意だけでなく、ロマン [I11] 一族のガーリチへの支配復帰を恐れた (下注 389 参照) ガーリチ貴族たちが、ムスチスラフ [J51] をダニール [I111] との戦争へとけしかけたという側面も考えられる ([Котляр 2005: С. 212] 参照)。

376) 「禿げ山」(Лысяя гора) は、リヴィウから東へ 50km ほど、チェルヴォノエ (Червоное, Червоне) 村の西にある標高 400m ほどの現在も同名の丘陵地帯のこと。ガーリチからヴラジミルへの途上のおよそ半行程の地点にある。

れた³⁷⁷⁾。

【アレクサンドルの唆しによりムスチスラフ [J51] はダニール討伐を図るが、アレクサンドルの策略が発覚する：1225 年頃】

その後、ムスチスラフ [J51] は、コチャン³⁷⁸⁾ (Котян) と多くのポロヴェツ人、そして、キエフの〔公〕ウラジーミル³⁷⁹⁾ [J22] を〔味方に〕引き入れた。かれ〔ムスチスラフ〕はポーランド人討伐を装って進軍したのだが、これは、アレクサンドル [I121] の助言にしたがったものだった。アレクサンドル [I121] はその助言で、いつまでも自分の兄弟〔ダニール [I111]〕への〔誹謗〕を止めようとせず、〔ムスチスラフに対して〕「あなたの娘婿〔ダニール〕はあなたを殺そうとしている」と言っていた³⁸⁰⁾。

かれ〔ムスチスラフ〕の移動幕舎の近くで評議が行われたとき、アレクサンドル [I121] はみずからそこに赴くことを敢えてせずに、自分の〔側近〕ヤン (Янь) を派遣した。ムスチスラフ [J51] はこう言った。「ヤンよ、ダニール [I111] が再びわしを討つためにポーランド人をけしかけたのは、そなたの仕業によるものだ」。

【ムスチスラフ [J51] はアレクサンドル [I121] の領地ベルズを奪取しようとせず。諸公はムスチスラフの兄弟愛を称賛する】

すべての諸公は、アレクサンドル [I121] が讒言を行い、ヤンが嘘をついていることを知った。すべての諸公は〔ムスチスラフ [J51] に対して〕言った。「あなたが受けた辱め〔をそそぐ〕ためにすべての〔アレクサンドルの〕領地〔ベルズ〕を奪取しなさい」。かれ〔ムスチスラフ [J51]〕

377) 「デミヤン」 (Дѣмьян) はダニールに仕える貴族で千人長。上注 127, 309 を参照。「アンドレイ」 (Андрѣй) は、その後ダニールの側近として仕えることになる貴族で、『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の有力な情報提供者の一人。状況から見て、この二人はムスチスラフ [J51] 軍との戦闘で捕虜になったが、講和の結果「釈放された」 (пущень бысть) と考えられる。ただし、コトリアルは、デミヤンが経験豊かな貴族であることから、二人は和議のために「派遣された」 (пущень бысть) と考えている。

378) ムスチスラフ [J51] の岳父にあたるコチャンについては上注 34 を参照。

379) 「ウラジーミル・リュウリコヴィチ」 [J22] は、1215 年にムスチスラフ武運公 [J51] の手でスモレンスク公になり、1219 年には従兄弟のムスチスラフ [J12] がかれをキエフ公に据えたが短期間のことだった。しかし、キエフ公ムスチスラフ [J12] が1223 年 5 月のカルカ川の戦いで戦死した後に、キエフの公座に就いている。このようにウラジーミル [J22] は一貫して、ムスチスラフ [J51] の影響下にあった。さらに、本年代記 6742(1234) 年の記事によれば、ウラジーミル [J22] はベルズ公アレクサンドル [I121] の岳父 (тесть) とあることから、アレクサンドルとの婚姻同盟の関係もあって、ムスチスラフ [J51] を支援したのだろう。

380) この記事では、ムスチスラフ [J51] の戦争行動はアレクサンドル [I121] の唆しによるとされているが、パシュートは、ムスチスラフ [J51] は明瞭な反ダニール政策を持っていたとして、かれは公然かつ積極的にアレクサンドル [I121] と同盟して行動したと指摘している [Пашуто 1968: С. 205]。

は兄弟愛のゆえに、かれ〔アレクサンドル〕の領地を奪取しなかった。〔そのことで〕皆はかれ〔ムスチスラフ〕を称賛した³⁸¹⁾。

【ムスチスラフ [J51] はペレムィシェリでダニール [I111], ヴァシリコ [I112] と和を結ぶ：1225 年頃】

ムスチスラフ [J51] は自分の娘婿〔ダニール [I111]〕を親愛を持って受け入れ〔和解し〕、多大な贈物によって名誉を示し、かれ〔ダニール〕に自分の馬である駿馬³⁸²⁾を与えた。そのような馬は当時は手に入れることは不可能だった。また、自分の娘アンナ³⁸³⁾には多大な贈物を与えた。かれ〔ムスチスラフ [J51]〕は二人の兄弟〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112]〕とペレミリ³⁸⁴⁾ (Перемиль) で会合して、和を結んだのだった。【747】

6734 [1226 年]

【貴族ジロスラフの唆しによりガーリチの貴族たちはペレムィシェリへ逃げるが使者に説得されて帰還する：1226 年頃】

〔その後〕 策略家のジロスラフ³⁸⁵⁾ は、ガーリチの貴族たちに向かって言った。「ムスチスラフ [J51] は原野〔のポロヴェツ人の居住地〕に向けて軍を進めており、かれ〔ムスチスラフ〕はそなたたちを、自分の岳父コチャンに³⁸⁶⁾ 引き渡して、殺させようとしている」。〔しかしその時〕ムスチスラフ [J51] は、かれ〔ジロスラフ〕については清廉潔白であり、かれら〔ガーリチの貴族たち〕のことなどなにも知らなかった。

381) ウクライナ語訳 [Літопис руський, 1989: C.383], ロシア語訳 [БЛДР-5: C. 209] ともに、このエピソードはダニール [I111] のこととして訳されている。確かに、ダニールがアレクサンドルに譲歩したエピソードはすでにあること（上注 325 参照）や、本年代記で「称賛」されるのはもっぱらダニール [I111] であることから、この解釈も可能ではあるが、文脈から見る限り明らかに辱め (сором) を受けたのはムスチスラフ [J51] であり、英訳 [Perfecky1973: p.31] のようにムスチスラフのこととして解釈すべきだろう。

382) 「駿馬」(борзый Актаз) は文字通りの意味は「俊足のアクタズ」。「アクタズ」はチュルク語で「白い杯」(ак-таз) を意味することから、白い毛並みのポロヴェツ産の馬だったか。

383) ムスチスラフ [J51] の娘で、ダニール [I111] の妃である「アンナ」については上注 230 を参照。

384) 「ペレミリ」については上注 209 を参照。

385) 親ハンガリー派のガーリチ貴族である「策略家のジロスラフ」(льстивый Жирослав) については、先に「嘘つきのジロスラフ」(лживый Жирослав) としてやはり否定的な修飾語とともに言及されている（上注 307 参照）。

386) 「自分の岳父コチャンに」(тестеви своему Котяню) の文言から、ムスチスラフ武運公 [J51] はポロヴェツ侯コチャンの娘を妃にしていることについては上注 34 を参照。

かれら〔ガーリチ貴族たち〕はこれ〔ジロスラフの言葉〕を信じて、ベレムィシェリの地へ、カヴォカスキ山脈³⁸⁷⁾ (горы Кавокаськия) へ、すなわちウゴル (ハンガリー) 〔の山脈〕へ、ドニエストル³⁸⁸⁾ 川〔上流〕方面へと逃げ出した³⁸⁹⁾。そして、〔ガーリチ貴族たちは〕自分たちの使者を〔ムスチスラフ [J51] のもとへと〕派遣して「ジロスラフがそのように言ったのだ」と弁明した。

〔これに対して〕ムスチスラフ [J51] は、自分の聴罪司祭ティモフェイ³⁹⁰⁾ (Тимофѣи) を〔ベレムィシェリへと〕派遣して言った。「ジロスラフがそなたたちのことを、わしに対して中傷しても無駄なことだ」。そしてティモフェイは誓いを立てて、こう言明した。「ムスチスラフ [J51] は、このこと〔中傷の内容〕については何も知らない」。そして、かれ〔ティモフェイ〕はすべての貴族たちを連れて、かれ〔ムスチスラフ [J51]〕のもとへ、〔ガーリチ〕へと帰還した。

【ムスチスラフ [J51] は貴族ジロスラフをガーリチから追放する：1226 年頃】

公〔ムスチスラフ [J51]〕はジロスラフ〔の罪を〕摘発して、かれを自分のもとから追放した。それは、神がこう言ってカインを自らの面前から追い出したと同じだった。「お前は呪われよ。お前は呻き大地で身をよじらせるがよい。なぜなら、大地はお前の弟の血を呑み込むためにその口を開いたのだから³⁹¹⁾」。そのようにして、ジロスラフは自らの主人を損なうためにその口を開いたのだった。

かれには、ルーシの地であれ、ハンガリーの地でいかなる国であれ、すべての土地にあって

387) 「カヴォカスキ山脈」(горы Кавокаськия; Кавокаськия) は次に「ウゴル (ハンガリー) の山脈」(горы угорские) とあるように、カルパチア山脈を指している。ベレムィシェリはガーリチから見れば、ドニエストル川の上流域でカルパチア山脈の山裾に位置している。

388) この個所も、イパーチイ写本、フレーブニコフ系写本とも「ドニエブル川」になっているが、文脈から見て「ドニエストル川」に改めた。

389) このガーリチ貴族の行動について、コトリヤールは「貴族たちの身柄のポロヴェツ人への引き渡し」というジロスラフの唆しがいかに荒唐無稽であり、そのまま貴族たちが信じたとは思えないとして、貴族たちにとっての別の動機を想定している。すなわち、ガーリチ貴族の指導層は、ロマン一族と和解したムスチスラフ [J51] に対して、誇示的にベレムィシェリに退去してみせ、自分たちの支持がなければ、老齢のムスチスラフ [J51] は若いロマン [I11] の息子たちに対抗できないことを、思い知らせようとした、とコトリヤールは想定している。さらにそこには、ガーリチをハンガリー王に引き渡すプロセスを早め、少なくともロマン一族のガーリチ復帰 (その場合確実に貴族たちは弾圧を受ける) は許さないうという貴族たちの意図があったとしている [Котляр 2005: С. 213]。

390) この「ティモフェイ」は、ガーリチにおける反ハンガリー支配の立場が共通していることから、1210 年頃の記事で、キエフ生まれの「いと賢明な文人」と呼ばれた人物のことを指しているのだろう (上注 91 参照)。

391) 旧約『創世記』4:11 の句「今、お前は呪われよ。お前が流した弟の地を、口を開けて飲み込んだ土よりもなお呪われよ」に対応している。「呻き大地で身をよじらせる」の文言は文学的な付加だろう。

憩う場はなからしめよ。かれをして、国々を放浪せしめよ。〔異国で〕食を乞わしめよ。かれには、ぶどう酒も強い酒も欠乏させしめよ。かれの館を【748】荒廃せしめ、かれの村は無人たらしめよ³⁹²⁾。

〔ジロスラフは〕その場所〔ガーリチ〕から追放されてイジャスラフ³⁹³⁾のもとへ行った。かれ〔ジロスラフ〕は巧妙な策略家と呼ばれており、誰よりも欺瞞的で、嘘にまみれており、かれが名士であるのは、かれの父親の名望ゆえだった。かれの悪意は質素を誹り、かれの舌は嘘を養分としていた。かれは悪知恵によって〔おのれの〕嘘を信じさせ、栄冠よりも謀略に長けており、嘘つきだった。なぜなら、かれは他人を瞞着するだけでなく、自分の味方にさえも物欲のために嘘をついた³⁹⁴⁾。それゆえに、かれはイジャスラフのもとにあっても貪欲だった。

【ムスチスラフ [J51] は親ハンガリー派貴族の画策により、娘をハンガリー王子と婚約させて、王子にペレムィシェリを譲渡する：1221年】

われらは、以前のことに戻ることにしよう。

ムスチスラフ [J51] は、欺瞞的なガーリチ貴族たちの助言にしたがって、自分の年少の娘を

392) 旧約『レビ記』10:9などの表現をつなぎ合わせた呪いの言葉。

393) この「イジャスラフ」の同定は難しく、年代記全集の人名索引 [ПСРЛ Т. 2, 1998: XVI-XVII][НПЛ: С. 617]では除外されたり、同定されないまま記述されている。

コトリヤールはこれをノヴゴロド=セヴェルスキイ公イジャスラフ・ウラジーミロヴィチ [C43211]としている（その場合ジロスラフは遙かノヴゴロド=セヴェルスキイに亡命したことになる）。確かにこの公は、1210年の時点でガーリチの附属城市テレボヴリを支配しており（上注102参照）、支配時代はロマン [I11]一族とガーリチ支配権をめぐる利害が対立していたことから、ジロスラフはこの公を頼って亡命したという推定は可能である。実際およそ半世紀後にイジャスラフ [C43211]はダニール [I111]と対立することになる [Котляр 2005: С. 213]。おそらく、この説がもっとも可能性が高いだろう。ただし、このイジャスラフはノヴゴロド=セヴェルスキイ公ではなく、この時も依然としてテレボヴリに公座を維持しており（上注149参照）、ジロスラフは、ガーリチから東北東に75kmほど離れたテレボヴリに亡命したのではないか。

他方、ウクライナ語訳の索引およびロシア語訳の注では、これを「イジャスラフ・ムスチスラヴィチ」と同定し、当時はスモレンスク公で、のちにチェルニゴフ公ミハイル・フセヴォロドヴィチ [G41]がガーリチを巡ってダニール [I111]と争ったとき、ミハイルの陣営についた人物としている。このイジャスラフは、年代記6741(1233)年の記事では、ポロヴェツ人と同盟してダニール [I111]のキエフ攻略を助け、1235年にはポロヴェツ人とチェルニゴフ公の助けを得て、ウラジーミル [J22]とダニール [I111]を破ってキエフの公座に就いたが、まもなくポロヴェツ人の捕虜となった [Покажчик][БЛДР-5: С.496]。ただし、この「イジャスラフ・ムスチスラヴィチ」[J123]については、存在自体を認めない説もあり（例えば [Домбровский 2015]）、ここでは可能性は低い。

394) このジロスラフが、策略家 (льстец) で欺瞞的 (льстивый) であることについての長い文言は、ヨセフス『ユダヤ戦記』第2書21章の「ギスカラ出身の陰謀家でレヴィの子でヨアンネスという人物」の性格描写の文（戦記のアルヒーフ写本 (Архивский список) を借用したもの [Мещерский 1958: С. 98, 287]。上注290も参照。

アンドラーシュ王子に婚約させ³⁹⁵⁾、かれ〔王子〕にペレムィシェリを与えた。

【ハンガリー王はこの機に乗じてガーリチ征服を策する：1226/27 年冬】

〔ハンガリー王〕アンドラーシュは、欺瞞の徒セミヨン・チェルムニイ³⁹⁶⁾ (Семьонко Чермьныи) の言に聴き従って、ハンガリーに急ぎ向かうと、戦争の準備を始めた。

そして、冬になると〔ハンガリー王は〕ペレムィシェリへとやって来た。〔ペレムィシェリの〕千人長ユーリイ³⁹⁷⁾ (Юрьи) は、ペレムィシェリを〔ハンガリー王に〕引き渡すと、自分自身はムスチスラフ [J51] のもとへと逃げて行った。

【ハンガリー王はガーリチへの遠征を行うが、呪術師の予言を恐れて自らはガーリチ攻撃をせず：1227 年春】

王〔アンドラーシュ二世〕はズヴェニゴロド³⁹⁸⁾ に布陣すると、ガーリチ〔の城市へ〕軍隊を派遣した。しかし、〔王〕自らガーリチへ進軍しようとはしなかった。なぜなら、ハンガリーの呪術師たちがかれ〔王〕に「ガーリチを見れば、生きて帰れない」と告げたからだった。かれ〔王〕はそのためにガーリチへ行こうとはしなかった。呪術師を信じたからである。〔さらに〕

395) ムスチスラフ [J51] の年少の娘 (дщерь меньшая) の名は、『グストインスカヤ年代記』 6733(1225) 年の記事「ガーリチ公ムスチスラフは年少の娘マリヤを (...)」(Мстислав Галицкий обручи дщерь свою Марию за Бело, королевича Угорьского)[ПСРЛ, Т. 40, 2003: С. 116] などの記述から「マリヤ」(Мария) と想定される。ハンガリー史料では「ヘレナ」(Helena) と言う名が記されている。

なお、1222 年 1 月 27 日付けの、教皇ホノリウス三世による婚約を認可しない旨の勅書が現存していることから、かの女とアンドラーシュ王子 (ハンガリー王アンドラーシュ二世の三男) との婚約は 1221 年末に行われたと考えられる [Літопис руський, 1989: С.382 прим.5]。当時は新婦と新郎ともに 11 歳ほどに過ぎなかった [Домбровский 2015: С. 592-596]。なお、アンドラーシュ王子は 1226 年 ~ 1234 年の間、ガーリチの公として支配を行っている (下注 415, 416 を参照)。

396) 「セミヨン・チェルムニイ」(Семьонко Чермьныи) は、「赤毛のシメオン」という意味で、あだ名と「セミヨンコ」という卑称で呼ばれているが、親ハンガリー派のガーリチ貴族の一人でハンガリー王と内通していたと考えられる。

397) この「ユーリイ」はムスチスラフ [J51] に協力的なガーリチ貴族・千人長の「ユーリイ・ドマリチ」(上注 359) のことで、当時ムスチスラフの命令によりペレムィシェリの代官を務めていたのだろう。

398) 当時ズヴェニゴロドには、1221 年にはムスチスラフ [J51] を裏切ったが、のちに赦免されたハンガリー派のガーリチ貴族ステスラフが拠点としていた (上注 314)。ステスラフはハンガリー王を受け入れることで、再びムスチスラフ [J51] を裏切ったのである。

ドニエストル川³⁹⁹⁾は増水して、渡河することは【749】できなかった。

【ガーリチ公ムスチスラフ [J51] は対抗。ハンガリー王軍はガーリチ=ヴォルィニ地方東部の諸城市を掠奪する：1227 年】

ムスチスラフ [J51] は部隊を率いて、かれら〔ハンガリー軍〕に対抗するために〔ガーリチの城市〕を出た。両者は対峙した。すると、ハンガリー人は軍を引いた。

パコスラフ⁴⁰⁰⁾ (Пакославъ) はポーランド人たちとともに、〔ハンガリー〕王に同行していた。その場所〔ズヴェニゴロド付近の王の本営〕から、王はテレボヴリ⁴⁰¹⁾ (Теребовль) へと向かい、テレボヴリを奪取した。そして、ティホムリ⁴⁰²⁾ (Тихомль) へと向かい、ティホムリを奪取した。そこから、クレミヤネツ⁴⁰³⁾ (Кремянець) へやって来て、クレミヤネツの城下で戦い、多くのハンガリー人が殺され、負傷した。

【ムスチスラフとダニールの同盟の確認。ムスチスラフ [J51] はズヴェニゴロド近郊での戦いで勝利し、ハンガリー王は撤退する：1227 年】

そのとき、ムスチスラフ [J51] は、自分の娘婿のダニール公 [I111] のもとにステイスラフ⁴⁰⁴⁾ を派遣して言った。「わしから離反してはならない」。かれ〔ダニールは答えて〕言った「自分

399) イパーチ写本、フレーブニコフ系写本とも「ドニエブル川」(Днѣпръ, Днѣпру) になっているが、整合的でないことから「ドニエストル川」(Днѣстр) に読みを改めた。

ズヴェニゴロド方面から、ドニエストル川左岸にあるガーリチ城市を攻めるためにはドニエストル川を渡河しなければならない。ハンガリー王が派遣した部隊は春の増水のために渡河できず、城市への襲撃をあきらめたということ。

400) 「パコスラフ」(Пакославъ) はレシエク側近のポーランド高官貴族。ポーランド人援軍の最高司令官をつとめていたのだろう。上注 214 を参照。

401) この「テレボヴリ」(Теребовль) は、イジャスラフ [C43211] が支配しており、ここにムスチスラフ [J51] を裏切ったガーリチ貴族ジロスラフも身を寄せていたと思われる。ハンガリー王はこの城市を戦闘なしに獲得し、イジャスラフと貴族ジロスラフは、ハンガリー王の陣営に加わったのだろう。

402) 「ティホムリ」(Тихомль) の城砦は、現在のフメリヌイツィクィ州トィホメリ村(Тихомель)に相当し、ホルイニ川上流に位置している。テレボヴリからだど、北北東方向へ 81km ほど進んだところにある。上注 208 も参照。

403) 「クレミヤネツ」(Кремянець) の城砦は、現在のウクライナ・テルノーピリ州クレメネツ市(Кременець)に相当し、ティホムリからだど、北西へ 42km ほど進んだ場所にある。ここは旧石器時代から人が居住し、そこで出土するギリシア・ローマ貨幣はこの地域の住民が古代にドニエブル川流域の住民と交易をおこなっていたことを示している。1261 年に破壊されるまで、ハンガリー、ポーランド、タタールの攻囲に耐え、この地方の城砦ではもっとも強固なものだったという [Котляр 2005: C.214]。

404) ガーリチの高官貴族ステイスラフは、ムスチスラフ公 [J51] の第二次ガーリチ公支配の始まり (1221 年) から 1227 年のこの時点にいたるまで、ズヴェニゴロドに領地を与えられて、ムスチスラフに仕えていたことがわかる (上注 312 参照)。

の心において嘘偽りはありません」⁴⁰⁵⁾。

そこから〔ハンガリー〕王はズヴェニゴロド⁴⁰⁶⁾ (Звенигород) へやって来た。ムスチスラフ [J51] はガーリチ〔の城市〕を出陣した。ハンガリー人はかれ〔ムスチスラフ〕に対抗するために、王の陣営を出て進んだ。ムスチスラフ [J51] はかれら〔ハンガリー人〕と戦い、かれらに勝利した。そして、かれらを王の陣営まで追撃して、かれらを斬り殺した。そのとき、〔ハンガリー〕王の軍司令官マルティニシ (Маргиниша) が殺された。王は大いに動揺して、慌ただしくこの〔ガーリチの〕地から立ち去った。

【ムスチスラフ [J51] とダニール [I111] 兄弟は、ハンガリー王追撃途上のゴロドクで会合する：1227 年】

ダニール [I111] は兄弟のヴァシリコ [I112] とともにゴロドク (Городок) のムスチスラフ [J51] のもとにやって来た⁴⁰⁷⁾。グレーブ⁴⁰⁸⁾ も二人に同行していた。かれら〔ダニールとヴァシリコ〕は言った。「公〔ムスチスラフ [J51]〕よ。〔ハンガリー〕王を討つべく進軍せよ。〔王は〕そなたに恐れをなして〔撤退の〕行軍している⁴⁰⁹⁾」。

【ハンガリー王は撤退中に病気になる。ガーリチ貴族スディスラフの裏切り：1227 年】

スディスラフはかれ〔ムスチスラフ [J51]〕の邪魔をした。かれ〔スディスラフ〕はその心の中に策略を持っており、〔ハンガリー〕王を破滅させることを望まず、かれ〔ハンガリー王〕に大いなる期待をかけていたからである。〔ハンガリー〕王は衰弱していた。

405) このスディスラフの使節団は最高レベルのもので、事態の推移を見るとムスチスラフ [J51] は援軍を命ずる (注 407 参照) と同時に、ガーリチ遠征のハンガリー軍には、レシエク配下のパコスラフが援軍として加わっていたことから、ポーランドとハンガリーに身を置いていたことのあるダニールの裏切りを恐れたのである。

406) ハンガリー王アンドラーシュ二世はズヴェニゴロド近郊に本営を置いて、ガーリチ=ヴォルィニ地方東部諸城市への遠征を行い、またこの陣営へと帰還したのである。

407) 「ゴロドク」については上注 255 参照。ハンガリー王撤退の経路にあり、ムスチスラフ [J51] はここまで追撃したと考えられる。ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はムスチスラフへの援軍を組織して、ゴロドクへやって来たのである。

408) これは、ダニールの側近貴族グレーブ・ゼレメエヴィチ (Глѣб Зеремѣвич) (上注 266) を指している (下注 414)。援軍の部隊を指揮していたのだろう。

409) 「そなたに恐れをなして行軍」はイパーチイ写本、フレーブニコフ系写本とも по лохти ходить で、諸注では Лохти を地名とする解釈 (БЛДР-5、英訳、底本索引など) がなされているが、いずれの注もガーリチ地方の地名として特定できていない。ウクライナ語訳ではこれを полог ти ходять と分綴して「恐れる」と解釈している [Літопис руський, 1989: С. 383, прим. 7]。ここでは、この読みを採用した。

【ハンガリーと同盟したポーランド大公レシェクは援軍のための遠征をするが、ダニール兄弟軍に阻止され、病を得て撤退する：1227年】

そのとき、レシェクは援軍に向かっていた。ダニール [I111] はかれ〔レシェク〕に対して、〔ハンガリー〕王を支援しないようにと言った。しかしかれ〔レシェク〕はますます強く〔援軍を〕望むようになった。

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] は、【750】自分たちの家来〔の部隊〕をブグ川⁴¹⁰⁾方面へ派遣して、かれ〔レシェク〕が来ることを阻止した。かれ〔レシェク〕はそこ〔ブグ川〕から自分の地へと引き返した。かれ〔レシェク〕は行軍中に衰弱したからである⁴¹¹⁾。

【イジャスラフとジロスラフもハンガリー王の撤退に同行する：1227年】

ハンガリー王〔の軍〕はハンガリーへと向かっていた。その時、イジャスラフ [C43211] は、欺瞞的なジロスラフとともに⁴¹²⁾、かれ〔ハンガリー王〕に追い付いて、二人はかれ〔王〕とともにハンガリーへ向かった。

【ガーリチ人によるダニールへの公座移譲の動き、ガーリチ貴族たちはムスチスラフ [J51] に王子への譲渡を唆す：1227年】

その後、スティスラフはムスチスラフ [J51] を欺いて、かれにこう言った。「公よ、婚約したあなたの娘を王子〔アンドラーシュ〕と結婚させ⁴¹³⁾、かれ〔王子〕にガーリチを与えよ。あなたは自分で〔ガーリチを〕統治できず、貴族たちもあなたを望んでいないのだから」。

かれ〔ムスチスラフ [J51]〕は王子に〔ガーリチを〕与えたくはなく、むしろダニール [I111] に与えたかった。〔しかし〕グレーブ・ゼレメエヴィチ⁴¹⁴⁾とスティスラフは、かれ〔ムスチスラフ〕がダニール [I111] に〔ガーリチを〕与えることを咎めて、かれ〔ムスチスラフ〕にこう言った。「王

410) イパーチイ写本では брары (兄弟のもとへ)、フレーブニコフ系写本では бory (神のもとへ) となっているがいずれも意味が通らない。イパーチイ写本に Бурь という後代の訂正があり、「〔西〕ブグ川方面へ」と解されることから、この読みを採用した。なお、西ブグ川のどの地点であるかは分からないが、レシェク一世はマゾフシャ方面から西ブグ川を遡る方向で、ハンガリー王への援軍に向かったと考えられる。

411) レシェク一世はこの遠征からまもなく 1227 年 11 月に宮廷闘争の結果、暗殺されている。

412) この「イジャスラフ」については上注 393 を参照。テレボヴリに留まることがもはや危険になって、反ムスチスラフ [J51] のイジャスラフ [C43211] はジロスラフとともに、ハンガリーへ亡命したのである（上注 401 を参照）。

413) 1221 年頃に行われたムスチスラフ [J51] の娘マリアとハンガリー王子アンドラーシュの婚約のことを指している（上注 395 参照）。

414) グレーブについては上注 408 を参照。ムスチスラフ [J51] 側近のガーリチ貴族だが、ダニール [I111] がガーリチ公になった場合の貴族たちに対する弾圧を危惧したのであろう。

子に〔ガーリチを〕与えたとしても、そなたが望むときに、かれ〔王子〕から取りあげることができません。しかし、ダニール [I111] に与えたなら、ガーリチは永遠にあなたのものではなくなります」。

〔なぜならば〕ガーリチ人はダニール [I111] 〔が公となることを〕望んでいたからである。かれら〔ガーリチ人〕は、そこ〔ガーリチ〕から、交渉をするために〔ヴラジミルのダニールのもとへ〕使者を派遣したのだった。

【ムスチスラフ [J51] はハンガリー王子にガーリチを譲渡し、自分はポニジエからトルチェスクへと隠棲する：1227/1228 年】

〔結局、〕ムスチスラフ [J51] はガーリチをアンドラーシュ王子に与え、自分はポニジエ⁴¹⁵⁾ (Пони́зье) を占領した。そして、そこからかれ〔ムスチスラフ [J51]〕はトルチェスク⁴¹⁶⁾ (Торы́цкий) へと向かった⁴¹⁷⁾。

【ルツク公ムスチスラフ無言公 [I24] およびその息子イワンの死。ヤロスラフ [I1221] はルツクを奪取する。チェルトリスクはピンスク人が奪取する：1227 年末】

ムスチスラフ無言公 [I24] は自分の父の地をダニール [I111] 公に与えた⁴¹⁸⁾。そして、自分の

415) この「ポニジエ」(Пони́зье)は、城市ガーリチから見た「下流地域」という意味を持ち、ドニエストル川中流域と南ブグ川に挟まれた高原地帯を指している。歴史的な「ポドリエ」(Подолье)地方にほぼ一致している。

416) 「トルチェスク」は、「トルチェスク」(Торческ)は、トルチェスキイ(Торчы́ский)ともいい、ロシ川左岸支流のゴロフヴァトカ川(Горхуватка)河岸に位置する。キエフから南方へ80kmほど離れており、現在のシャリキウ村(Шаркі́в)に相当する。当時は、ムスチスラフにとって、ルーシの地における拠点都市だった(上注300参照)。

417) このムスチスラフ [J51] によるハンガリー王子へのガーリチ公座譲渡については、ヤン・ドゥウゴシユ『年代記』の1218年の項で「ハンガリー王アンドラーシュの息子カールマンがハンガリー人の大軍を率いてルーシに到来した。ガーリチ人とムスチスラフ・ムスチスラヴィチ公 [J51] は大いなる名誉をもって受け入れた。ムスチスラフ公 [J51] は、かれの父アンドラーシュ王と結んだ協定によって、ガーリチの公領と内城を引き渡し、そこから立ち去ると、トルチェスクへと行った」[Щавелева 2004: С. 207, 360]と対応する内容が記されている。ただし、「カールマン王子」は誤りで、本年代記の「アンドラーシュ王子」が正しい。

418) ムスチスラフ無言公 [I24] が相続した「父の地」(отчина)とは、ヴォルィニ地方の東部、すなわちルチェスク(ルツク)、チェルトリスク(下注422)を初めとするスティル川(Стыр)流域およびベレンブニツァなどゴリニ(Горы́нь)川流域の諸城市を指している。当時、ヴォルィニ地方西部に公座を持っていたダニール兄弟とは、実質的にヴォルィニ公領を二分して支配していた。

息子イワン [I241] を〔ダニールに〕委ねた⁴¹⁹⁾。ところが、イワン⁴²⁰⁾ [I241] は死んだ。

そして、ルチェスク (Луческ) はヤロスラフ〔・イングヴァレヴィチ〕⁴²¹⁾ [I221] が奪取し、チェルトリスク (Черторыск) はピンスク人⁴²²⁾ が〔奪取した〕。

6735 [1227] 年

われらは証言することにしよう。無数の戦争を、大いなる難事を、頻繁なる軍事行動を、多くの騒乱を、頻繁なる蜂起を、多くの騒動を。なぜなら、若い時から、〔ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] の〕二人には平安がなかったのだから⁴²³⁾。【751】

【ダニールのルチェスク近郊の修道院参拝。かれはルチェスクを奪取する：1227 年末】

ヤロスラフ [I221] はルチェスクの〔公座に〕座したとき、ダニール [I111] は、ジディチン (Жидичин) へ、聖ニコラオス (Святой Никола) に拝礼し、祈るために出かけた⁴²⁴⁾。ヤロスラフ

419) 以下の記述から推察されるように、「与え」(дати)、「委ね」(поручити) たのはムスチスラフ無言公 [I24] が死に直面して遺言したからである。かれの死については他の資料に言及はなく、カルカ川の合戦以降この時期、すなわち 1223 年後半～1227 年初めに死去したと推定する他はない [Домбровский 2015: С. 296]。

420) 無言公 [I24] の息子イワン [I1241] は、1227 年の後半に、父親の死後ほどなくして早世したと考えられる [Домбровский 2015: С. 363]。領地の相続者が途絶えたために紛争が起きたのである。

421) 「ヤロスラフ・イングヴァレヴィチ」[I221] はムスチスラフ無言公の甥にあたり、ルチェスクは 1180 年から 1220 年頃に没するまで父のイングヴァル [I122] の領地で [Войтович 2006: С. 490]、自らも身を置いていた城市だったことから (上注 67, 76, 133 参照)、旧領の回復を試み、成功したのである。

422) 「チェルトリスク」(Черторыск) は、プリピャチ川右岸支流のスティリ川 (Стырь) の中流域の城市。現在のヴォルィニ州スタルィ・チョルトリスク村 (Старий Чортгорийск) に相当する。当時は、ルチェスクと同様に東ヴォルィニの公領に属し、ムスチスラフ無言公 [I24] が相続した「父の地」に含まれていた (上注 418)。

この城市を「ピンスク人 [が奪取した]」(прия <...> пиняце) とあるが、当時ピンスクは、ウラジーミル・スヴァトポルコヴィチ [В32131] (上注 66) が支配していたと推定される。ピンスク公がムスチスラフ [I24] の相続領地を「奪った」ことについては、かれの姉妹がウラジーミル [В32131] の母親であり、それゆえ母方の甥としての権利を主張したという推定もなされている (上注 69) [Домбровский 2015: С. 343, 362. прим.1545]。

423) この段落の詠嘆的な文言は、編集の際の年代記編者の挿入で、ここに編集上の切れ目があることが想定できる [Котляр 2005: С. 217]。

424) 「ジディチン」(Жидичин) は Жидичев, Зудчев とも表記され、ストリ (Стырь) 川右岸のルチェスクの中心から北に 7km ほど離れた場所。現在のジディチン村 (Жидичин) に相当する。ここに、聖ニコラオス (ニコライ) に献堂した修道院 (現在も男子修道院として存続) があり、創建当初からニコラオスの聖物が保管されていたようである [Православная энциклопедия Т. 19, С. 182-184: ЖИДИЧИНСКИЙ ВО ИМЯ СЯТИТЕЛЯ НИКОЛАЯ ЧУДОТВОРЦА МУЖСКОЙ МОНАСТЫРЬ]。おそらくダニール [I111] は 12 月 6 日の聖ニコライの祭日に、ウラジミルからやって来て聖物に参拝したのだろう。

[I221] はかれ〔ダニール〕をルチェスクへ呼んだ。するとかれ〔ダニール〕の貴族たちが、かれ〔ダニール〕に言った。「ルチェスクを奪取しなさい。そこでかれらの公〔ヤロスラフ [I122]〕を捕まえなさい」。かれ〔ダニール〕は答えて言った。「〔自分は〕ここに聖ニコラオスに祈りを捧げるために来たのだ。わしにそんなことはできない」。

かれ〔ダニール〕はヴラジミルへと戻ると、そこから軍隊を集め、〔ダニールとヴァシリコの〕二人はかれ〔ヤロスラフ [I122]〕を討伐すべく、アンドレイ、ヴァチェスラフ、ガヴリール、イヴァンを派遣した⁴²⁵⁾。

かれ〔ヤロスラフ [I122]〕は〔ルチェスクの〕城市に入ろうとしたところを、かれの妻ともども捕まった。アレクセイ・オレシコ (Олексия Орѣшьк) によって捕まったのだった⁴²⁶⁾。かれ〔アレクセイ〕が乗った馬は駿馬で、追い付くと、かれ〔ヤロスラフ [I122]〕を城市に逃げ込む前に捕まえた。ルチェスク人は籠城した。翌日に、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] が〔ルチェスクに〕到来すると、ルチェスク人は降伏した。

兄〔ダニール [I111]〕はヴァシリコ [I112] にルチェスクとペレスチエを与えた⁴²⁷⁾。ペレスチエはすでに以前からかれ〔ヴァシリコ〕に与えられていた⁴²⁸⁾。

【ヤトヴァグ人のペレスチエ周辺への来襲、ダニールとヴァシリコが撃退する：1227/1228 年冬】

ヤトヴァグ人⁴²⁹⁾ がペレスチエの周辺を掠奪した。二人〔ダニールとヴァシリコ〕は〔ヤトヴァグ人を〕ヴラジミルから〔出撃して〕追いかけた。二人、すなわちシュートル・モンドウニチ (Монѣдуничъ Шутр) とステグート・ゼブロヴィチ (Стегутъ Зѣбровичъ)⁴³⁰⁾ が〔ダニールたちの〕部隊を襲撃した。シュートルはダニールとヴァチェスラフ⁴³¹⁾ によって殺された。ステグー

425) ここに列挙されている人名「アンドレイ、ヴァチェスラフ、ガヴリール、イヴァン」はスラブ系の名だが父称を伴っていない。おそらく、ダニール [I111] 配下の身分の高くない部隊指揮官を指しているのだろう。

426) 「アレクセイ・オレシコ」(Олексия Орѣшьк) はダニール [I111] 配下の軍司令官。

427) これによって、ヴォルィニ地方に関しては、西半分をダニール [I111] が、東半分をヴァシリコ [I112] が支配するという、一族によるヴォルィニ公領支配が固まった。本格的なガーリチ進出の準備ができたわけである。

428) ヴァシリコ [I112] が年少の頃からペレスチエを領有していたことについては上注 73 を参照。

429) ヤトヴァグ人については上注 82 を参照。

430) 「シュートル・モンドウニチ」(Монѣдуничъ Шутр) と「ステグート・ゼブロヴィチ」(Стегутъ Зѣбровичъ) は名と父称が併記されていることから、ヤトヴァグ人の部族長・軍司令官だろう。

431) この「ヴァチェスラフ」は、上注 425 で言及されている指揮官ヴァチェスラフと同一人物だろう。

トはシェルヴ⁴³²⁾ (Шелв) によって殺された。

ヤトヴァグ人が逃げ出したので、ダニール [I111] はかれらを追撃して、ネブル⁴³³⁾ (Небр) に四創の傷を負わせたが、[ネブルの槍の] 柄がかれ [ダニール] の手から槍を打ち落とした [ためとどめを刺せなかった]。ヴァシリコ [I112] は、かれ [ネブル] を追いかけると、「そなたの兄は後ろで戦っている」という大きな叫び声が [聞こえた]。かれ [ヴァシリコ] は足を止め、向きを変えると、兄の救援に向かった。それにより、かれ [ネブル] は逃げのびた。他の [ヤトヴァグ人] たちも散り散りに逃げた。

【ダニール [I111] はチェルトリスク奪取の計画についてムスチスラフ [J51] と相談し、ムスチスラフはガーリチをダニールに与えなかったことを悔やむ：1228年3月】

【752】 これはここまでとして、われらはもとの話に戻ろう。

ダニール [I111] はデミヤン⁴³⁴⁾ を自分の岳父 [ムスチスラフ [J51]] のもとに派遣して、かれに言った。「ピンスク人にチェルトリスクを支配させるべきではありません。わたしはかれら [ピンスク人] を我慢できない」。デミヤンは [これについて] かれ [ムスチスラフ] に話をした。[ムスチスラフは言った。]「息子よ、そなたにガーリチを与えず、異族の者 [ハンガリー人のアンドラーシュ王子] に与えたことについて、わしは間違っていた。策略家スディスラフの助言に乗せられた、あいつはわしを欺いたのだ。もし神が望まれるのなら、われら二人はかれ [アンドラーシュ王子] を討伐しようではないか。わしは、ポロヴェツ人を [遠征に] 引き入れよう、そなたは自分の [軍隊を連れて来い]。もし神がかれ [アンドラーシュ王子] をわれら二人に与えるなら、そなたはガーリチを取れ、わしはポニジエ (Понизье) を取ろう。神はそなたを助けるだろう。チェルトリスクについては、そなたの言い分が正しい」。

【ダニール [I111] とムスチスラフ [J51] はピンスク人に占拠されているチェルトリスクを攻めて奪取する：1228年3月27日】

デミヤンは聖大土曜日⁴³⁵⁾ に [ヴラジミルのダニールのもとに] 戻って来た。翌日の復活祭にダニール [I111] とヴァシリコ [I112] はチェルトリスクにやって来て、その日の深夜を過ぎた月曜日に [チェルトリスクの] 城市を包囲した。そのとき、ダニール [I111] の馬に城内から

432) 「シェルヴ」(Шелв) はガーリチの軍司令官で、このときはダニール [I111] に仕えていた。1231年、1249年の記事にも言及されている。

433) 「ネブル」(Небр) は描き方から見て、遠征を指揮していたヤトヴァグ人の首長だろう。

434) 「デミアン」はダニール公の側近貴族 (上注 127 参照)

435) 正教の祭日で、受難週間の第6日目の土曜日指し、復活大祭の前日に相当する。この事件は1228年の出来事と推定されることから、復活大祭は3月26日にあたり。聖大土曜日は3月25日である。

射られた矢が当たった。

その朝には、二人〔ダニールとヴァシリコ〕は城市の周りを馬で巡った。ミロスラフとデミヤンは言った。「神はそなたたち二人〔ダニールとヴァシリコ〕の手に敵どもを引き渡した」。ダニールは城内への突撃を命じた。そして、かれらの城市を占領し、かれらの公⁴³⁶⁾を捕虜に獲った。

【ムスチスラフ武運公 [J51] の死：1228 年】

その後、大いなる武運に優れた公ムスチスラフ [J51] は死んだ⁴³⁷⁾。かれ〔ムスチスラフ〕自分の息子ダニール [I111] に会うことを強く欲した。グレーブ・ゼレメエヴィチ⁴³⁸⁾ は嫉みからられて、かれ〔ダニール〕に会わせることを許さなかった。かれ〔ムスチスラフ〕は、自分の家と子供たちをかれ〔ダニール〕の手に委ねる⁴³⁹⁾ ことを望んだ。なぜなら、自分の心の中にかれ〔ダニール〕に対する大いなる親愛を持っていたからである。【753】

【ダニール兄弟はヤロスラフを解放するが、辺境城市へと追いやる：1228 年】

そして、その後二人〔ダニールとヴァシリコ〕はヤロスラフ [I122] を解放し⁴⁴⁰⁾、かれにべ

436) この「公」（イパーチイ写本は単数形，フレーブニコフ系写本は複数形）はおそらく複数で，ピンスク公ロスチスラフ [B32132] の息子たちがダニール [I111] 軍によって捕虜にされたのである（下注 446 を参照）。

437) ムスチスラフ [J51] の死については、『ラヴレンチイ年代記』 6736(1228) 年の記事に「この年，ムスチスラフ・ムスチスラヴィチ [J51] が逝去した。修道士となり，スヒマを受戒した」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 450] と簡単な記述があり，没年については 1228 年と確認できる。また，ヤン・ドゥウゴシュ『年代記』ではムスチスラフ [J51] は，ガーリチを立ち去った翌年に「地上の生をあとにして，自らが建設したキエフの聖十字架教会に埋葬された」としている [Щавелева 2004: С. 207, 360]。

438) 「グレーブ」はムスチスラフ [J51] に仕えていた高位の貴族で軍司令官。上注 200, 266 を参照。ムスチスラフ [J51] は遠地のトルチェスクで没したはずであり，生前にダニールが会いに行ったというのはあまり現実的ではない。これは，グレーブの「裏切り」を強調するための創作的エピソードだろう。[Котляр 2005: С. 218] も参照。

439) 「自分の家と子供たちを (...) 委ねる」(поручити домъ свой и дѣти) とは，現実の事態について言っているのではなく（ムスチスラフ [J51] 息子たちは成人し，娘たちは政略結婚に出されている），ダニール [I11] が，ガーリチを相続する正統な継承者であることを強調するための年代記記者の手によるエピソードではないか。

440) ヤロスラフ [I122] は，ダニール [I111] の軍司令官によりルチェスクの城門で捕虜になり（上注 426），おそらくヴラジミルで虜囚の生活を送っていた。

レミリ⁴⁴¹⁾ (Перемиль) を与えた。その後、メジボジエ⁴⁴²⁾ (Межибожие) を与えた。

6736 [1228] 年

【キエフ府主教キリル一世が和議の仲介のために到来する】

いとも至福にして聖なる府主教キリル⁴⁴³⁾ (Кириль) が和解のためにやって来たが、それはできなかつた⁴⁴⁴⁾。

【ピンスク公ロスチスラフがダニール等を中傷する：1228 年後半～1229 年初め】

その後、ピンスクの〔公〕ロスチスラフ⁴⁴⁵⁾ [B32132] は中傷を止めようとしなかつた。なぜなら、

441) 「ペレミリ」(Перемиль) はストイリ(Стырь)川上流に位置する城市で、ヴラジミルからだとな東方向へ78kmほど進んだところにある(上注209, 384参照)。ここは、かつてヤロスラフ [P122] の兄弟アレクサンドル [P121] の領地だったが、ダニール [P11] がこれを取りあげている(上注210参照)。ダニールがこの城市をヤロスラフに与えた理由として、ヤロスラフの親族の故地だったこともあげられるだろう。

442) 「メジボジエ」(Межибожие) は、南ブグ川上流左岸にある城市。現在はフメリニツキ市の近くにあるメジビジ(Меджибіж)村に相当し、当時はガーリチ公領の東の辺地でキエフ公領との境界地帯にあった。前注のペレミリから南東へ192kmも離れている。ヤロスラフ [P122] は何らかの理由で、ペレミリを取りあげられ、より辺境の城市へ追いやられたことになる。ただし、1238年の事件の記事から判断して、ヤロスラフ [P122] はこの「国替え」に不遇は感じていなかったようである。

443) キエフ府主教キリル一世(Кирилл I) はギリシア人で、コンスタンティノポリスで叙任されたあとキエフに着任し、1225年1月6日に正式に府主教座に就いた。かれはキエフ公ウラジーミル [J22] の意を受けてルーシ諸公の争いの調停役として働き、それによって尊敬を受けていた。1233年に没している。[Поппэ 1996: С. 464-467][Котляр 2005: С. 219]。

444) この文言の文脈ははっきりしないが、府主教キリル一世が、以下に述べられているキエフ公ウラジーミル [J22] とダニール [P11] 兄弟との間の紛争の解決に努力したがうまくいかず、結局は前者の遠征に至ったと理解すべきか。あるいはより一般的にキリルは諸公の融和のためコンスタンティノポリスからキエフの府主教座に「やって来た」(приїхал)(前注参照)が、その「和解のため」(мира сотворити)の努力にもかかわらず、諸公は内争を止めなかつたという解釈も可能である。

445) このピンスク公「ロスチスラフ・スヴァトボルコヴィチ」[B32132] は、ピンスク公ウラジーミル・スヴァトボルコヴィチ [B32131] (上注66) の兄弟と推定される。

かれの子供たちが捕らえられていたからである⁴⁴⁶⁾。

【キエフ公ウラジーミルによる対ダニール遠征。カメネツを包囲する：1229/1230 年冬】

キエフの〔公〕ウラジーミル [J22] は軍兵を集めた。チェルニゴフの〔公〕ミハイル [G41]〔も軍兵を集めた〕。〈かれ〔ダニール [I111]〕の父〔ロマン [I11]〕は、わしの父〔リューリク [J2]〕を剃髪したのだから〉と〔ウラジーミル [J22] は考えて〕、心の中に大なる恐れを抱いたからである⁴⁴⁷⁾。

ウラジーミル [J22] は、コチャン⁴⁴⁸⁾ (Котьянь) とすべてのポロヴェツ人を乗馬させた〔遠征させた〕。〔ウラジーミル配下の軍勢は〕カメネツ⁴⁴⁹⁾ (Каменць) に到来した。ウラジーミル [J22]

446) ピンスク公ロスチスラフ [B32132] の「子供たちが捕らえられていたから」(бъша бо дѣти его ныманы) とは、ダニールがチェルトリスクを奪取したとき、この地に代官として派遣していたロスチスラフの息子たちが、ダニールの手によって捕虜になったこと(上注 436)を指している。「中傷した」(клевета) とは、ロスチスラフが姻戚であり公領としても関係の深い、キエフ公ウラジーミル [J22] に対して、ダニールのやり方の非を訴えて救援を求めたことを指している。これを受けて、ウラジーミルは以下の遠征を組織したのだろう。なお、ロスチスラフの父方の叔母は、リューリク [J2] の妻であることから〔イパーチイ年代記 (8) : 注 353, 501〕, ロスチスラフ [B32132] とウラジーミル [J22] は従兄弟同士の関係になる。

447) この段落の原文は文が断片的で解釈が難しい。「かれの父は、わしの父を剃髪した」(отець его постригль отца моего) については、『ラヴレンチイ年代記』 6714(1206) 年記事に「リューリク [J2] は、自分を剃髪させたロマン [I11] が殺されたことを聞くと、修道衣を脱ぎ捨てて、キエフ〔の公座〕に座した」[ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 425-426] を参照) とあり、ロマン・ムスチスラヴィチ [I11] がリューリク・ロスチスラヴィチ [J2] に対して、公としての活動を封じて、キエフ公位に復帰できなくするために強制的に剃髪して修道士とした事件について述べられており、このことを指していることは明らかである。これから逆算して、原文で明示されていない主語や補語の内容を訳文のように補った。なおコトリアルは、剃髪事件の主体と相手を年代記記者が誤解したと解釈している [Котляр 2005: С. 220]。

なおこの段落の全体としての内容は、ウラジーミル [J22] によるダニール [I111] 討伐遠征の理由を述べたもので、父親の世代に起こったことが繰り返されるなら、自分のキエフ公としての地位が危うくなると「大なる恐れを抱いて」(ему боязнь велика)、ウラジーミル [J22] は遠征を決心した、と解釈すべきだろう。

448) ポロヴェツ人の首長コチャンについては上注 34 を参照。かれは、1205 年のリューリク [J2] (ウラジーミル [J22] の父で当時キエフ公) によるガーリチ討伐遠征の際にも遠征軍に加わっており(上注 36 参照)、リューリク一族とは古くから同盟関係にあった。

449) 「カメネツ」の場所については上注 179 を参照。西ヴォルィニ地方の戦略上重要な城市で、ダニール [I111] の代官がこの城市を守っていたと考えられる。他方、キエフに集合したウラジーミル [J22] 指揮下の遠征軍は、ドニエプル川からブリビャチ川に入り、途中トゥーロフ、ピンスクで兵員を増やして、川沿いにカメネツへと進軍したのだろう。

はすべての諸公、クルスク人⁴⁵⁰⁾、ピンスク人、ノヴゴロド人⁴⁵¹⁾、トゥーロフ人とともにカメネツを包囲した。

【ダニールは降伏をよそおって和議を引き延ばし、自らは援軍を求めてポーランドに行く。他方、ダニールはコチャンの懐柔に成功し、ポロヴェツ人はガーリチを掠奪して去る。遠征軍は戦果をあげずに帰郷する：1229年】

ダニール [I111] はかれら〔ウラジーミル [J22] 指揮下のカメネツ包囲軍〕と和を結ぶふりをして、かれらを欺くと、援軍を求めてポーランド人のもとへ行った⁴⁵²⁾。他方で、〔ダニール [I111] は〕自分の〔部下の〕パーヴェル⁴⁵³⁾をコチャンのもとへ使者として派遣して、こう言った。「父よ⁴⁵⁴⁾、この戦争をやめて下さい。親愛をもってわたしを御許に受け入れて下さい」。

かれ〔コチャン〕は遠征したが、ガーリチの地を掠奪すると⁴⁵⁵⁾、ポロヴェツの地へと〔去って〕行った。そして、かれら〔ウラジーミル [J22] の遠征軍〕のもとに戻ってくることはなかった。

王子〔アンドラーシュ〕はガーリチ〔の城市〕において、ステイスラフはかれ〔王子〕とともにいて、ウラジーミル [J22] およびミハイル [G41] と和を結んでいた。〔しかし〕そのことによって〔ウラジーミル [J22] とミハイルは [G41] にとって〕得ることはなく、〔かれらは〕撤退した。

【ダニールとヴァシリコは、ポーランド人の援軍を得て、反撃のキエフ遠征を試みる：1229年】

ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] は、多くのポーランド人を集めると、**[754]** 軍司令官

450) 「クルスク人」とはチェルニゴフ公ミハイル [G41] が動員して、引き連れてきた軍兵だろう。

451) チェルニゴフ公ミハイル [G41] は、『ノヴゴロド第一年代記』によると、1229年の夏～秋に、ノヴゴロドの公座を息子ロスチスラフ [G411] に譲って、ノヴゴロドからチェルニゴフに戻っている。このときノヴゴロドの主要な高官たちとその配下の者たちを引き連れていた ([НПЛ: С. 68, 274] 参照) ことから、これらの「ノヴゴロド人」が遠征に動員されたのだろう。なお、この『ノヴゴロド第一年代記』の年紀から判断して、ウラジーミル [J22] のヴォルィニ地方へダニール討伐遠征は、ミハイル [G41] のチェルニゴフへの帰還の直後、すなわち 1229/1230 年冬に行われたと考えられる。

452) 「かれらと和を結ぶふりをして」(творящуся мир сотворити с ними) とは、降伏してカメネツの城市を明け渡す交渉を引き延ばして、実際は時間稼ぎだったということ。ダニールはポーランドにおける自分たちの「支持者」(上注 222) であるパコスラフのもとに援軍を求めて行ったのである (下注 456)。

453) 「パーヴェル」はデミアンやミロスラフと同様、ダニール側近の貴族・軍司令官。

454) この「父よ」(отче) は、親族序列における上位者に対する敬称。コチャンは亡くなったムスチスラフ武運公 [J51] の岳父にあたり、ダニール [I111] はムスチスラフ公の婿にあたることから、コチャンはダニールにとって当然「父」になる。

455) ヴォルィニのダニール [I111] を討伐するための遠征軍に加わっていたコチャン指揮下のポロヴェツ人は、ダニールの懐柔策によって、ヴォルィニを掠奪することなく、ダニールの敵手アンドラーシュ王子が支配するガーリチの地を掠奪したのである。

パコスラフ⁴⁵⁶⁾とともにキエフへ向けて進軍した。アレクサンドル⁴⁵⁷⁾[I121](Олександрo)も二人とともに〔進軍した〕。かれら〔ダニールとヴァシリコ〕は、ウラジーミル [J22] とミハイル [G41] が派遣した〕使者と会合した。それは、ヴォロティスラフ・ペトロヴィチ (Воротислав Петрович) とユーリイ・トリグネヴィチ⁴⁵⁸⁾ (Юрьи Толигнѣвич) で、かれらは和を結ぶことを望んでいた。和は結ばれた。そして、ポーランド人⁴⁵⁹⁾ は郷国へ帰った。

6737 [1229] 年

【レシェク大公の暗殺：1227 年 11 月】

ポーランド大公レシェクが殺された。会議〔セイム〕において、シフィエントペウク⁴⁶⁰⁾ (Святополк), ヴワディスワフ・オドヴィチ⁴⁶¹⁾ (Одовичъ Володислав) の手で、不忠の貴族たちの助言によって殺されたのである。

【コンラートはダニールとヴァシリコに援軍を要請する：1229 年】

自分の兄弟〔レシェク一世〕の死後、コンラートはダニール [I111] とヴァシリコ [I112] に大いなる親愛を示し、二人に対して自分を助けるように要請した⁴⁶²⁾。ふたりは、かれ〔コンラート〕

456) 「パコスラフ」については上注 400 および 222 を参照。

457) このベルズ公「アレクサンドル」[I121] は、ムスチスラフ武運公 [J51] の慈悲によってベルズの領地を辛うじて保持しており (上注 380), ムスチスラフの死後は、ダニール [I111] 兄弟の臣下のような位置にあったのだろう。

458) 「ヴォロティスラフ・ペトロヴィチ」(Воротислав Петрович) はキエフ公ウラジーミル [J22] が派遣した使者で、「ユーリイ・トリグネヴィチ」(Юрьи Толигнѣвич) はチェルニゴフ公ミハイル [G41] の使者と解される。二人とも父称とともに記名されていることから、公たちの側近貴族だろう。

459) 軍司令官パコスラフが引き連れてきた、ダニールへの援軍のポーランド人軍兵のこと。

460) 「シフィエントペウク」(Святополк) は、ポメリアのグダニスク公 (在位 1220 年 ~ 1266 年) のシフィエントペウク二世偉大公 (Świętopolk II Wielki; Swantopolk II) のこと。シフィエントペウクは、ヴワディスワフ・オドニツ (次注) の義弟にあたり、1227 年 11 月にゴンサヴァで開かれたポーランド諸公の会議 (セイム) で、ヴワディスワフの使囀によって、ポーランド大公レシェク一世を襲撃して殺害した。

461) 「ヴワディスワフ」は、ミェシュコ三世 (老公) の孫で、1227 年からこの時点までポーランド大公で、同時にヴィエルコポルスカ公だった「ヴワディスワフ・オドニツ」(Władysław Odonic) を指している。1227 年のレシェク一世の殺害については、かれが裏で糸を引いていたとされている (前注)。

462) レシェクの死後、マゾフシェ公コンラートはマウォポルスカの公位を要求し、1229 年にクラクフの公座を占めていたヘンリク一世顎髭公を破ってこれを捕虜とした。ヴワディスワフ三世細足公 (次注) はこの政争に乗じてポーランド大公としてクラクフの公座に就いたため、コンラートはかれを討ってクラクフの公座とポーランド大公位を得るべく、ダニール等に援軍を要請したのである。

の援軍として、老ヴワディスワフ公⁴⁶³⁾を討伐すべく進軍した。

ふたりは、自分たち自身は戦争のために遠征し、ベレスチエにはピンスク〔公の〕ウラジーミル [B32131]⁴⁶⁴⁾、およびウグロフスク人⁴⁶⁵⁾ (угровчаны) とベレスチエ人 (берестьяны) を残した。〔自分たちの〕地をヤトヴァグ人から守るためだった。

【ベレスチエの守備をまかされたウラジーミル [B32131] は、ベレスチエに近づいてきたリトアニア人を皆殺しにする：1229 年】

その頃、リトアニア人はポーランド人を掠奪していた⁴⁶⁶⁾。〔リトアニア人はダニール [I111] 兄弟と〕和が結ばれていると見なしていたのである⁴⁶⁷⁾。〔リトアニア人は〕ベレスチエへ向けてやって来た。しかし、ウラジーミル [B32131] は言った。「お前たちは和が結ばれていると〔見なしているかもしれぬが〕、わしとは和を結んでいるわけではない」。〔ウラジーミルは〕はかれら〔リトアニア人〕を討つべく城市を出ると、すべてのベレスチエ人は、かれら〔リトアニア人〕全員を撃ち殺した⁴⁶⁸⁾。

【ダニールとヴァシリコはコンラート援軍のためにカリシュへ遠征する：1129 年夏】

さて、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] の二人はコンラートのところへ〔援軍として〕

463) 「老ヴワディスワフ公」(Володислав Старый)とは、ヴワディスワフ三世細足公(Władysław III Laskonogi)のこと。1227年にレシェク1世が殺されるとかれはポーランド大公になったが、カリシュ公国を巡る問題や大公位をめぐるコンラートと対立するようになった(前注参照)。かれはここに記されている戦いに敗れて、大公位も廃位された。当時すでに60歳近く、そのために「老公」(Старый)と称されているのだろう。

464) ピンスク公ウラジーミル [B32131] については、上注 66 を参照。

465) 「ウグロフスク」については上注 77 を参照。西ブグ川中流域に位置し、ベレスチエと並んで北西ヴォルィニ地方の主要城市だった。

466) コトリヤールによれば、このリトアニア人たちは、ダニール [I111] 兄弟と敵対しているマウォボルスカ公支配下の「ポーランド人」(ляхы)を掠奪したのであり、ダニール [I111] 兄弟に対する支援の意味があったとしている。リトアニア人たちがベレスチエに向けてやって来たのも、近郊(西ブグ川流域)のポーランド人の力を失わせるためであったという [Котляр 2005: С. 221]。

467) 1219/1220年にリトアニア諸公はヴラジミルに使節を派遣してダニール兄弟と和を結んでおり(上注 284-286 参照)、その時以来のリトアニアとヴォルィニ地方の和平の状態を指している。

468) この、ベレスチエを守っていたウラジーミル [B32131] の行動について、コトリヤールによれば、ウラジーミルはリトアニア諸公とダニール兄弟が和を結んでいたこと(前注)を知らず、リトアニア人のベレスチエへの進軍を侵略と見なして、リトアニア人を返り討ちにしたということになる [Котляр 2005: С. 221]。

やって来た。かれらは協議すると、カリシュ⁴⁶⁹⁾ (Калеш) へ向けて進軍した。そして、ヴェプル⁴⁷⁰⁾ (Вепр) へ夕方到着すると、翌日の明け方に【755】プロスナ川⁴⁷¹⁾ (Пресна) を渡り、〔カリシュの〕城市へと向かった。その日の夜に大雨が降った。かれらは誰も抵抗しないことを知って、掠奪と捕虜の捕獲を始めた。

【援軍に加わっていたルーシ人はカリシュ周辺地を掠奪し、城市攻撃の準備をする】

ルーシ人は、ミリチ⁴⁷²⁾ (Милич) とスタロゴロド⁴⁷³⁾ (Старогород) に到達すると、ヴォロティスラフ⁴⁷⁴⁾ (Воротислав) 周辺の幾つかの村を占領して、多数の捕虜を獲って引き返した⁴⁷⁵⁾。自分たちの陣営に戻ると、どのようにして城市に侵攻して戦ったらよいかについて評議をした。〔コンラート配下の〕ポーランド人は戦おうとしなかったのである。

【ダニールとヴァシリコ軍はカリシュを攻めるが、城市は陥落せず】

翌日、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] は、自分たちの軍兵を連れて、〔カリシュの〕城市へと向かった。ルーシ人戦闘部隊と同盟していたコンラートも、自分の〔配下の〕ポーランド人を行かせようとしたが、かれらは行こうとしなかった。かれら〔ダニールとヴァシリコ〕

469) 「カリシュ」(Калиш) は、現在のポーランド中央部、ヴィエルコポルスカ県南東部のカリシュ (Kalisz) に相当する。当時のヴィエルコポルスカ公ヴワディスワフ三世細足公 (上注 463) の拠点城市のひとつであることから、かれに対抗するコンラートの遠征の目標となったのである。ヴラジミルからだとは西方向に 450km 以上離れており、ダニール兄弟にとっては長駆の遠征だった。

470) 「ヴェプル」(Вепр) は、イパーチイ写本、フレーブニコフ系写本ともに Вепру と表記されているが該当する地名は見当たらない。ここは [БЛДР-5, Котляр 2005] の読みにならって Вепр (ヴェプル) に訂正した。その場合、カリシュ近郊の村の名前に該当する。なおウクライナ語訳はこれを城市ヴァルタ (Варта, Warta) と同定しており、その場合はカリシュから東に 37km ほどの距離にあり、なるほど、遠征の経路に当たり、カリシュまでは半日行程の近さである。

471) 「プロスナ川」(Пресна; Prosna) は、現在のカリシュ市を横断して流れる川。当時のカリシュ城市はこの川の左岸の中州にあった。

472) 「ミリチ」(Милич) は、現在のポーランド、ドルヌイ・シロンスク県ミリチュ市 (Milicz) に相当し、バリチ川 (Barycz) に面している。カリシュからだとは、西南方向へさらに 60km ほど進まなければならない。

473) 「スタロゴロド」(Старогород) は、ウクライナ語訳索引によれば、ポーランドのクロトシン (Krotoszyn) 自治体、オルラ川 (Orla) 河岸のスタリグルト村 (Starygród) に同定されている。カリシュからだとは西へ約 50km ほど行き、ミリチからだとは北へ 25km ほど離れている。

474) 「ヴォロティスラフ」(Воротислав) は、現在のポーランドのヴロツワフ (Wrocław) 市に相当し、ミルチェからだとはさらに 50km ほど南下したところにある。

475) ルーシ人 (русь) とはダニール [I111] とヴァシリコ [I112] が援軍として遠征に引き連れてきた支配地 (城市) の徴集軍兵であり、かれらにとっての遠征の目的、主な利得は物資掠奪と戦争捕虜 (плен) 奴隷の獲得だった。敵が籠城し、大雨による増水ですぐに攻撃できないと見て取ったダニール等配下の援軍は、カリシュの周辺地に対して捕虜捕獲を行ったのである。

二人は〔自ら〕カリシュの城門へ突撃を仕掛け、〔同時に〕ミロスラフ⁴⁷⁶⁾と他の部隊を、城市の背後を〔襲うべく〕派遣した。

〔カリシュの〕城市は水〔濠〕とヤナギやネコヤナギの密林が周囲を取り囲み、かれら〔ダニールとヴァシリコ〕自身はどこで誰が戦っているのか分からなかった。ある部隊が兵を引くと、別の部隊が兵を進め、別の部隊が兵を引くと、ある部隊が兵を進めるありさまだった。〔敵の姿を〕見るができないために、かれら〔ダニールとヴァシリコの軍〕はその日に城市を攻略することはできなかった。

城壁からは石礮が投げつけられ、あたかも大雨のようだった。かれら〔ダニールとヴァシリコの軍兵〕は濠の中に立っていたが、まもなく投げられた石礮〔によってできた〕砂州に立つことになった。跳ね橋と跳ね上げ機⁴⁷⁷⁾は燃やされた。〔防戦側の〕ポーランド人は城門にかけられた火をなんとか消し止めた。

ダニールとヴァシリコは城市の周囲を巡った。【756】射手たちが城壁に向かって射撃を行った。胸壁に立っていた160人の戦士が負傷した。夕方になると、かれら〔ダニールとヴァシリコ〕は自分たちの陣営へと戻った。

【ダニールはカリシュ城市の弱点を攻め、住民は和議を求める。ダニールは使者に扮して住民との和議に加わる】

スタニスラフ・ミクーリチ⁴⁷⁸⁾ (Станислав Микуличь) はこう言った。「われわれが布陣しているところには、水濠も高い土塁もありません」。ダニール [I111] は乗馬すると、自ら城市の視察に出かけ、実際にそのとおりであることを知った。ダニール [I111] はコンラートのもとにやって来ると、かれに言った。「もし最初にわれらがこの場所を見ていたら、城市はすでに占拠されていたでしょう」。コンラートは二人〔ダニールとヴァシリコ〕に、翌朝再び城市を攻撃するよう頼んだ。

翌朝、ダニール [I111] とヴァシリコ [I112] は自分の家来たちを派遣した。かれら〔家来たち〕は布陣すると、城市の周りに組まれた防柵を切り倒しはじめた。城市の住民は城壁から石礮を投げようとせず、請願して言った。「どうか、自分たちのもとに、コンラートがパコスラフ

476) ダニールの側近ミロスラフについては、上注47を参照。

477) 「跳ね上げ機」(жаравець)は城門の前の跳ね橋をテコの原理で跳ね上げる木造の装置のこと。その形から「鶴」意味を持つ言葉で呼ばれている。

478) 「スタニスラフ・ミクーリチ」(Станислав Микуличь)は、ダニール [I111] 兄弟の援軍とともに遠征に参加した貴族。攻城戦では別方面の攻撃部隊を率いていた。

(Пакослав)⁴⁷⁹⁾ とムシチュイ⁴⁸⁰⁾ (Мьстиуи) を「使者として」派遣して下さるように」。パコスラフはダニール [I111] に言った。「そなたも変装して、われらとともに行ってくれ」。ダニール [I111] はそうしなかつたが、弟〔ヴァシリコ〕はかれに言った。「兄弟よ、行って、民会の声を聞くがよい」。コンラートはムシチュイを信頼していなかつたのである⁴⁸¹⁾。ダニール [I111] はパコスラフの兜をかぶると、二人のあとから歩いた。

【カリシュ住民のコンラートへの降伏の言葉とパコスラフの回答】

城壁の上に立つ戦士たちは、かれらに向かって言った。「コンラート大公にこう伝えてくれ。『この城市はあなたのもではなかつたのか。われら戦士はこの城市の中で衰弱している。われらは外来の者ではない、あなたの家来【757】ではないか。あなたの兄弟ではないか。あなたがたは、なぜわれに慈悲を示さないのか。もしルーシ人がわれらを捕虜としたなら、〔あなた〕コンラートにとってどんな栄光がもたらされるのか。もしルーシ人の軍旗が城壁に掲げられるとしたら、これは誰の名誉になのか。ロマン [I11] の二人の息子たち〔ダニールとヴァシリコ〕の〔名誉〕なるのではないか。あなたは、自らの名誉を台無しにしているのだ。今までわれらはあなたの兄弟〔ヴワディスワフ三世細足公〕に仕えてきたが、明日はあなたのもとなろう。ルーシ人に栄光を与えてはならない。この城市を滅ぼしてはならない』」。このように〔住民たちは〕多くの言葉を語った。

パコスラフは言った。「コンラートはそなたたちに喜んで慈悲を示すであろう。ダニール [I111] はわれわれに対して非常に無慈悲である。〔ダニールは〕この城市を攻略せずに撤退することを望んでいない」。それから〔パコスラフは〕大笑いして、言った。「ほら見よ、〔ここにダニール〕自身が立っている。そなたたちは、かれ〔ダニール〕と話をするがよい」。

479) この「パコスラフ」は、パコスラフ・アフダニェツ (年少) (Pakosław Młodszy Awdaniec) (1243 年没) と推定される。レシエク一世死後のコンラートの一連の戦いには、指揮官として参加した。この戦いの後、コンラートによってサンドミエシュの地方長官となる。[IPSB: Pakosław Młodszy h. Awdaniec]。

480) 「ムシチュイ」(Мьстиуи, Мстивой; Mszczuj, Mściwoj, Mściwuj) は、当時、コンラートの陣営に加わっていた、ヴィスリツァ (Wiślica) の城代 (Kasztelan) でサンドミエシュの地方長官でもあった。レシエク一世の側近として頭角をあらわし、かれの死後は寡婦グリミスラワ (Grzymisława) に仕えて、一時は、ヴワディスワフ三世細足公と手を結んだが、このカリシュ遠征ではパコスラフなど他のグリミスラワ派貴族とともにコンラート陣営に付いた。しかし、この政争における立場は定まらず、まもなくサンドミエシュ長官の地位を失っている [IPSB: Mściwoj]。[Папуто 1950: C. 219; Папуто 1968: C. 252] も参照。

481) コンラートがムシチュイを信頼せず使者として派遣しなかつた理由は、前注のような、ムシチュイの日和見的な態度にあったことは明らかである。

【コンラートはカリシュ住民と和を結び、ダニール側は捕虜奴隷を獲得する】

公〔ダニール〕はかれ〔パコスラフ〕を槍の柄で突くと、兜を脱ぎ捨てた。かれら〔住民たち〕は城〔壁〕から〔ダニールに向かって〕叫び声を上げた。「われらは〔あなたに〕仕える、これを受け入れよ。われらは頼む、和を結べ」。かれ〔ダニール〕は大いに笑い、大いにかれら〔住民たち〕と協議をして、かれらから二人の男を連れて、コンラートのところへ行った。コンラートは、かれら〔住民たち〕と和を結び、かれらから人質を取った⁴⁸²⁾。

〔遠征において〕ルーシ人は多くの奴隷と貴族夫人たちを捕虜としていた⁴⁸³⁾。ルーシ人とポーランド人は互いに誓約を交わした。すなわち、もし今後かれらの間に紛争が起こっても、ポーランド人はルーシ人を奴隷として掠奪せず、ルーシ人もポーランド人を〔奴隷として掠奪しない〕ことを⁴⁸⁴⁾。

【ダニールとヴァシリコはカリシェから故郷へ帰還する：1230年初め】

その後、ふたり〔ダニールとヴァシリコ〕はコンラートのところから自分たちの家へと名誉と共に帰還した。【758】ふたりは神の助けを得て、大いなる援助をかれ〔コンラート〕に与え、栄光と共に自分たちの地に入ったのである。〔ルーシの〕地を洗礼した大いなるウラジーミル [06] を別にすれば⁴⁸⁵⁾、他にいかなる公もこれだけ深くポーランドの地に入り込んだ者はい

482) 「人質を取る」(поя<...> таль)とは、相手方(ここではカリシェの支配層)の本人や子弟を手元に置いて、和議遵守の保証とすること。

483) この「奴隷」(челяди)とは、上注 475 でルーシ人が捕獲した捕虜(плѣн)を指しており、奴隷として使役や売買に使うために捕獲したのである。「貴族夫人たち」(боярынь)については高額な身代金が得られる(戦利品)、あるいは高価な奴隷として特にここに記されたのではないか。

484) この段落の、ルーシ人とポーランド人は、ダニール陣営とコンラート陣営を指しており、現在は同盟しているが、今後に紛争(усобица)が起こった場合にそなえて、戦いの主要な戦利品である奴隷(челяди)の扱いについて取り決めをなしたということ。この場合の「掠奪」(воевати)とは戦争による捕虜奴隷の獲得を指している。本年代記の 6789(1281)の記事には「ポーランドの間に次のような掟があった。奴隷として捕獲〔所有〕してはならない、殺してはならない、身ぐるみ剥ぐだけにせよ」(Закон же бѣше в ляхох таков: челяди нѣ имати, ни бити, но лупятутъ), とあり、当時のポーランド人には奴隷捕獲のための戦争という慣習はなかったと推察される。そうであれば、この取り決めは、ダニール(ルーシ人)側に一方的に不利ということになる。今回の援軍のルーシ人による捕虜奴隷捕獲の行為(上注 475 参照)に対して、コンラート側から強いクレームが出され、ダニール側も譲歩せざるを得なかったということだろう ([Пашуто 1968: С. 253] も参照)。

485) これは、『原初年代記』6489(981)年の記事にある「〔ウラジーミル [06]〕はポーランド人のところに行き、かれらの町のベレムィシエリ、チェルヴェンおよびその他の城市を占領した。それらは今でもルーシの支配下にある」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 81][ロシア原初年代記:95 頁]、および 6491(983)年記事の「ウラジーミル [06] はヤトヴァグ人討伐の遠征を行い、ヤトヴァグ人を打ち負かして、かれらの地を占領した」[ПСРЛ Т.1, 1997: Стб. 82][ロシア原初年代記:95 頁]の二つのウラジーミル聖公 [06] の事蹟を考慮にいれているのだろう。

なかった。

【ヴァシリコは結婚式参列のためにスーズダリへ行く：(1230 年 4 月)】

その後、時間が経過して、ヴァシリコ [I112] は、自分の妻の兄弟⁴⁸⁶⁾の結婚式のために、スーズダリへ、大いなる公ユーリイ⁴⁸⁷⁾ [K3]のもとへ出かけた。ミロ斯拉フと他の者たちを伴って行った⁴⁸⁸⁾。

【ダニールによるガーリチ攻略の遠征：1230 年 2 月～3 月】

ダニール公 [I111] がウグロフスク⁴⁸⁹⁾にいた時、ガーリチ人⁴⁹⁰⁾が使者を派遣して、こう言った。「スティ斯拉フはポニジエ⁴⁹¹⁾へ出かけてしまい、王子〔アンドラーシュ〕はガーリチに残っています。できるだけ速やかに来て下さい」。ダニール [I111] は軍兵を集めると、速やかにデミヤンをスティ斯拉フ討伐のために派遣した⁴⁹²⁾。そして〔ダニール〕自身は、小勢の従士たちを

486) このヴァシリコ [I112] にとっての「自分の妻の兄弟」(свой шурин)とは、フセヴォロド・ユーリエヴィチ [K31] を指している(次注)。フセヴォロド(当時 18 歳)はこの時、父のヴラジミル＝スーズダリ公ユーリイ・フセヴォロドヴィチ [K3] のもとにいたのだろう。『ラヴレンチイ年代記』 6738(1230)年の記事によれば、フセヴォロドはスモレンスク公ウラジミル・リュウリコヴィチ [J22] の娘と 1230 年 4 月 14 日日曜日に「聖母首座教会」(おそらくヴラジミル〔クリャジマ河畔の〕の聖母就寝教会)で結婚式をあげている [ПСРЛ Т. 1, 1997: Стб. 453-454]。ヴァシリコはこの結婚式に参列したのである。

487) ヴァシリコ [I112] は、1226 年頃にユーリイ・フセヴォロドヴィチ [K3] の娘と結婚しており、当時のヴラジミル＝スーズダリ公ユーリイは、ヴァシリコにとっては岳父にあたっている ([Дубровский 2015: С. 329] 参照)。

488) この記事に続くダニール [I111] によるガーリチ攻略遠征記事にヴァシリコ [I112] についての記述がないこと、ベレスチエからヴラジミル＝スーズダリまでは遠く、旅行に数ヶ月はかかっただろうことを考慮に入れると、ヴァシリコが結婚式出席のためヴォルィニ地方に不在であったときに、ダニールは遠征を試みたと考えられる。

489) ブク川中流域に位置する「ウグロフスク」(Угровеск)は、当時のダニール [I111] の支配する西ヴォルィニ地方の主要な城市のひとつだった(上注 77 参照)。

490) ガーリチ人貴族の中のダニール [I111] 支持派、ダニールのいわゆる「支持者たち」(приятели) (上注 222 参照) が使者を派遣したのである。

491) 「ポニジエ」(Понизье)はドニエストル川下流地域の諸城市をさしており、かつてはムスチ斯拉フ武運公 [J51] の支配地域だった(上注 415 参照)。1228 年のムスチ斯拉フ公の死によって、この地の支配権がスティ斯拉フに移ったということだろう。以下の記事で、遠征軍の報を聞いたスティ斯拉フはすぐにガーリチに戻っていることから、かれはガーリチから下流のさほど遠くない防備の薄い城市にいたと考えられる。

492) ダニールの側近貴族で千人長デミヤンについては上注 127 を参照。当時のガーリチの実質的な支配権はスティ斯拉フが握っていたため、かれを討伐するため歴戦の千人長デミヤンが指揮する主力部隊が派遣されたのである。

ともなって、ウグロフスクからガーリチへ進軍し、三日目の深夜前にガーリチに到着した⁴⁹³⁾。

他方、ステイスラフはデミヤン〔の軍を〕前にして持ちこたえられないと見て、ガーリチ〔城内〕へと逃げ込んだ。

ダニールはガーリチへ到来すると、ガーリチ〔人たちは〕籠城をしていた。ダニール [I111] はステイスラフの館⁴⁹⁴⁾を占拠した。何とも多くの酒、野菜、糧秣、槍、矢があり、見るも怪しい驚くべき光景だった。その後、ダニール [I111] は、自分の〔配下の〕家来たちが酔いつぶれているのを見て⁴⁹⁵⁾、城市を包囲することをやめて、ドニエストル川の対岸〔左岸〕へと移動した。

その日の夜、ステイスラフは〔ガーリチの〕城市へ駆け込んだ。かれの軍兵のうち【759】捕らえられた者が、ステイスラフはすでにガーリチ〔城内〕にいたと言った。

ダニールは、ドニエストル河岸のウグリニツィ⁴⁹⁶⁾ (Угльницы) に陣を布いていた。ガーリチ人とハンガリー人は〔城内から〕馬で出撃し、氷上で射撃がはじまった。夕方になると、氷が割れ始めて、川が盛り上がり、ドニエストル川にかけた橋が燃えた。無法の悪のセミヨンコ (Семьюнко)、赤毛の狐のような男の仕業だった。

【ポンジエに派遣されていたデミヤン軍の本隊がガーリチに到着し、総攻撃の準備をする】

デミヤンがすべてのガーリチの貴族たちとともに、〔すなわち〕ミロスラフ⁴⁹⁷⁾ (Милослав, Мирослав), ヴワディスワフ⁴⁹⁸⁾ (Володислав) など多くのガーリチの貴族たちとともにやって来た。ダニール [I111] はこのことを喜んだ。橋については、どのようにドニエストル川を渡った

493) ウグロフスク (現在のポーランドのウフルスク (Uhrusk)) からガーリチまで直線で 254km もあり、これを三日行程で走破するのは、かなりの速駆だったはずである。

494) 「ステイスラフの館」(двор Судиславль)の所在について詳細は不明だが、トレグーボヴァの作図によれば、ドニエストル川右岸に面した丘の麓にあり [Древнерусское градостроительство 1993: С. 128], ダニール [I111] が左岸から渡河したすぐのところに位置していた。そこから南に 6km ほど行ったところがガーリチ城市である。

495) この個所は、イパーチイ写本が исполнился (酔いつぶれている), フレーブニコフ系写本が исполнился (一杯になっている) と異説がある。ここでは、ダニールの家来たちが酒類を掠奪・痛飲して戦闘に使えなくなり一時的に撤退した、と解釈できる前者の読みを採用した。

496) 「ウグリニツィ」(Угльницы)の所在について、ウクライナ語訳索引では、ドニエストル川右岸にある陣営の場所として、ガーリチ城市から 10km ほど離れた現在のクーキリニキ村 (Кукільники) に同定している。

497) これは、父ロマン [I11] の代から仕えてきたダニールの側近貴族ミロスラフ (上注 47 参照) のことだろう。ただし、イパーチイ写本では Милослав, フレーブニコフ系写本で Мирослав と綴りの異同がある。

498) この「ヴワディスワフ」(Володислав) は、ヴワディスワフ・ユリエヴィチでこの個所が初出。ダニール支持派のガーリチ貴族だが、その後、ダニールを騒乱の首謀者として裏切るようになる。

らよいのかと憂いていた。ダニール [I111] は橋のところに押し寄せると、橋の端のところは火が消えているのを見て、大いに喜んだ。翌日、ウラジーミル・イングヴァレヴィチ⁴⁹⁹⁾ [I224] が到来して、橋を渡って、ドニエストル河岸に陣を構えた。

【ガーリチの住民はダニール軍の大軍に包囲されて疲弊し、城市を明け渡す：1230 年 3 月】

翌日、起床すると、ダニール [I111] は〔ガーリチの〕城市を馬で巡り、ガーリチの地の〔兵士たちを〕集めると、〔城市の〕郊外の四つの地点に布陣した。〔ダニールは〕兵たちを、ボプロカ⁵⁰⁰⁾〔川〕(Боброка) から、ウシツァ川⁵⁰¹⁾ (Ушина) やブルート川⁵⁰²⁾ (Прут) にいたる〔地から〕集め、大軍をもって〔ガーリチ城市を〕包囲した。かれら〔ガーリチの住民は〕疲弊して、城市を明け渡した⁵⁰³⁾。

【アンドラーシュ王子はガーリチ城を出て、ハンガリーへ行く。スティスラフはハンガリー人にガーリチ奪回を使囀する】

ダニール [I111] は城市を受け取ると、アンドラーシュ王の親愛を思い出して、かれの息子〔アンドラーシュ王子〕を解放し、かれをドニエストル川〔の河岸〕まで連れて行かせた。かれに同行して〔城市を〕出たのはスティスラフひとりだった。かれに【760】向かって石礮が投げられ、〔城市から出るがよい、この地の騒乱者め〕と声が上がった。

アンドラーシュ〔王子〕は父と兄弟のもとに向かったが、スティスラフはひっきりなしにこう言っていた。「さあ、そなたたち〔ハンガリー人〕は出陣してガーリチを攻めるがよい。ルーシの地を取るがよい。出陣しないのなら、〔かれらは〕力を増してわれらに対抗するだろう。」

499) 「ウラジーミル・イングヴァレヴィチ」(Володимир Ингваровичь)[I224] はここが初出。ダニール [I111] によってメジボジエに追いやられたヤロスラフ・イングヴァレヴィチ [I122] (上注 442) の年少の弟と推定され、兄と同じくボニジエ地方にいたと考えられる。この度は、ダニールの臣下として遠征に召集されたのだろう。

500) 「ボプロカ川」(Боброка, Бобрка) は、ルグ川(Луг) (ガーリチより上流のドニエストル川左岸支流) の支流で、その河口はガーリチからだ北西方向に 47km ほど離れている。

501) 「ウシツァ川」(Ушина, Ущица) はガーリチより下流のドニエストル川支流で、その河口はガーリチからだ東南東方向へ 186km も離れている。

502) 「ブルート川」(Прут) の上流域を指しており、ガーリチからだ 60km ほど南下した一帯になる。ダニールはかなり広域から兵を徴集したことになる。

503) 当時の攻城戦の戦法としては、大別して①兵糧攻め、②奇襲攻撃、③強攻、の三種類があったが、ダニールは①の大軍で包囲して籠城側が疲弊して降伏させる方法を選んだ[БЛДР-5: С. 498]。かれにとってガーリチは父の地の城市であることから、破壊や殺戮は避けたのではないか。

【ハンガリー王ベーラ四世のガーリチ遠征：1230 年夏】

ハンガリー王のベーラ王⁵⁰⁴⁾(Бѣла-риксь)が、大軍とともに出陣した。かれはこう言った。「ガーリチ城市が立ちゆくことはないだろう。誰もわしの手から救われたことはないのだから⁵⁰⁵⁾」。

かれ〔ベーラ王〕がウゴル(ハンガリー)の山脈⁵⁰⁶⁾に入ったとき、神はわれらを助けるために大天使ミハイルを派遣し、天の窓が開かれた⁵⁰⁷⁾のである。馬は溺れ、人は小高いところに助けを求めた。かれ〔ベーラ王〕はしかし、〔ガーリチの〕城市と土地を自らのものにしようとしゃにむに進んだ。ダニール [П111] は神に祈り、神は強き者たちの手から〔ダニールを〕救ったのである。

【ベーラ四世はガーリチ城市を包囲する。籠城側の千人長デミヤンは降伏せず：1230 年夏】

〔ベーラ王は〕〔ガーリチの〕城市を包囲すると、軍使を派遣した。軍使は大声で呼びわり、こう言い放った。「大いなるハンガリー王の言葉を聞くがよい。デミヤン⁵⁰⁸⁾に欺されるな、〔かれは〕『神がこの地からわれらを救い出す』などと言っている。お前たちの〔公〕ダニール [П111] は『決してこの城市がハンガリー王の手に渡されることはない』と言って、神に依り頼んでいるが、そのようにはならない⁵⁰⁹⁾。〔王であるわしは〕何度も他国へ遠征をしたが、いったい誰がわしの手から、わしの軍勢から救われたのか⁵¹⁰⁾」。

しかし、デミアンは意志を固め、かれ〔王〕の威嚇を恐れなかった。【761】

504) 「ベーラ王」の原語 Бѣла-риксь はラテン語の Biela rex を音写したもので、ハンガリー王 (король угорьскыи) のベーラ四世を指している。かれは 1235 年から、父親のアンドラーシュ二世の共同統治者として「王」の称号を名乗るが、年代記記者は、おそらく攻城戦の記述を聖書のエピソード(次注)と合わせるために、外来語の「王」(рикс)の称号をここで用いている。なお、本年代記では риксの称号はベーラ四世に対してのみ使われている。

505) このベーラ四世の言葉は、旧約『列王記下』18:35 からの引用である。下注 510 を参照。

506) 「ウゴル(ハンガリー)の山脈」(горы угорьскыи) はカルパチア山脈を指している。

507) 「天の窓が開かれた」(отворити хляби небесныя) の表現は旧約『創世記』7:11 に典拠があり、ノアの箱舟のエピソードの大洪水を引き起こした雨を指している。ここでは、神による懲罰の比喩になっている。

508) 以下の記述から、ダニールの側近で千人長のデミヤンが包囲されたガーリチの防衛の指揮を執っており、ダニール自身はポーランドもしくはポロヴェツの地へ援軍を要請に行っていたことが分かる。

509) このベーラ王の軍使の言葉は、旧約『列王記下』18:28-30 の、アッシリア王センナケリブが、使者ラブ・シャケを派遣して、籠城するエルサレムの民に語った言葉をほぼ忠実に踏まえている。その場合、ダニール [П111] はエルサレムを統治するユダの王ヒゼキアに比定されていることになる [Літопис руський, 1989: С. 387, прим. 13]。

510) この文言も旧約『列王記下』18:35 の使者ラブ・シャケの言葉「国々すすべての神々のうち、その神が自分の国をわたしの手から救い出したか」を踏まえている。なお、同様のエピソードは、旧約『イザヤ書』36:13-15 にも記されている。

【ダニール [I111] は援軍を引き連れてガーリチへ駆けつける。ハンガリー軍の非勢】

神はかれを援助した。ダニール [I111] は、ポーランド人⁵¹¹⁾とコチャン (Котян) 配下のポロヴェツ人を連れて来た。他方、王のもとにもベゴバルス⁵¹²⁾ (Бѣговарѣс) のポロヴェツ人がいた。

神はかれら〔ハンガリー王〕にファラオの災いを下した⁵¹³⁾。〔ガーリチ〕城市はますます堅固になり、ベーラ〔王〕は疲弊した。かれ〔王〕は自分の家来たち、多くの武装兵と騎兵を見捨てて、城市から離れた。〔残されたかれらに〕多くの住民が攻撃を仕掛け、川に落ちる者もいれば、他に撃ち殺される者も、負傷する者も、捕虜に獲られる者もいた。あたかも「スキルト川は住民に対して悪しき遊びをなした⁵¹⁴⁾」と書かれているように、ドニエストル川はハンガリー人に対して悪しき遊びをなしたのである。

【ベーラ四世はガーリチから撤退する：1230 年夏～秋】

〔ベーラ〕王はそこからヴァシレフ⁵¹⁵⁾ (Василев) へと行き、ドニエストル川を渡ると、プルート川方面へと向かった。神は懲罰を加えて、天軍はかれらを撃ち、こうしてかれらは死んだ。ある者は靴の靴底が抜け、他の者は馬に踏みつけられて死に、別の者は火を囲んで座り、肉を

511) ポーランドにおけるダニールの「支持者」パコスラフ (上注 456 参照) が派遣した援軍と推察される。

512) 1227 年にエステルゴム大司教ロベルトによって洗礼を受けることを願い出たポロヴェツ人の首長の息子として「ボルツ」(Bortz, Борту) (表記は Brut, Bauch, Bruch, Boricius などのユレがある) という名がラテン語史料に記されており、1228 年には実際にかれとその臣下のポロヴェツ人たちが洗礼を受けている。パシュートは、時期的にも合致することから、このベーラ四世の軍に加わっていたポロヴェツ人「ベゴバルス」(Бѣговарѣс) は、ハンガリー王に臣従した「ボルツ」と同一人物であると推定している。[Пашут 2011: С. 577-578]。実際、研究者によれば「ボルツ」の名は語源的にチュルク語の Bars, Borč, Burč と関連付けることができ、Беро-Варс と同定できる可能性は高い。[Пилипчук Імена кипчаків 2017][Kovacs 2005 pp. 257-278]。

513) 「ファラオの災い」(рана Фараонова) とは、旧約『出エジプト記』第 7 ~ 11 章に記されている、神がモーセに約束し、ファラオとエジプトに下された様々な懲罰 (災い) のことを指している。

514) 『ヨハネス・マララス年代記』スラブ語訳、第 17 書からの引用。エデサの都市がスキルト川 (Skirtos) の氾濫で荒廃したとき、流されてきた石板に書かれていた文言とされる ([Мешерский 1978: С. 84] 参照)。スラブ語翻訳文献『ギリシア・ローマ年代記』にも当該の個所がある [Летописец Еллинский и Римский Т. 1, 1999: С.358] (上注 324 も参照)。

515) 「ヴァシレフ」(Василев) は、ドニエストル川右岸の現在のチェルニウツィ州のヴァシリウ村 (Василів) に相当する。ただし、ベーラ軍はヴァシレフの対岸 (左岸) までたどり着いて、この地点でドニエストル川を渡河したということだろう。ヴァシレフは、ガーリチから 100km ほどドニエストル川を下ったところに位置し、プルート川の上流までおよそ 30km ほどと近い。アンドラーシュ王子はプルート川の上流域からカルパチア山脈を越えて、ハンガリー平原に入る帰路をとったと推定される。

口にしようとしたところで死んだ⁵¹⁶⁾。多くの様々な災いによって死んだ。天の窓が開かれて⁵¹⁷⁾溺れた者もいた。

こうして、かれ〔ペーラ王〕は、ガーリチ貴族の不忠誠ゆえに撤退した。ダニール [II11] は神の御心によって自らのガーリチ城市を保持した。

516) 敵の軍兵の死の様子についてのこの記述は、旧約『出エジプト記』のファラオに下された様々な災い（上注 513 参照）を踏まえていることは確かだが、描写そのものは聖書のテキストに依拠するのではなく、独自で滑稽なかたちで書かれている。

517) この表現については上注 507 を参照。

参考文献

- Баскаков 1985 — Баскаков Н.А. Тюркская лексика в «Слове о полку Игореве». М., 1985.
- БЛДР Т. 5: ГВЛ — Галицко-Волынская летопись / Библиотека литературы Древней Руси. Т. 5: XIII век. СПб., 1997. С. 184-357, 482-515.
- Войтович 2006 — Войтович Леонтій, Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.
- Войтович 2011 — Войтович Л. В. Границы Галицко-Волынского государства // Русин. Международный исторический журнал. Кишинев, 2011. — № 3 (25). — С.5-26.
- Волощук 2011 — Волощук М. “Филя древле прегордыи” / *Fila supruniensis*. Маловідомі сюжети з історії Галицької землі першої половини XIII століття // *Actis tertantibus*. Вип. 20. Львів, 2011. С. 189–196
- Гильфердинг 1950 — Онежские былины, записанные А. Ф. Гильфердингом летом 1871 года. 4-е изд. М.; Л., 1950. Т. 2.
- Головко 2001 — Головко О. Б. Князь Роман Мстиславич та його доба. Нариси історії політичного життя Південної Русі XII – початку XIII століття. К., 2001.
- Горovenko 2011 — Горovenko А. В. Меч Романа Галицкого. Князь Роман Мстиславич в истрин, епосе и легендах. СПб., 2011.
- Грушевський 2005 — Грушевський М. С. Хронологія подій Галицько-Волинської літописі // Грушевський, Михайло Сергійович. Твори: у 50 т. Львів, 2005. Т. 7., С. 327 - 387.
- Грушевський ІУР-2 — Грушевський М. С. Історія України-Руси: Т. 2. XI-XIII вік. К., 1992.
- Грушевський ІУР-3 — Грушевський М. С. Історія України-Руси: Т. 3. до року 1340. К., 1993.
- Домбровский 2015 — Домбровский Д. Генеалогия Мстиславичей: Первые поколения (до начала XIV в.). СПб., 2015.
- Древняя Русь-Хрестоматия Т. 2 — Древняя Русь в свете зарубежных источников: Хрестоматия. Т. 2: Византийские источники. М., 2010.
- Древнерусские летописи, 1936 — Древнерусские летописи. / Перевод и комм. В. Панова. Ред. В. Лебедева. Статьи В. Лебедева и В. Панова. М.;Л., 1936. (Серия «Рус. мемуары, дневники, письма и материалы»).
- Древнерусское градостроительство 1993 — Древнерусское градостроительство X – XV веков / Под общей редакцией Н. Ф. Гуляницкого. М., 1993.
- Жития царя царей Давида— Житие царя царей Давида (на груз. яз. "Цховреба Мепет-Меписа Давитиси")/ Рус. пер.: свящ. И. Зетеишвили // Символ. 1989. № 40. С. 273-300. (<http://www.vostlit.info/Texts/Heilige/Georgien/XII/David/frametext1.htm>)
- Истрин 1994 — Истрин В. М. «Хроника» Иоанна Малалы в славянском переводе Репринтное издание материалов В. М. Истрина. Подготовка издания, вступительная статья и приложения М.И. Чернышевой. М. 1994.
- История Иудейской войны 2004 — «История Иудейской войны» Иосифа Флавия. Древнерусский перевод / А. А. Пичхадзе, И. И. Макеева, Г. С. Баранкова, А. А. Уткин. Москва, 2004. Т. I.
- Котляр 2005 — Галицко-Волынская летопись: Текст. Комментарий. Исследование / сост. Н.Ф. Котляр, В. Ю. Франчук, А. Г. Плахонин. под ред. Н. Ф. Котляра. СПб., 2005.
- Лавренченко 2015 — Лавренченко М. Л. «Приятели» русских князей (По текстам летописей за XII век) // *Славяноведение* № 2, 2015. С. 96 - 108.
- Летописец Еллинский и Римский Т. 1, 1999 — Летописец Еллинский и Римский: Т. I. Текст. СПб., 1999.
- Литвина, Успенский 2013 — Литвина А. Ф., Успенский Ф. Б. Русские имена половецких князей;

- Междинастические контакты сквозь призму антропоники М., 2013.
- Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- Літопис руський, Показчик— Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989 (Іменно-особовий показчик С. 465-520; Географічно-археологічно-етнографічний показчик С. 529-577).
- Майоров 2008 -- Майоров А. В. Из истории внешней политики Галицко-Волынской Руси времен Романа Мстиславича // Древняя Русь. Вопросы медиевистики. 2008. № 4 (34). С. 78-96.
- Мещерский 1958 — Мещерский И. А. История иудейской войны Иосифа Флавия в древнерусском переводе М.; Л. 1958.
- Мещерский 1978 — Мещерский Н. А. Источники и состав древней славяно-русской переводной письменности IX—XV веков. Л., 1978.
- Мургулия, Шушарин 1998 — Мургулия М.П., Шушарин В.П. Половцы, Грузия, Русь и Венгрия в XII-XIII вв. М., 1998.
- Орлов 1926 — Орлов А. С. К вопросу об Ипатьевской летописи / Известия Отделения русского языка и словесности. 1926, Т. 31. С. 93—126.
- Пашуто 1950 — Пашуто В.Т. Очерки по истории Галицко-Волынской Руси. М., 1950.
- Пашуто 1968 — Пашуто В. Т. Внешняя политика Древней Руси. М., 1968.
- Пашуто 2011 — Пашуто В. Т. Русь. Прибалтика. Папство: Древнейшие государства Восточной Европы. 2008, М., 2011.
- Пилипчук 2014 — Пилипчук Я.В. Хан Котян и его род // лы Даланыц тарихы: түріктер мен моңғолдар. Астана, 2014. С. 62-66.
- Пилипчук Імена кипчаків 2017 — Ярослав Пилипчук Імена кипчаків у європейських джерелах, 2017: http://www.medievist.org.ua/2017/03/blog-post_22.html
- Поппэ 1996 — Митрополиты и князья Киевской Руси / А. Поппэ // Подкальски Г. Христианство и богословская литература в Киевской Руси (988 – 1237 гг.). СПб., 1996. С.443-497.
- Православная энциклопедия Т. 1-45 — Православная энциклопедия: Т. 1-45, М., 2000-2015. (Электронная версия <http://www.pravenc.ru/>)
- ПСРЛ Т. 7, 2001 — Летопись по Воскресенскому списку. (Полное собрание русских летописей. Том VII) М., 2001.
- ПСРЛ Т. 10, 2000 — Летописный сборник, именуемый Патриаршей или Никоновской летописью (Полное собрание русских летописей. Т. 10). М., 2000.
- ПСРЛ Т. 40, 2003 — Полное собрание русских летописей: Том 40. Густынская летопись. СПб., 2003.
- Рапов 1977 — Рапов О.М. Княжеские владения на Руси в X - первой половине XIII в. М., 1977.
- Раппопорт 1982 — Раппопорт П. А. Русская архитектура X-XIII вв. М., 1982.
- Срезневский I-III — Срезневский И. И. Материалы для словаря древне-русского языка по письменным памятникам. Т. I-III. дополнения. СПб., 1893-1903. Репринт: Graz, 1971.
- СЭ-1 — Славянская энциклопедия: Киевская Русь — Московия. Том. 1. М., 2001.
- Толочко А. 2007 — Толочко А. П. Известен ли год рождения Даниила Романовича Галицкого? // Средневековая Русь. Вып. 7. М., 2007. С. 221-236.
- Щавелева 2004 — Щавелева Н. И. Древняя Русь в «Польской истории» Яна Длугоша (книги I-VI): Текст, перевод, комментарий. М., 2004.

- Holly 2007 — Holly, Karol. *Princess Salomea and Hungarian–Polish Relations in the Period 1214–1241*. Historický Časopis. 55 (Supplement), Bratislava, 2007. pp. 5–32
- IPSB — IPSB (INTERNETOWY POLSKI SŁOWNIK BIOGRAFICZNY) <http://ipsb.nina.gov.pl/Home>
- Kovacs 2005 — Kovacs Sz. A Bortz, Cuman chief in the 13th century // *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*. Vol. 3 (58). Budapest, 2005, pp. 255-266.
- Perfecky 1973 — Perfecky, George A. *The Galician-Volynian Chronicle*. Munich: Wilhelm Fink Verlag, 1973.
- Pritsak 1982 — Pritsak O. The Polovcians and Rus' // *Archivum Eurasiae medii aevi*. vol 2, 1982. p. 321-380.

- イパーチイ年代記(1) — 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(1)―『原初年代記』への追加記事(1110～1117年)」『富山大学人文学部紀要』(61号, 2014年8月) 233～268頁。
- イパーチイ年代記(2) — 中沢敦夫, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(2)―『キエフ年代記集成』(1118～1146年)」『富山大学人文学部紀要』(62号, 2015年2月) 287～353頁。
- イパーチイ年代記(3) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(3)―『キエフ年代記集成』(1146～1149年)」『富山大学人文学部紀要』(63号, 2015年8月) 329～389頁。
- イパーチイ年代記(4) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(4)―『キエフ年代記集成』(1149～1151年)」『富山大学人文学部紀要』(64号, 2016年2月) 321頁～372頁。
- イパーチイ年代記(5) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(5)『キエフ年代記集成』(1151～1158年)」『富山大学人文学部紀要』(65号, 2016年8月) 221～308頁。
- イパーチイ年代記(6) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(6)『キエフ年代記集成』(1159～1172年)」『富山大学人文学部紀要』(66号, 2017年2月) 191～298頁。
- イパーチイ年代記(7) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(7)『キエフ年代記集成』(1172～1180年)」『富山大学人文学部紀要』(67号, 2017年8月) 169～268頁。
- イパーチイ年代記(8) — 中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(8)『キエフ年代記集成』(1181～1195年)」『富山大学人文学部紀要』(68号, 2018年2月) 181～279頁。
- イパーチイ年代記(9) — 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈(9)『キエフ年代記集成』(1196～1199年)」『富山大学人文学部紀要』(69号, 2018年8月) 217～265頁。
- ロシア原初年代記 — 國本哲男, 山口巖, 中条直樹訳『ロシア原初年代記』, 名古屋大学出版会, 1987年。

〔後記〕本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果であり, 共同執筆者, 今村栄一は名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院ウズベキスタンサテライトキャンパスにプロジェクト調整員として所属している。

